
地方都市物語・5・氷点下15度のイブ

asami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地方都市物語・5・氷点下15度のイブ

【Nコード】

N2207A

【作者名】

asami

【あらすじ】

刑事である東十無は人ごみの中でアリアに会うが気持ちを素直に表せない。

アリアはヒロに指示され旭川へある目的のため、探偵事務所へ男装して坂本周さかもとしゅうとして潜り込み東昇の助手として働く。

一方、十無は上司から見合いを強制され…。
雪のクリスマス。

1・すれ違い

十二月にもなると、デパートではクリスマスツリーの飾り付けがなされ、夜の街は電飾に彩られて華やかな雰囲気になる。

賑やかなのは嫌いではないが、自分が楽しめないとすると、それはただ騒がしいだけだ。

盆や正月は勿論、そういった行事にはまともに休みが取れたためではない。それに、この年末年始にかけては、犯罪は減るところか増える一方だ。こんな時期くらい静かにしてくれないだろうか、つい思ってしまう。

東十無の場合、所帯を持っているわけではなし、そのことが苦にはならないのだが、この状態がこれから先ずっと続くのだと思うと、味気ないような気がして少し憂鬱になった。

夜遅い帰宅途中、十無は寄り添って歩く若いカップルとすれ違い、なんとなしに彼らを目で追っていた。

結婚なんて夢のまた夢だ。

そんなことを考えると、一人の少年の顔がおのずと頭に浮かび、十無はそれをかき消すように首を横に振って小さくため息をついた。何を考えているのだ。

「なに、背中を丸めて歩いているの」

ふいに背後から、聞き慣れたアルトの声がして、ポンと背中を叩かれた。十無は立ち止まり後ろを振り返った。

今、かき消したばかりの悩みの種、アリアだった。

コートに両手を突っ込んで首を縮めて歩いていた十無は、やつれた姿を見られてしまって決まりが悪く、「お前は元気そうだな」とぼそぼそと話して頭をかいた。

「刑事さんは元気じゃないみたいだね」

いつもの黒いサングラスで、表情はあまり読み取れないが、アリアが悪戯っぽく笑っているのはわかった。

「誰かのせいで、仕事に追われて疲れきっているからな」

「まるで、世の中の事件を私一人で起こしているような言い方」

十無が嫌味を言っても、アリアは妙に上機嫌だった。何か良いことでもあったのか、それとなく訊いたら、アリアは、「うん、まあね」と、十無の顔を見上げて素直に答えた。

アリアが喜ぶこととってどんなことだろう。十無が全く想像がつかずに黙っていると、アリアのほうから教えてくれた。

「クリスマスは旭川へ行くことになったから」

「そうか……」

なんだ、アリアはクリスマスにはいないのかと、十無は内心がっかりした。いてもどうせ一緒に過ごせるはずもないのだが。

アリアにとって、その地には何か想い入れがあるのだろうか。決まって寂しそうに俯き、でも懐かしそうに話す。

「刑事さんも来る？」

「俺？ この忙しいのに急に休みが取れるわけがないだろう。……って、なにを言っている。どうして泥棒のお前と北海道へ行かなければならないんだ」

アリアの意外な誘いに、一瞬、顔がほころびそうになり、十無は慌てて難しい顔を作り不機嫌に答えた。

残念そうに「そうだよな」と、アリアは地面に向かって呟いた。

男物の上質なグレーのハーフコートを羽織っているが、小柄で細身なアリアの拘ねたような仕草は、女性のようにも見える。

十無は可愛いと思った。が、その感情をかき消すように、額に手を当てて頭を横に振った。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

コートの裾が触れるくらい間近で、十無の顔を覗き込むようにして首を傾げているアリアがいとおしく、十無は抱きしめたい衝動に駆られたが、一步後ずさり、離れることで自分を制した。

何を考えている。こいつは男だ。しかも、窃盗犯だ。たとえ初め

て会ったときに女性の姿をしていたとしても。

十無が心の中で葛藤していると、アリアは「じゃ」と片手を挙げて、くるりときびすを返し、振り向きもせずに反対方向へ足早に行ってしまった。

アリアが側にいた右側の腕の辺りが、触れたわけでものに火照ったような感覚が残っていた。きっと、本当に触れたら電気でも走るのではないか、こんなことで動揺してまるで中学生並みの反応だなと思い、十無は一人で苦笑した。

だが、一体何をしにきたのだろうか。まさか人ごみをうるついでスリの『仕事』の最中だったのだろうか。そう思って、アリアが行った方向に再び目をやったが、もう姿は見えなかった。

あいつ、今本当にここにいたんだよな。

アリアのことを考えていて、幻でも見たような気がした。何気なく、再び両手をコートポケットに突っ込んだ。十無の右手に何か硬いものが当たった。それは手のひらに乗る位の、見覚えのない白い小箱だった。

箱を開けると、手回しの小さなオルゴールが入っていた。

銀色のシリンダーがむき出しに見えるつくりで、オルゴールの中身だけのようなものだ。

手のひらの上で回すと、反響せずにシリンダーを弾くパチンパチンという音がして、雑踏の中で耳を澄ますとやっとなメロディが聴こえた。それはよくある『星に願いを』の曲だった。

「アリアの仕業か」

手先の器用なアリアはスリがうまい。十無に気付かれずにコートのポケットに小箱を滑り込ませるのは造作もないことだろう。小箱には小さなカードも入っていた。

『少し早いメリークリスマス。A』

「そっけないな」と、口では呟いていたが、思わぬ贈り物に、十無はついにやけてしまった。

「わざわざこれを渡すために来たのだろうか。昇ではなく、この

俺に」

十無ははつとした。知らず知らずのうちに、自分は昇に対抗意識を持っていたのだろうか。

確かに、刑事である十無は他にも対応しなければならぬ事件があり、そうそうアリアにばかりかまけてはいられない。

その点、昇はというと、雇われ探偵業で時間はある程度融通が利く、というか無理矢理利かせている。

今までもアリアが旭川へ行けば何かと理由をつけて、強引についていく。昇は思ったらじつとしていられない性分で、積極的に行動しているから、どうしたって昇のほうがアリアという時間は多いのだ。それに、自分は刑事という立場もあり、諦め半分、どうにもならないという思いもある。しかも相手は男だ。

ある程度自分の地位を築いた今、二十代前半の頃のように、何もかもかなぐり捨てて自分の気持ちをアリアにぶつける勇氣は十無にはなかった。

小さい頃から何をしても比べられる双子の兄弟。数分違いで兄だという十無は、すっかりしたよくできる兄という立場を自ら作りあげて確立し、常に優位にいた。

だが近頃は、自由奔放な同じ顔の双子の弟、昇が妬ましく感じることがある。

十無は無意識に、デパートの装飾品売り場の方へ足を向かせていた。

十無のコートの右ポケットにはアリアからのオルゴールの小箱、左には閉店間近のデパートで迷いながら衝動買いした赤いリボン付きの小箱が入っていた。

昇には知られないようにしなければと、やや緊張して顔をこわばらせながら、自宅マンションのドアを開けてたがいまと言った。

「兄貴？ 今日遅かったな」

八畳ほどの居間では、コタツに入ったままの昇がやけににやつい

た顔で出迎えた。そして、テーブルには十無が貰ったのと同じ、白い小箱があった。

「おい、それ……」

「なんと、これはアリアがくれたんだ」

嬉しそうに、昇は小箱をそつと開けて中のオルゴールを見せてくれた。それは十無の物と全く同じで、カードまでも同じ内容だった。昇がそれをコタツテーブルの上に置いて手回しすると、手のひらの時とは違って小さな割にはよく響いて綺麗な音色を奏でた。

十無はがっくりと気落ちしたのだが、平静を装ってポケットから小箱を取り出し、テーブルの上にトンと置いた。

「これって……」

昇が目を丸くした。

「俺もさっき、アリアから貰ったんだ」

「なんだ、そういうことか」

今度は昇が肩を落としてため息をついた。

十無も苦笑しながら、コートを脱ぐと、向かい合わせに座り、コタツに入った。

「紛らわしいことをするなよ」

誰に言うでもなく、昇は呟いた。

全く同感だ。何故わざわざ別々に渡す必要があるのか。昇と俺は同じアパートに住んでいるのに。

曲まで同じだなんて、ぬか喜びした分、ショックが大きい。魔法が解けて、日常に戻されたシンデレラの気分だ。だが、シンデレラのように、その後王子様が再び現れるなんてことはありそうもなかった。

「兄貴も、一人で喜んでいただろう？」

「べつに……」

十無はポーカークォフェイスで返したが、昇は内心を見透かしたように苦笑している。

さて、つい買ってしまったプレゼントは一体どうしたものか。

少し奮発してしまったので、気軽にお返しといってアリアに渡すにはためらわれる代物だ。それに、どうしてこんな物にしてしまったのだろうと、十無は今更ながら後悔した。男から男にネックレスなんて。到底渡すことができない。

十無はコトのポケットに入れたままの小箱のことを考えて深いため息をついた。

2・渡せない贈り物

アリアは自分が罪作りな贈り物をしたとは、微塵も思っていないかったし、勿論、悪意があるわけではなかった。

東兄弟に渡したオルゴールは、悩んだ末にやっと選んだ物だった。

泥棒である自分がクリスマススプレゼントを渡すこと自体、おかしいかもしれないとは思ったが、回りの女性から貰うのではと思うと、何かをしたかった。

十無は仏頂面で愛想が悪く、昇はお調子者だが、二人とも長身で鼻筋も通っていて切れ長の瞳をしている。

黙っていれば外見は男前だ。きつと職場ではもてるに違いない。だからといって、そうそう高価なものを渡しても変に思われる。悩んだ挙句、男性に贈るには可愛らしい、オルゴールになってしまった。

何がどうなるわけでもないけれど、自己満足だな。

アリアは十無のコートのポケットに小箱を滑り込ませた後、自嘲するように苦笑した。

これからヒロにいわれた仕事のために、旭川へ行かなければならない。

今回は柚子も友達と約束があるといって一緒には来ないし、クリスマスは少し寂しいけれど、あっちで一仕事したら、ヒロとゆっくりスキーでも楽しもうか。

アリアはそんなことを考えながら、マンションへ帰ったのだった。

翌日、アリアがまだ眠りにについている早朝に、インターホンが鳴った。

眠い目をこすりながら、布団から顔を出して壁掛け時計を見ると、まだ七時前だった。

玄関先から、柚子の驚いたような声が聞えてきた。

昇ではなかったのかと思いいながら、アリアが服に着替えていると、

柚子が好奇心一杯の顔で、ぱたぱたとスリッパの音を立てて、部屋に飛び込んできた。

「十無が来たわよ。何かあったの？　こんな早い時間に来るなんて」
「……さあ」

アリアはサングラスをかけながら、とぼけた返事をした。
あったと言えばあったのだが。昨夜、小箱を渡したことくらいか。柚子はそのことを知らないし、何を言われるかわかったものじゃないので、アリアは絶対に知られたくなかった。

案の定、勘の良い柚子は「ふうん、そう」と、疑い深そうにアリアを見つめた。

アリアは顔を見られて悟られないように、柚子の視線を避けて、さっさと玄関へ行った。

「どうしたの？」と、十無におはようも言わずに、アリアは唐突に声をかけた。

「いや、たいした用事じゃないんだが。ちょっといいか？」
十無はこちらを覗いている柚子の目が気になっているようで、話しづらそうだ。

アリアはコートを羽織って十無とマンションを出て、近くの公園まで歩いた。

十二月とはいえ、住宅街の庭先には鉢植えの花も咲いており、今朝は日もさして暖かった。

銀杏の葉はすっかり落ちてしまい、寂しい感じがした。アリアはやはり雪がないといつまでも秋のような気がしてしまうのだった。

「……オルゴールありがとう」
「音がきれいでしょ。つい買ってしまったから」

自分でも変な言い訳だと思ったが、アリアにはそれ以上良い言葉が思いつかなかった。

「いつからあっちへ行く？」

「今日の午後」

「そうか、朝に来ておいてよかった。早い時間に悪かったな」

「何か用だったの？」

「うん、まあな」

十無は目を合わせずに両手をコートのポケットに突っ込んで何か言いたそうにしているが、はっきりしない。

「アリア、」

十無が言いかけたとき、タイミング悪くアリアの携帯電話が鳴った。「ごめん」と十無に断って仕方なく電話にでた。

ヒロからの、飛行機の到着時刻を確認する電話だった。

アリアは手短かに用件だけ伝えて直ぐに電話を切った。

十無に何の話かと聞き返したが、「ヒロも行くのか？ 悪さをするなよ」

と、冗談めかして言うと、「じゃ、俺はもう仕事に行かないとならないから」とちらりとアリアの方を振り返ってから、職場へ行ってしまった。

何を言おうとしたのだろう。

アリアはいつもの習慣で、携帯電話を持ってきてしまったことを悔やんだのだった。

3・坂本周

旭川へ向かう機中でも、アリアはずっとそのことが気になっていた。

十無はわざわざオルゴールのお礼を言いに来てくれたのだろうか。でも、泥棒と仲が良いなんて知れたら迷惑がかかってしまうかもしれない。

何を馬鹿なことをしてしまったのだろう。あんなことしなければ良かった等と、アリアは気が紛れるものがなくてつい、余計な心配をしてしまった。

雲の切れ間から見えてきた白い大地を小さな窓から覗き込みながら、アリアはため息をついた。

この気持ちはもう表に出してはいけない。

アリアは頭の中を切り替えて、今回ヒロに指示されている『仕事』のことに集中することにした。

まずは音江探偵事務所に、アルバイトとして潜り込まなければならぬ。

ヒロが予め用意してくれた、坂本周さかもとしゅうという二十歳のフリーターになりすます。

実在する男の名前を借りる、その方が嘘は発覚しづらい。

当の本人は東京にいて、かち合うことはまずない。その辺はヒロが調べてあるのだ。

書類に目を通して念入りに生年月日などを確認したあと、アリアは再びそれを鞆にしまって、到着するまでの間、仮眠を取った。

「二十歳だつて？ 見えないな、本当なのか？」

東昇が目を見開いた。

旭川の音江探偵事務所に、東昇が何故いるのだろうかと訝しげに思いながら、正体がばれやしないだろうかとやや緊張した面持ちで

古びたソファに座っている男　坂本周、もといアリアの正面に、昇はどっかりと座っていた。

昇は音江探偵事務所所長を差し置いて、履歴書と坂本周の細面の男臭さが無い顔とを見比べて品定めを始めたのだ。

音江所長はその横で眉間にしわを寄せている。

「東君、君は向こうで仕事を続けてくれ。担当していた浮気調査はいつになったら書類が整うのだね」

「いやー、なかなか尻尾を出さなくて。あの夫、絶対に怪しいんですが」

「調査期間は終わっている。今までのところでもまとめてくれ」

「でも所長……」

「文句を言うな、さっさとかけられ」

「あの奥さん、きつと納得しませんよ。旦那の浮気の証拠をしつかり掴んでやるって息巻いていたから。あーあ、女性の調査員が少なすぎるんだよ。女性同伴の方が自然な感じで近づけてうまくいくんだよな。この前もうまくまかれてアウツだし。女の子を雇ってよ、所長」

「そうは言っても、きつい仕事だから女の子は直ぐ辞めてしまおうし」「僕は男だから採用してもらえませんか？」

「ああ、失礼したね。面接の途中だったのに。紹介状持参でお越しただいているのに申し訳ないが、この不景気でね、アルバイトもそうそう簡単には雇えないんだよ」

品の良い口髭を生やした音江所長は、人の良さそうな優しい瞳を曇らせて言った。

確かにあまり経営状態はよくないようだ。

ビルの三階にある事務所は隙間風が入ってくるのがわかるし、古びたソファはスプリングが効いていなかった。

繁華街に近くて立地だけはいいようだが、依頼人がそう多いようには見えなかった。

「僕は時給が低くてもかまいません。北海道に憧れて来たので、ま

だごちらのことにも疎いですし。それに探偵業というものにもとても興味があつて、見習いでいいです、何でもします、是非雇ってください」

ここで働けなければ、元もこうもない。アリアは身を乗り出して、音江所長に懇願した。

「所長、こいついいかもしれない。細くて女顔だから女の格好で俺の仕事を手伝うつてのはどうだろう？ 薄給でいいんだつたら、ためしに雇つて、使えなかつたらそこで不採用つてことで」

「まあ、そうだな。そこまで言うのなら。とりあえず、採用期間とつうことでよければ。坂本君、東君に付いてやってみなさい」

「ありがとうございます」

昇に助け舟を出されて何とか第一関門を突破できたが、昇の助手は勘弁してほしいとアリアは思った。

おまけに、女性の姿になつたらいくらなんでも昇に正体がばれてしまつだろう。

だが、まず雇つてもらわないことにはどうにもならない。

アリアは複雑な心境だったが、何とかなるさと樂觀的に考えることにした。

「これ、着ないとだめですか」

「当たり前だ、さつさと着て来い」

採用期間ということで、昇のアシスタントとして働くことになつたアリアは、その日の夜に早速尾行に同行することになつたが、黒のワンピースとロングヘアーのかつらを昇に突きつけられて困り果てていた。

「これも仕事のうちだ。かつらで顔は隠れるから、遠目で女に見えたら大丈夫」

昇にそう言われて、アリアは渋々、事務所奥の所長室で着替えた。五分後には黒いパンストの、すらりと伸びた細い足をスカートからぞかせながら、アリアは俯いておずおずと昇の前に姿を見せた。

「……お前、充分女で通るぞ。しかし、化けたな」

正体がばれやしないかと、どきどきしているアリアの側に近寄り、昇はへえーと感心したようにうなずいた。

「だけど、どこかで会ったことがあるような……」

「それより、パットがあつた方が良いと思いますが」

アリアは全く膨らみのない胸の辺りを指差しながら、おどけたようにそう言っってはぐらかした。

「ああ、そうだな。いくら女に見えてもそればかりはどうしようもないからな」

はははと笑っている昇の反応に、気が付かれなかったようだ、アリアは内心胸をなでおろした。

アリアはその後、化粧を施して、昇が用意したパットをつけた。益々女装が板に付いてしまい、どう見ても男には見えなくなってしまうため、アリアはわざと大股で歩いて仕草も極力女らしくならないように気をつけた。

それは、ややこしく、何重にも嘘を重ねての至難の業だった。

混乱する。かなり気をつけなければ尻尾を出してしまいそうだ。

だがここまでしたからには、何が何でもやり遂げよう。

アリアは背筋を伸ばして気を引き締めた。

4・仕事

「周、その大股は止める。折角女に見えるんだから、もう少し気をつけろ」

「やっているつもりですが、難しいものですね」

並んで歩きながら、昇にそう耳打ちされ、アリアは頭をかきながら苦笑した。

「まあ仕方がないか。にわかには化けた割には上出来だ」

「でしょう？ 学生時代は演劇部にいたんですよ。さすがに女役はしたことがないですが」

「見てくれは女役もできそうだが、ま、やらなくて正解だったな。動いたらオカマだ」

「やっぱり？」

女性の姿でも女に見えないことに、アリアはうまく『女装している男』をこなせて喜ぶべきか複雑な心境になり、開き直ったようにからからと笑った。

「おい、もうちょっとおしとやかに笑え」

「東さん、勘弁してください」

「しっ、旦那が鼻の下を伸ばして出て来たぞ」

ターゲットである恰幅の良い年配の男が、会社から出てきたのを目で追いながら昇はそう言うのと、とたんに鋭い顔つきを見せた。

仕事の中ではこんな真面目な顔をするのかとアリアは意外に思った。普段、アリアのマンションに顔を出す時はちやらんぼらんで下っ端のチンピラのような昇だが、一度仕事になると変わるものだなとアリアは感心しながら昇を見た。

「おい、何をぼおつと突っ立っている。相手に付かず離れず歩くこと。いいいな？」

「はい！」

昇の厳しい口調に、アリアは思わず威勢の良い返事をしてしまっ

た。

「しっ」

「すみません」

「いいか、本当は複数でマークしないとうまくいかないんだが、何せ人手不足で、俺達だけだ。ここでこちらの存在に気付かれたらそれでおしまいだ。慎重に行動しろ」

昇は前を向いて歩きながら真剣な顔でそう注意したが、昇の口から『慎重に』などと言う一番似つかわしくない言葉が飛び出し、アリアは吹き出しそうになった。

「何がおかしい？」

「いえ、別に」

アリアは笑いを堪えようとするほど尚更涙が出てきてしまい、慌ててハンドバックからハンカチを出して目頭を押さえた。

「おい、なにをしている」

「いえ、すみません」

「あいつ、小料理屋に入るのか。経費が高くつくな」

昇は舌打ちし、男に続いて店へ入った。

いらっしやいませと、にこやかに迎えた着物姿の店員に、昇はひそひそと何かを伝えると、店員はアリアの方をちらりと見て意味ありげに微笑み、奥の座敷へと案内してくれた。

「あの、東さんは何て言っただんですか？」

「あれか。人目につきたくないので、奥の個室が良いと言っただのさ。ちよつと周の方を目配せしてからな」

昇は声を潜めて言った。

「なるほど」

「多分、隣か直ぐ側にあの旦那も通されているはずだ」

その時、「佐藤様、お連れ様がいらっしやいました」と言う声が微かに漏れ聞こえてきた。

「ビンゴだな」

アリア達の方には、爛をしたお銚子とお通しが運ばれてきた。昇

はつまみを二、三品適当に見繕って、いっぺんに持って来るようにと店員に伝えた後、早速仕事に取り掛かり始めた。

「部屋を一つはさんでいるな。さすがに声は聞こえないか。仕方がない、あれをやるか」

昇は小型ワイヤレスマイクをジャケットから取り出し、感度を確認してから、背広を脱いでネクタイを緩め、わざと髪をくしゃくしゃにして頬に薄っすらと頬紅で赤みをつけて、アリアにウインクして部屋を出て行き、大胆にもそのまま一つ向こうの襖を開けて入っていた。

何を考えているのか、姿を見られたらまずいのではないか。

一体どうする気だろうかと、アリアははらはらしながら隣の部屋に聞き耳を立てていた。

「いやーお二人さん、間違えて悪かった」

昇の上機嫌な声が聞こえ、どかどかと直ぐに部屋へ戻ってきた。

「うまくいったぜ」

昇は悪戯っ子のように瞳を輝かせてアリアの横に座った。イヤホンをつけて、大丈夫だと大きく頷き、アリアにもそれを聞かせてくれた。イヤホンからはつきりと男女の会話が聞こえてきた。

「ようし、これで逃がさないぞ。後は二人の写真だけだな。ほら今のうちに食っておけ」

アリアはどんなことをしてきたのかと訊きたくて仕方なかったが、昇にせかされて取りあえず運ばれてきたホツケの開きをやっつけた。

「おい、もう出るみたいだぞ。料理がもつたいない、急いで食え」

そう言いながら、昇もト口をほおぼっている。

隣が部屋を出てから、一呼吸おいてアリア達も支払いを済ませ、店を出たが二人の姿はもうない。

「歩いてホテルへ向かっているようだ。くそっ、どっちへ向かった？」

「東さん、こっちです」

アリアは角を曲がったところで手招きをすると、昇は慌てて走り

寄り「馬鹿、大声を出すな」と、こつんとアリアの頭を小突いた。

「すいません、つい」

「まあいい、見失わずに済んだ」

どうにか気付かれずに尾行でき、ターゲットは繁華街のはずれにあるラブホテルへ入った。周りには店らしいものはなく、アリア達は出入り口付近が見える雪深い歩道にそのまま立っているほかなかった。

「あーあ、二時間、いや三時間コースかな。寒いから、覚悟しろよ。ほら、カイロを入れておけ」

「ありがとう。凄いな、色々な物が入っているんですね」

「当たり前だ、それにカイロは必需品だ。この寒空の下じゃ、冗談じゃなく凍傷になる。今夜は氷点下五度だからまだ暖かいほうだが」
以前、一緒に旭川へ来た時には雪道をまともに歩けなかったのになと思うと、知ったかぶりをしている昇が滑稽で、アリアはまた笑いがこみ上げてきた。

「どうも気に食わないな、何をにやついている？」

「いえ、なんでもありません」

両手を口にあてがい、暖めるような仕草をしてアリアは表情を隠した。

「東さんは旭川の人ですか？」

「いいや、今回の調査対象者が旭川へ出張の度に浮気相手と会っているってことで来ただけさ。住まいは東京だ」

「そうですね、わざわざ。こちらの調査員に頼めば済むことでは？」

「自分がかかわった件は最後までやらないと気がすまない」

「意外ときっちりしているんですね」

「引つかかる言い方だな、会ってまだ一日もたっていないのに、俺の性格が分かるのか？」

「いえ、所長が……」

「所長め、余計なことを吹き込みやがって」

昇はそう言って舌打ちした。

「ところで、『東さん』はよしてくれないか。双子の兄がいて苗字で呼ばれることに慣れていないんだ。昇でいい」

「わかりました」

十分もじつと立っていると、じわじわと体の芯まで冷えてきた。二十一時を過ぎ、今夜は雪も降らず、冷え込みも厳しくなってきたようだった。

アリアはコートのポケットに入れたカイロを握り締めたが、寒さでじつとしていられず、その場で足踏みをした。

「ちよつと待っている」

昇はそう言い捨てて、何か思いついたのか、走って行ってしまった。十数分後、昇は車を調達してきた。

「どうしたんですか、この車」

「ちよつとそこで借りてきた」

近くにある車の運転代行業者から、無理を言っただけで幾らか支払い、借りてきたのだという。昇のそういう強引さには感心する。

相手をうんと言わせてしまう会話術、これも一種の特技だろうか、アリアは車に乗り込みながら、素直に感心した。

「ホットココアだ、あつたまるぞ」

「気を使ってもらってます。でも、どうして僕にはココアなんですか？」

昇はブラック珈琲を手にしていたが、アリアにそう聞かれると、答えに困ったようにうーんと唸り、「お子様だから」と言ったので、アリアはドキツとした。

それはいつも、アリアに向かって言う昇の口癖だった。

「あれ？ 誰かにもこんなことを言った気がする」

「きつと、誰にでもそう言っているんでしょう？」

昇はそうかなと呟き、缶珈琲を一気に飲みほして、暫し沈黙していたが、

「将来探偵になりたいのか？」

と、唐突に質問してきた。

「いえ、そういうわけではないですが」

「こんな所でバイトをしていたら、将来を棒に振るぞ」

「それはあなたの体験からですか」

「きついことを言う。まあ、その通りなんだが。なんとなく学生時代からバイトしていてそのままいついてしまったようなものだからな」

たわいもない話しをして二時間が過ぎ、アリアはいつの間にか眠ってしまったのだった。昇に揺り動かされてアリアが目を覚ました時には、辺りはまだ薄暗かったが時計は午前七時をまわっていた。

「お泊りコースだったようだ、お陰で少し明るくなって絶好のシャッターチャンスだ」

「すいません、僕眠ってしまっ」

「この次からは、しっかり起きていてもらっぞ」

昇はそう言っ、アリアに優しく笑いかけた。

昇はサボり癖のある問題調査員だから、所長も手を焼いていると言っ、十無がよくため息をついていた。

しかし、実際は違った。

仕事中の思い切った行動や、相方への気配りを目の当たりにし、今まで知らなかった昇の別の面に触れて、アリアは今まで大きな誤解をしていたと感じたのだった。

それに、昇は仕事を楽しんでいるようで、瞳が生き生きとしているのだ。

「おっ、二人が出てきたぞ。周、俺に抱きつけ！」

言っている意味が分からず、ぼやっとしていると、昇に肩を掴まれてアリアはそのまま強引に昇の胸に押し付けられた。

車のフロントの物陰に置いたカメラのシャッター音が車内に響く。

昇はリモコンで操作して、両腕はアリアをしっかりと抱き締め、髪を撫でている。

カシャカシャとシャッター音が連続して聞こえる中で、アリアは昇に抱き締められて、何故かどきどきしていた。

5・命令

署長からかなりの難問を命令され、東十無は朝から憂鬱なため息をついていた。

「命令と受け取ってくれて構わない、特別休暇だと思って行ってきてくれ」

この忙しい時期に呼び出され、何事かと思いながら上司の机の前に赴くと、署長は気持ち悪いほどの上機嫌の笑顔で、十無に台紙に挟まれた一枚の写真を渡しながらそう告げた。

「いいお嬢さんだ、旭川方面本部署長の娘さんで、交通課に勤務しているそうだ。聞くとところによると、君と同級生だとか。悪い話じゃないと思うがね」

「どういうことですか？」

話が飲み込めず、十無はきよんとしている。

「わかるのか、東君もそろそろ身を固めた方が何かといいだろう。先方が是非にといってきたている、またとない縁談だ。幸い大きな事件も起きていないことだし、明日にでも早速旭川へ行ってくれ」

「旭川まで行くんですか！」

「そうだ。まさかお嬢さんをこちらへ呼ぶわけにはいかんだろう」

十無は旭川行きということを知り、真つ先にアリアに会えるかもしれないという、微かな楽しみに嬉しくなったが、署長に「頼んだぞ」と思いつきりドンと強く肩を叩かれて我に帰り、見合いは簡単に断れない事態になっていると感じたのだった。

「いったい、何を頼むと言うのだ。勝手に話を進めておいて。結婚なんて全く考えていないのに。」

「だいたい、旭川の署長と旧友だからといって、部下の結婚にまで口出ししないでほしいと、心の中では抗議していたが、所詮、縦割り社会、上司は絶対だった。」

十無は到底気持ちを出すことはできず、わかりましたと返事を

するよりなかった。

6・誤解

誰もが肩をすぼめて前かがみになり、足早に目的の場所へ急いでしまつような、一段と冷え込んできた夕暮れ時。

旭川の中心街にあるガラス張りの建物内に、黒い皮のタイトミニスカートから惜しげもなく足を出し、ロングブーツにカシミヤの黒いロングコートをまとった、ひときわ目立つ長髪の女性が立っていた。

外からでも思わず目を惹く派手な服装のその女性は、待ち人がいるのか、腕時計に何度も目をやっていった。

「なにやってるのかしら」

それは女怪盗のDだった。

彼女は腕組をし、苛々した口調で呟きながら、硝子越しに外を覗いている。

そこへ、いつものサングラスをしたアリアが、息を切らして走ってきた。

「遅くなつてすいません」

「どうしたのよ、三十分は待ったわ」

「これが精一杯。突然電話してきて旭川に着いたから、直ぐに迎えに来いなんて無茶だ」

「だって、アパートから車で直ぐじゃないの？」

「私は今探偵事務所に働いているから、定時には終わらないよ。今日は朝まで張り込みでくたかったし」

アリアは少し声のトーンを落とし、「それに変装したままでは会えない」とDの耳元で付け加えた。

「あら、変装したままでも良かったのに。見たかったな、アリアちゃんの変装」

「面白がらないでください。Dと会っているところがもし事務所の人に見られたら面倒だから、そんなことできません」

「いいじゃない、恋人とでも言っておけば」

「こんなに年上の……それに、旭川に来たばかりということになっているのに」

Dが『こんなに年上』と言う言葉に反応し、細い眉がぴくりと動いたのがわかったのでアリアは慌てて言葉を濁した。

「まあいいわ、今夜アパートに泊めてちょうだい」

「だから、まずいんですって。ホテルに泊まってください」

「嫌よ、広々とした所が良いの」

「じゃあ、ツインの部屋でもとつたらいいじゃないですか。それに、首を突っ込まないでください」

「冷たいのね」

Dは思いつきり拗ねている。

今回は柚子がいないので余計なことに口を挟まれなくて、やれやれと思っていたら、もっと私たちの悪い大御所が来てしまった。

ヒロの仕事仲間ということ、そうむげにもできず、アリアは対応に困った。

「本当にアリアちゃんって女の子？ 私の気持ちかわからないの？」

「訳のわからないことを言わないでください」

Dのことを良く知るほど多くは会っていないし、大した話しもしたことがないのに、そんなことを言われても、とアリアは思った。

「さあ、今日は飲むわよ。だから付き合って」

「勘弁してください、明日も仕事で朝が早いです」

「だめ、返さないわよ」

アリアはDに肩を抱かれて飲み屋街へ強制的に連れられていった。

Dは他人に我がまを言っただけ甘えるような人ではなさそうなのに、何かあったのだろうか。

確かにDは妙にはしゃいでいるようだ。だが、変装して事務所に潜り込んでいる状態では、それにかまけていられるほどアリアには余裕がなかった。

困ったと思いつつながら、アリアが何気なく横を向くと、車道を挟ん

だ反対側の歩道に、東十無を見た気がした。

まさか……十無は東京にいる。それとも、昇だったのか？ でも昇だったら、まず黙ってはいない。こちらに来て声をかけるだろう。他人の空似だろうか。

アリアは気になったが、Dに引っ張られてしまい、仕方なく居酒屋の暖簾をくぐった。

だが、それは見間違いではなかった。旭川に着いたばかりの東十無だったのだ。

「なんだ、綺麗な女性と楽しそうにしているじゃないか」

そう呟いた十無はその場で立ち尽くし、肩に何かが重くのしかかったように感じたのだった。

十無は見合い目的で旭川へ来たことを昇やアリアに知られたくなくて、昇にも連絡を取らずにこっそりホテルを予約していた。

そして、さつさと見合いを済ませたら、あわよくばアリアに会って食事でもしたいという甘い期待を抱いていたが、その考えは一瞬のうちに砕け散った。

十無は頭のどこかで、アリアはきつと女だから女性と親しくなるということは全くありえないと決め付けていたため、男だという現実を突きつけられ、かなりショックを受けたのだった。

アリアだって彼女がいてもおかしくはない。ヒロがアリアに好意を寄せているからといって、アリアが必ずしも男が好きだということにはならない。

「見合いか、吹っ切るには良い機会かもしれない」

いい娘だったら、本気で考えてみようか。

何をしても大きな失敗を体験したことがない十無は、傷つくことを恐れて無難な道を選んでしまうのだった。

自分でもそれを自覚しているが、どうしてもそこから一歩踏み出すことができないのだ。

「どうせどうにもならない」

十無は諦めの言葉を呟いて小さくため息をつき、重い足取りで予約

しているビジネスホテルへと向かった。

7・愛する人

「アリアちゃん、聞いてる？ ヒロって酷いと思わない？」

小上がりの一番奥のテーブルに陣取って、ヒロへの不平不満をと
うとうと語り続けながら、くだを巻いているDの横で、アリアはじ
つと聞き役に徹して相槌を打っていた。

もうずっとこの調子だが、Dの話しはとりとめもなく、同じ話しの
堂々巡りだった。

アリア自身が関わりのない『仕事』上のトラブルや、『仕事』のや
り方への注文、考え方の違いなど、それらはアリアが聞いても到底
理解できなかつた。

ただ、その話しの中で、Dはヒロが好きなんだということだけは確
信できた。

「ヒロって、都合のいい時だけ転がり込んできて、ふいといなくな
るの。いる間はべったり甘えてきてこれでもかって言うくらい優し
くて、でもそれがいけないのよ。……きっとそういう都合のいい女
が沢山いるのね。そうやってみんなヒロを甘やかしてきたのよ」

ヒロは気まぐれで、今までも幾度となく女性を泣かせてきたのをア
リアは知っていた。

だが、彼女達はその結末を知りながらもヒロに惹かれていくのだ。

ヒロには女性を魅了する何かがあるらしいのだが、アリアには理解
できない世界だった。

Dもまたその女性達の一人なのだろうか。

詳しくは話そうとしないのでヒロと何があつたのかわからないが、
いつになく寂しそうで、常に自信に満ちていた瞳は輝きを失い、D
は美しい顔を曇らせていた。

気丈で、人前では決して弱音をはかない、アリアが密かに尊敬して
いるDが、こんなにも脆く崩れるのだ。

そんなDを目の当たりにするのは辛かつた。

ヒロがこちらへ来たら、直ぐに知らせてあげよう。クリスマスを一
人きりにしてあげたい。

ヒロの誕生日もクリスマス前にあることだし、何とかならないだろ
うか。

アリアはできうる限り、Dの恋に協力しようと思った。

しかし、恋とはこうも人を弱くしてしまうものなのか。もし、自分
が恋に溺れたら……自分が変わってしまうような恋なんてしたくな
い。ヒロや柚子と一緒にいられて、穏やかに過ごせたらそれでいい。
恋なんて辛くなるだけだとアリアは思った。

「ねえ、聞いてるの？ 上の空ね」

アリアの顔を覗き込んだDの目が据わっている。

短時間に日本酒を五合は軽く空けているのだから無理もない。

最後に、Dは変わったお酒を飲みたいと言い、アリアが地酒のシソ
の焼酎を頼んだ。

それは、微かにシソの香りがして、口当たりもさっぱりとしていた
ため、あっという間にDのグラスは空いてしまい、Dの酔いとど
めを刺してしまった。

「ヒロが最後に帰るところはアリアちゃんなのよね。特別な、愛す
る人」

Dは頬杖をつきながら、目を細めて妬ましそうな視線を投げかけて
きたので、アリアは「違うよ」と直ぐに否定したが、それ以上、何
と言っていいのかわからず俯いた。

ヒロの気持ちはよくわからない。ヒロの『好き』は他の人より許容
範囲が広いように思う。

多分、自分と同じで寂しがりやだから、誰かに側にいてほしいのだ。

「アリアちゃんはどのなの。誰か好きな人はいるの？」

「そろそろ帰りましょう、飲みすぎです」

矛先が自分に向いてきたので、アリアは話を逸らした。

「なにしかたことを言ってるの。夜はこれからよ。さあ、今度はカ
クテルよ！ アリアちゃんも好きでしょう？」

Dはきつと潰れるまで飲むつもりだ。

とすると、朝までコースに違いないが、それだけは何としても避けたい。

明日の朝、地獄を見そうだ。こうなったら、危険は承知でアパートへ連れて行くほかないだろうかと、アリアが攻略を練っていると、Dはさっさとおあいそを済ませて、次へ行くわよと、手招きをしている。

Dの足取りは意外にもしっかりとっていて、まだまだ飲めそうだった。

朝日を見ないうちに無事、ベッドで休むことができるだろうかと、アリアはかなり不安だった。

8・心の迷宮

アリアよりも背丈のあるDを、抱えるようにして支え、やっとの思いでタクシーを拾ってアパートへたどり着いたのは、午前五時のことだった。

Dをベッドの上にそのまま寝かせたあと、アリアは疲れきってソファに足を投げ出した。

眠るには中途半端な時間だったが、このまま起きているのもきつく、小一時間でも仮眠を取ろうと目を瞑ったが、アリアはやけに目が冴えて眠れなかった。

Dがあんなことを言うから。

「いい？ アリアちゃん、自分を好きになつてくれた人じゃなく、自分が好きな人を選ぶのよ。障害があつても、どんな結果になろうとも。その方が絶対に後悔しないわ」

タクシーの車中で、Dは泥酔しているとは思えないほど真顔で、アリアの手を掴んで真剣な眼差しを向けたのだった。

そんなこと、わかつている。でも、好きな人って……好きって、なんだろうか。ヒロを好き。十無も昇も、それに柚子も。それは、自分にとって大切な人ということか。ただ無性に惹かれる人だろうか。それとも、いつまでも一緒にいたい人のことか。好きって。

アリアは考えているうちに、答えの出ない迷路に迷い込み、段々わけがわからなくなってきた。もやもやとした霧が頭の中にかかり、闇雲に手探りで歩き回っているようだ。

父からは母の浮気相手の子供ではと目の敵にされ、母にも放任されていたアリアは、幼い頃から愛情に飢えていた。

常に誰かに愛されたいという渴望。

愛情を注いでも受け止められず、飢えた心。ヒロが支えになりそれを癒し、全てを受け止めてくれ、孤独から抜け出すことができたのだ。

だが、再び孤独になるのではという不安は、今もアリアの頭から拭い去れないでいた。

今が一番心の安らぎがあつて満たされているはずなのに。

アリアはそれを自覚しながらも、心の奥底に深く根ざしてしまつた孤独から、いつまでも抜け出せないでいた。

ヒロの、家族への愛と愛する人への愛が入り混じつたような特殊な愛情しか知らず、それに翻弄され続けているアリアには、愛するということがどういう意味なのか理解しきれなかった。

ただひたすら包み込むような愛情を欲し、それは母親が注ぐ無償の愛情に近い。

アリアはまだ大人になりきれない子供のようだった。

「柚子はどうしているかな。毎日、友達と楽しく過ごしているだろうか」

外は雪が積もり、車の通る音も吸収され、シンと静まり返つた部屋のソファに横になって色々考えていると、ふと、この世界には誰もいないような錯覚さえして、アリアは急に寂しくなった。

普段一緒にいるのが当たり前になつてはいるが、離れてみるとやはり無性に柚子のことが恋しくなった。

柚子はいちいち口出しをして、それが煩わしく思うこともあるのに。

午前六時、こんな時間に電話をしたら柚子は怒るだろうか。

怒つた声でもいい、今はどんな柚子の声でもきつと気持ちが落ち着くだろう。

アリアは麻薬中毒患者のように、柚子の声を求めた。きっと、今電話が繋がらなければ何度でも繋がるまでかけ直していたかもしれない。

三コールめで、電話を待っていたかのように、直ぐに応答があつた。

「アリア？ 寂しくなつたんでしょ。何かあつたの？」

気持ちを言い当てられたアリアは戸惑い、直ぐに言葉が出なかつ

た。

「もうそろそろ電話が来る頃になって思っていたの。だって、離れた時はいつつもでしょう。アリアはひよっとして今までそういう自覚がなかったの？」

「そう言われればそうかもしれないと、アリアは始めて自覚して、少し恥ずかしくなった。

自分より年下の高校生に、こんなにも頼って依存していたなんて。そう思うと、アリアはなおのこと何も言えなくなった。

「こら、電話を掛けておいて無言なの？ 何か言いなさいよ」

「柚子はくすくす笑っている。

アリアは柚子の予想通りの行動をとってしまったのだ。柚子の手のひらの上で踊らされているようで、段々腹が立ってきた。

「わかった風に決め付けるな。柚子が悪さをしていないか心配になっただけだ」

柚子に向ける苛立ちは、お門違いだとわかっていてもアリアはつい口調がきつくなった。

「へえ、でもこんな早朝に？ そうなの。じゃあ、もう用は済んだでしょ。電話を切るわね」

「柚子は意地悪だ。わかっていて突き放す。

「冗談よ、聞いてあげるから」

黙ってしまったアリアの気持ちを察したのか、柚子は優しくそう言っ、アリアが口を開くのをじっと待ってくれた。

アリアも、悪かったと思い「ごめん」と、小さく呟いてから少しの沈黙の後、話し始めた。

「……柚子には、好きな人っている？」

「え？ そりゃあいるわよ。花の女子高生ですからね」

「変な女子高生」

今時の娘が使わないようなおかしな言い回しに、思わずアリアは笑い、気持ちがあぐれた。

「失礼ね」

「その人のこと、どう思っているの？」

「どうって……好きなのよ。理屈じゃないでしょ。」

「どんな風に好きなの？」

「何よ、レポートにでもまとめて提出しないとイケないの？」

「どうやって好きになったの？」

「それは、出会いを話せて言うこと？」

「いや、違う」

「言いたいことがわからないわ。何を悩んでいるの？」

「……好きってよくわからなくて」

「ええ！ 小学生でもそんなこといわないわよ。アリア、大丈夫？」

「袖子は半分呆れているような、同情しているような情けない声を上げた。」

「でも、わからない」

「困った人ね。好きになることに、何か意味がないといけないの？ 理屈じゃないでしょ。理由を考えるなんて、何か打算しているということよ。私は語彙が貧弱な女子高生だもの好きは、好きよ。それしかないの。それに、迷っているということは、本当に好きな人が現れていないということじゃない？」

「断言する袖子の言葉は、妙に説得力がありアリアの頭の中の濃い霧がすつつと晴れた。」

「無理しないで今のままでいいんだ。」

「それで、誰かのことが気になっているの？ 昇がそっちにいるでしょ。まさか昇と何か……」

「袖子、ありがとう。すつきりした。なんだか眠くなってきた、また連絡する」

「ちょっと、アリア肝心なことを……」

「袖子が話し終わらないうちに、アリアは通話を切った。」

「すつきりしたと同時に、急に襲ってきた睡魔に素直に従って、アリアはソファにずるずると横になり眠ってしまった。」

「手のひらから携帯電話が床に転がり落ちたが、その時にはもうアリア」

アは心地よく深い眠りについていた。

9・周の恋人

案の定、アリアはまだ夢の中で、完全に寝坊したのだった。

Dはというと、膿みを吐露したようにさっぱりして、朝方まで深酒をしたとは思えないほど軽い足取りで寝室を出てきた。

「もう、アリアちゃんどうして化粧落としてくれなかったの。お肌が荒れちゃうじゃないの」

無茶なことを言いながら、ソファで熟睡しているアリアを揺り動かした。

「九時近いけれど起きなくていいの？ 今日仕事なんですよ」

仕事！ その言葉が耳に入るや否や、アリアは飛び起きた。

「どうして起こしてくれなかったんですか！」

「あら、私も今起きたところよ」

Dは欠伸をしながら、暢気にそのままソファに座った。

アリアは壁掛け時計を見ながら、急いで洗面台へ向かって顔を洗ったあと、寝室へ行って筆筒から洋服を引っ張り出して着替え、ドレッサーの前に座ってウィッグをつけ、ちよつとしたメイクをしてあつという間に『坂本周』に変わった。

「そんな簡単なもので凄い変わりようね」

寝室を覗き込みながら、Dは感心しきつたように頷いた。

「僕は仕事に行きますからDも部屋を出てください」

「もう『坂本周』なのね、僕だなんて。私はここで『周ちゃん』の帰りを待っているわ」

「だめです。さ、行きますよ」

すっかり用意の整ったアリアは、寝癖で乱れた髪のDにコートを渡して腕を掴んで玄関へと引っ張った。

「嫌よ、お化粧も直してないのに」

「何処かホテルでやってください」

「じゃあ、周ちゃんが帰る前に、ちゃんと鍵をかけて出て行くから」

勿論、鍵がなくても閉められるから大丈夫」

「鍵の問題じゃないでしょう。そう言っつて、ずるずるいるつもりですわね」

「そんな可愛い顔をして、女性を追い出すようなことを言うものじゃないわ」

「我がまま言わないでください！」

「いいわ、この鍵渡さないから」

いつの間にか、アリアが持っていた部屋の鍵をDは手に入れて、アリアの目の前でぶらぶらとちらつかせた。

「返してください！」

「OKするまで返さないわよ」

玄関先の廊下で、Dから鍵を奪おうとしてもみ合い、アリアが飛びかかった拍子にDはバランスを崩して二人ともその場に倒れこんだ。

「周、何やつているんだ。遅刻だ……」

せっかちな昇は、玄関チャイムを鳴らしたと同時に、玄関に入ってきて硬直した。

昇は、Dの上にアリアが乗っている状態を目の当たりにしたのだった。

「朝からお前……」

「誤解です！」

アリアが起き上がりながら弁解しようとしたが、昇はばつが悪そうに出ていってしまい、追うようにアリアも玄関を飛び出した。

昇はドアの前で腕組をして気まずそうに立っていた。

「いや、何も言うな。人にはそれぞれ事情ってものがある。こんな仕事をしていると色々見てきたからよくわかってる。俺は気にしないから」

アリアが説明しようとする、昇は独り合点して妙に物分りが良いように、もういいからと、アリアの肩をとんとんと叩いた。

「遅刻して申し訳ありません。気をつけます」

「いいさ、そういう日もある。所長にはうまく言っておく。これで貸しが一つできたな」

アリアは玄関ドアを少し開けて、こちらを伺っているDに向かって、

「帰るまで大人しく待っていてください」

と、恨めしそうに釘をさすと「わかったわ、行つてらっしゃい、周ちゃん」と、Dはドアから顔を出し新婚の新妻宜しくウインクをした。

「しかし、お前の彼女って派手系の美人だけれど年上か」

「彼女ではありません」

「隠すなって、別に年上でもいいじゃないか」

昇は人の秘密を覗き見て少し気持ちが高揚したのか、車のアクセルをふかしぎみに運転している。

今朝は日差しが強く、雪に陽が反射してかなり眩しい。二日酔いのアリアにはその眩しさは目に付き刺さるようで辛かった。

「おまえ、だいぶ尻に敷かれていそうだな」

もう、いいように言わせておこう。どうせ、否定しても面白がられるだけだと思い、アリアは反論するのをやめた。

早くこの話題から逃れたかった。

「あのう、夜に三・六街を歩いていませんでしたか？」

「俺が？ いいや、行っていない」

「そうですか、じゃあきつと他人の空似ですね」

「俺に似た奴がいたのか？ 双子の兄貴は今頃東京で、あくせく働いているはずだし。いや、まてよ、万が一ってこともある」

そう言つて昇は車を路肩に止めて、早速携帯電話を取り出して、十無の番号を呼び出した。

応答がない。

「おかしい、出ないことなんてないんだが。何かあったのか、気になる」

電源は切れていないらしい。昇からの電話とわかつて故意に出な

いということか。

「これは怪しい。俺に似た男というのは、もしかして兄貴かもしれない。俺に黙ってこちらへ来ているのか。ようし、探りを入れてやろう」

昇はなにやら何処かへ電話をかけ始めた。

仕事はどうなったのだろう。

待ち合わせの時間までに指定の場所へ着けないのではないか。

アリアの心配をよそに、熱心に電話をしている。こちらにいますという警察勤務の叔父さんや、東京の職場などにかけていたが、途中で突然「お見合い？」と大袈裟な声で叫んだ。

「兄貴は七日間の有給休暇をとって旭川に来ている。それもお見合いをする目的で。どういう心境の変化だろう、当分結婚するつもりはないと言っていたのに。兄貴のことだから、断りきれなかったのか」

十無の見合い相手はどんな人なのだろうか。

アリアは動揺していた。本当に断りきれなくてするのかなどアリアは色々訊きたかったが、それを顔には微塵も出さずに会話を続けた。

「お兄さんはどうして昇に連絡してこないのでしょうか」

「きつと、冷やかされるとでも思っているんだろう。まったく、水臭い奴だ。おつと、待ち合わせの時間に遅れそうだ」

ようやく、昇は仕事のことを思い出し慌てて車を発進させた。

仕事もプライベートも関係なく、興味があることが起こればそれが優先されるようだ。

何にでも思った通りに真っ直ぐに突き進む昇には、きつと悩みなんでないのだろうかと、アリアは少し羨ましく感じた。

10・薔薇とワイン

「またいつもどおり、花束にしようか」

アリアが旭川で坂本周に成りすましている頃、ヒロはアリアへのクリスマスプレゼントを指輪にしようかと銀座の宝石店へ立ち寄っていた。

だが、アリアは変装以外で指輪を身につけることはなく、喜ぶどころか困った顔を向けられることはわかりきっていた。

ヒロは今回も勇気が出ずに、買うのを思いとどまった。

クリスマスにはケーキとワイン、それに薔薇の花束と決まっていた。

そうなったのはいつの頃からだろうか。

洋服や装飾品にしたこともあったが、アリアはいつも困ったように顔を俯かせる。

あの顔を思い出すと、ヒロはどうしても渡すのをためらってしまうのだ。

初めは身を守るため、仕方なく少年という殻に入っていたものを、今ではそれは違和感がなく当然になってしまった、アリアの男装。

ヒロがそうさせたようなものだった。

アリアの母親、ななからアリアを連れ出した時、少年のようだったアリアを、そのまま少年として扱ってしまったことを、今更ながら後悔した。

一緒に住み始めた時に、女性としての生活に戻していたら。

だが当時、二十歳のヒロにはその余裕がなかった。

アリアが次第に打ち解けてヒロを慕ってくるようになるにつれ、少年の姿をしたアリアでも、ヒロはアリアに女性を感じてしまったのだ。

抑えきれない衝動がヒロを悩ませはじめ、義兄、親代わりの保護者として接するには無理が出てきてしまった。

十三歳だったアリアは、いつしかヒロを全面的に信頼し疑うことなくヒロに全てを任せるようになり、ヒロもそれに応えるために、その気持ちを心の奥深くに封印しようとしたのだ。

女扱いしないためにも、泥棒の『仕事』に自然と手を染めるようになっていたアリアに、男装すると身元がわからず『仕事』には都合がいいからと理由をつけて、いつまでも少年の姿を強いたのだ。ヒロの指示が絶対となっていたアリアは、それを忠実に守った。

それは歪みとなり、ヒロには悪い女癖がついた。

ヒロは義兄として慕ってくれるアリアの信頼を裏切るのではないかと恐れながらも、何度となくアリアに気持ちを告白したが、その度にアリアは小首を傾げ、困ったように笑った。

義兄という繋がりがなければアリアとは接点がなく一緒にいられない。

そしてまた、ヒロは自分の気持ちをはぐらかし、アリアに冗談のように愛を囁くことで誤魔化し続けた。だが愛している。

その葛藤の狭間でヒロは恋人のような、親のようなどちらともとれる曖昧な愛情を注いできたのだ。

そして、今では弊害でしかない男装を、今度はあの双子達を近づけたくないために利用している。

アリアを誰にも渡さない。もし、異母兄妹だったとしても。

美原ななから、血の繋がりと聞かされ、一時は身を引こうとも考えたが、あの女のことは信用できないと、ヒロはその不安を抱えたまま、アリアを愛し続ける道を選んでいた。

ヒロは目に付いた喫茶店にふらりと立ち寄って、喫煙席を希望した。

最近、何処の店でもめつきり減った喫煙席は、店の隅のほうへ追いやられていた。

サラリーマン風の客が一人、肩身が狭そうに煙草を吸っていた。

お腹の出っ張りも堂に入り、妻子がいるような、いかにも家庭的そうな隣の席に座るその男を、ヒロは一瞥した。

こいつも早死にしたいくらいだな。

ヒロは頭の中で自分に向かって言うように、その男に心の中で嫌味を吐いた。

守りたいものがあるうちは、死ねないと思う。

だが、いつ死んでもいいと思う気持ちもあり、自暴自棄の行動をとっては考え直すのだ。

矛盾する混沌とした気持ちはヒロ自身、どうすることもできなかった。

やはり、煙草の匂いは消せない。

明日、旭川で会ったら、またアリアに怒られるだろう。

今頃、白銀の街で坂本周として生活しているアリアを思い浮かべた。ヒロは一人で苦笑いした。

今朝から二箱目になる煙草をコートから取り出して火をつけ、ゆっくりと煙をくゆらせた。

11・お見合い

「形式ばったことはいいのよ。同じ大学の同級生でしょう。それに、うちの美希は東さんのことを知っていて、是非にとこちらからお願ひしたのですもの。電話で直接お食事にでも誘っていただけるとありがたいわ」

旭川に着いた翌朝、東十無が緊張しながら挨拶に行った先の、旭川方面本部署長の奥さんは、愛想良くこころと笑いながら、気さくにそう話した。

今日、娘さんは勤務だという。上がってお茶でも、という誘いを丁重に断ると、彼女の携帯電話の番号をメモに書いて渡された。

気の利いた店の一つもわからない北国で、十無はどうしたものかと携帯電話とにらめっこをして、暫く思索していたが、まずは彼女に旭川へ着いたことを知らせることにした。

昨夜、女性と親しそうにしているアリアを見かけて滅入っていた十無は、すぐ彼女に連絡を取る気にはなれなかった。

一夜明け、少し落ち着きを取り戻した今になって、先方に心配をかけてしまったのではと十無はそのことを後悔していた。

眩しい日差しの中、十無は目を細めながら、道路の両脇に降り積もった一メートルはある白い雪山の間を、おぼつかない足取りでゆっくりとバス停まで歩いた。

しかし、どうして俺なのか。学生時代そう目立った存在でもなかったし、多分、話したこともないだろうに。

大学の同級生と聞き写真を見ても、彼女のことはぴんときなかつた。佐藤美希さとうみきの名前を出されても、なんとなく聞き覚えがあるという程度しか覚えていなかった。

思い出そうとしてもそれ以上のことは、彼女と接点がないのではないか。

そんなことを考えながら、十無は停留所についた。

バスを待つ間、教えられたばかりの番号に早速電話をかけた。

「はい」

何回かの呼び出し音の後、唐突に若い女性の声が電話の向こうで返事をした。

「もしもし、佐藤美希さんでしょうか」

「ええ、そうですか……あ、東くん？」

明るくはきはきしたその声は、十無とわかると事務的な受け答えから、慌てた声に変わった。

「仕事中すいません。昨夜遅く旭川へは着いていたのですが、連絡が遅れてしまい……」

「そんなこと！ 気にしないでください。私の我がままでこんな辺鄙なところまで来ていただいたのに。でも本当に来てもらえるなんて！」

十無が話し終わらないうちに、佐藤美希は電話の向こうで耳が痛くなるような大きな声で興奮気味に話し、その緊張が十無にも伝わってきた。

佐藤美希の話し振りに圧倒されながらも、十無が今夜会いましたよとかと誘つと「はい！ お願いします！」という元気な声が返ってきた。

バスに乗ってから、十無は見合い写真に納まっていた佐藤美希の顔を思い出していた。

確か、朱色の振袖を着て大人しそうな雰囲気だった気がしたが、電話の感じでは体育会系の娘だろうかと思像した。

窓から見える、真冬に晴れ渡った青空と、きらきらと陽に反射して輝く雪景色を眺めて、十無は目を細めた。

十無がバスに揺られながらぼんやりしていると、コートの懐にある携帯電話が振動した。取り出して画面を確認すると、昇と表示されていた。

今朝から何度もコールがあったのだが、十無は今回も携帯電話をそのまま懐に戻した。

今は昇と話す気にはなれない。きつと、昇のことだから何処から情報を集め、お見合いのことも、旭川へ来ていることも知れているのだろう。

昇はアリアに会って、もうこのことをアリアに話してしまったらどうか。

だとしても、アリアはたいした関心も示さず、へえ、そうと聞き流したかもしれない。

だが、それは仕方のないことだ。

あいつには彼女もいて、俺はただあいつを追う刑事に過ぎない。

十無は自分に暗示でもかけるように、何度も頭の中でそう繰り返していた。

その頃アリアは、所長から頼まれた尋ね人に関する調査報告をするため、東昇と共に依頼人の指定場所へ赴いた後、午後からは新規の依頼人宅へ車で移動中だった。

「俺は東京から追ってきた浮気調査の書類を作らないとならないのに、余計な仕事までさせられて、今日は馬鹿に忙しい」

「そうですか？」

「ああ。お前がそうやって見張っているから、息抜きもできない」

アリアは音江探偵事務所所長から、昇が脱線しないよう注意してほしいと念を押されていて、昇はそれが面白くないのか移動中にポロリ、ポロリと口から愚痴が飛び出した。

昇が仕事熱心だと思えたのは一瞬だった。

所長が心配するように、昇は事あるごとに脱線した。

旭川にはまだ日も浅いはずなのに、昼飯にと入ったラーメン屋の店員とは顔見知りで、ラーメンの話で盛り上がったかと思えば、駅前に駐車して客待ちをしているタクシーの運転手に通りがけに声をかけ、この前は世話になったね、景気はどうかなどと長々と世間話を始める。

その他、場外馬券売り場やパチンコ屋など、あっちへ寄りこっちへ

寄りしているうちに、待ち合わせの時間ぎりぎりに慌てて車を飛ばすという具合だった。

「これも仕事のうちさ」

アリアがその度に時間を気にして昇の腕を引っ張ると、決まってそう答えが返ってきた。

だが、どう甘くみてもアリアにはぶらぶらとろついているようにしか映らなかった。

報告書だって、やろうと思えばできるのに、暢気な仕事だ。

結局今日一日で二件の仕事に関わっただけだ。それも、午前中は一時間程度しか仕事らしいことはしていなかった。

「着いたぞ」

住宅街にある、平屋のモダンな造りのその家は一般住宅の三区画分はある敷地に、どっしりと構えられていた。

玄関横の駐車スペースはロードヒーティングが施され、きれいに雪が解けていた。

アリアは事前に、浮気調査の新規依頼ときいていたので、依頼人の暗く沈んだ表情を想像していたのだが、玄関先で夫人のにこやかな笑顔に迎えられると酷く違和感がした。

二人は応接室に通されて、まずは温かいお茶でもてなされ、今年の冬は雪が多いので除雪車が間に合わず、家の前に雪山ができてと、その五十代の夫人は近所の井戸端会議でもしているように話し始めた。

アリアはいつ用件を切り出すのかと、じりじりしながら聞き入っていたが、昇は構わず、この雪には困ったものだと言葉を打っている。

「まあ、東京の人なの。旭川は初めて？ こっちは寒いでしょ」

「ええ、婆ちゃんがこっちにいるんですが、小学生の時に一度来たつきりで。最近仕事で来るようになりましたが。でも、家の中はこちらの方が快適ですね。床暖房や、セントラルヒーティングが整った家が多くて」

「そうねえ、こっちはもうあなたくらい年の年でも家を建てられるし、山もあって住むには良いところですよ。お嫁さん連れてこっちへ住みなさいよ」

ひとしきり世間話に花が咲き、四、五十分経過して、昇の嫁さんを紹介するという話しまで広がったところでようやくひと段落し、用件に移った。

夫人が途中で立ち上がり、居間の電気をつけたので、アリアは腕時計に目をやると、四時をまわったところだった。午後三時を過ぎると外はもう薄暗くなってくる。

聞けば、浮気調査といつても形ばかりのもので、しょっちゅうスナックのホステスと浮気をしている夫に灸を据えたいのだという。

「あれは、病気なの。治す薬がないでしょ？ 一人息子が事故で死んでからは一層酷くなってねえ」

夫人は怒りというより夫を同情しているような口振りで、ふうとため息をついた。

「つい話し込んでしまって、ごめんなさいね。あなたくらいの年の子を見ると、息子を思い出しちゃって。生きていれば、同じくらいかしら」

夫人は少し目を潤ませているようだったが、玄関先に二人を送り出した時には、久しぶりに楽しかったわと言って、笑顔を見せた。

「寂しそうでしたね。息子さん最近亡くなったんでしょか」

車に乗り、依頼人の家が見えなくなると、アリアはそのことが気になって昇に聞いた。

「いいや、所長の話しではもう十年にはなるらしい」

「だって、つい最近のことのように……じゃあ、ご主人の浮気って」

「かなり何度も繰り返しているようだ」

「どうして離婚しないのかな」
「それは人それぞれさ、家庭の中のことだ。あの人なりに夫を支えているんだらう。もしかして夫も、夫なりに妻を大事に思っているのかもしれない」

「……僕には理解できない」

「俺にもわからないよ」

ふふんと鼻で笑いながら、昇は呟いた。

浮気って何だろう。最後に戻ってきさえすれば良いものなのか。

一時の迷いだつたと。

でも、あの夫人の夫はもう十年もの間裏切り続けている。

気持ちはそう簡単に割り切れるものじゃないというが、あの夫人は他の女のところへ夫が行っても、愛し続けるというのか。それとも男女の愛はなくなり、経済的に繋がっているだけなのか。

「そうだな、俺たちが五十代になる頃には気持ちはわかるかもしれないな」

「僕はわかりたくないですね、そんな変な愛の形なんて」

「おまえ、あんまり愛に幻想を抱かない方がいいぞ」

「なんですかそれ」

「周の彼女なんか一番危険なタイプだな。見えないところで何をやっているものやら。気をつける。何なら俺が特別に身辺調査してやつてもいいぞ」

「だから、彼女じゃないですって。そんなに気に入ったのであれば、紹介しますよ。口説くなり好きにしてください」

「自分の彼女を提供するとは、随分と自信家だな。だが俺も好きな奴くらいいる」

「どんな人です？」

昇は正面を向いて運転しながら、鼻の頭をかき、「そいつは、男かもしれないが」と、呟いた。

アリアは耳を疑い、そして言葉が出なかった。

自分のことを言っているのか、まさか。

アリアが聞き返そうとした時、昇の携帯電話が鳴った。

「兄貴からだ！」

昇は電話の画面を見て驚き、車を道路脇に止めながら電話にでた。アリアも十無という名前を耳にして、鼓動が速まるのを自覚した。

「兄貴、旭川の何処にいるんだ」

開口一番、昇は真っ先に訊いた。

「……なんだって？ 見合い相手に行けなくなったと伝える？ 俺は使い走りか。都合の良い時だけ連絡して。何度もかけたのに無視していたらどう？ おい、待てよ」

十無は用件を言うと、急いでいるようで、一方的に電話を切ったようだ。

「本当にDが現れたのか？ 見合いが嫌で逃げ出したんじゃないだろうな」

昇は切れた携帯電話に向かって、文句を言っている。

十無は今夜、見合い相手と会う約束をしていたのだが、Dが現れたためそちらへ行くことを優先したらしい。

だが、見合いの彼女に連絡がつかず、やむなく昇に助けを求めてきたのだった。

休暇中だから、Dの件を優先する必要はないのだろうが、行かすにはいられないのだろう。仕事と割り切れない、十無らしいなとアリアは思った。

「……兄貴の尻拭いか。そうだ周、お前行ってこい」

「僕が、ですか？」

「急用で来られなくなったと伝えるだけだ。誰でもいいだろう。駅前まで送るから、頼んだぞ」

昇はアリアの返事も聞かずにそう決めて、駅方面へ車を走らせてさっさとアリアを街中へ降ろして行ってしまった。

「伝えるだけなんだから、待っていてくれてもいいのに。厄介払いされたみたいだ」

見えなくなった車に文句を言いながら、待ち合わせの場所へアリアは渋々向かった。

アリアは十無の見合い相手に会うのは嫌だと思っ反面、どんな人なのかという興味もあった。

デパートの前と聞いてきたが、寒いため、風除けに信号待ちの人

や、バス待ちの人で若い女性が数人立っていた。

お互いに相手の顔もわからず、何せ相手は十無を待っているのだから探すのに苦労する。

片端から声をかけるのも嫌だ。アリアは数分観察し、腕時計を見て人を待っている素振りの女性に声をかけてみた。

「佐藤美希さんですか」

「ええ、そうですけれど」

佐藤美希は怪訝そうに大きな目を見開き、アリアの顔をじろりと見た。

「東十無さんに頼まれて、仕事で急に来られなくなったと伝えるようにといわれて」

「え？ 私、携帯を持っているのに？」

そう言つて、電話を取り出すと電池切れとなっていた。

「私つたら、なんてドジなの」

佐藤美希は酷く情けない顔をして、自分の頭を拳でこつんとはたたいた。

「折角会う約束をしていたのに、本当に申し訳ないと言っていました」

「ついていないわ」

「すみません」

「あなたが謝らなくてもいいわよ。あなた、東君の部下？」

「いいえ、僕は直接お会いしたことはありません」

「じゃ、どうしてこんなことを頼まれたの？」

「十無さんの弟、昇さんに頼まれて」

「ああ、探偵事務所のこと」

なるほどと、佐藤美希は大きく頷いた。

彼女は話す時、腕や顔がよく動く。身振りの大きいのが印象的だった。

「それでは僕はこれで」

「え、行っちゃうの？ ちょっと待って」

「何か伝えておきますか？」

「いいえ、それは後で電話するわ。私、このまま家へ帰るのはとても情けないのよ。両親はもう結婚が決まったかのように喜んでいるし。すっぱかされたと知ったらがっかりするわ」

「そうですか」

「あなた、今夜時間つぶしに付き合つてよ」

「それはちよつと……」

意外な展開になり、アリアは困った。

「可哀想と思わない？ これでもかなり意気込んでおめかしして来たのよ？」

「でも、僕はあなたと面識がないですし」

「あら、このお見合いもそんなもんよ。私のほうは東君のこと知っているけれど、東君はきつと私のことなんか覚えていないわ」

「知り合いませんか？」

「ああ、寒い！ 話しの続きは何処かお店に入ってからにしましょう」

結局、断りきれずにアリアは彼女に付き合うことになった。

12・佐藤美希

「年上のお姉さんは嫌いかしら」

「いいえ、そんなことはありません」

この状況では、そう言うしかないではないかとアリアは内心ふてくされていたが、佐藤美希の機嫌を損ねないように笑顔で答えた。

どうして十無の見合い相手と酒を酌み交わさないとならないのか。一刻も早く帰りたい。

しかし、アリアの思いとは裏腹に、佐藤美希は直ぐに返してくれそうにもなかった。

「周ちゃんは、仕事楽しい？」

「はい、まだ見習いですが」

先ほど名前を告げたばかりなのに、佐藤美希は早速、ちゃん付けでアリアのことを呼び始めた。

初めて会った男に随分馴れ馴れしいなど、アリアはマイナスイメージを持った。

これからきつと、目を改めてお見合いをすることになるだろうに。

精一杯おめかしをしてきたというが、パンツスタイルにゆったりとした生成り色のセーターで、普段着のようだった。

お洒落と言えば、胸元の長い淡水パールの三連ネックレスと、お揃いのイヤリングをしていることくらいか。グレーのコートも、普段から着込んでいるものようだった。

佐藤美希はくつきりした二重の大きな瞳が特徴で、少し低めの鼻は愛らしく、話しをする度に身振りが入るので、軽くウエーブのかかったこげ茶色の髪がその度に揺れていた。

アリアと並んで歩くと、ヒールのあるブーツを履いている分、やや背が高く、学生時代は運動系のクラブをしていたのではと思えるようながっちりとした体形で、佐藤美希は全体的に見て明るく、はつらつとした印象がした。

十無はこういう人が好みだろうか。元氣一杯で好感の持てる佐藤美希は男性に受けそうに思う。

ぼんやりしていて、覇氣のない自分は問題にならないかと、アリアはなんとなく自分と彼女を比べていた。

「周ちゃんは無口ねえ。それともつまらない？」

「い、いえ。少し緊張して」

アリアは日本酒を口にもって行きながら、慌てて否定した。

「街角でナンパした女だと思って気軽にしてよ。あ、でも、女の子に免疫がなさそうね」

「佐藤さんは、今まで付き合ったことは？」

「ねえ、美希でいいわ。ふふ、なんだかあなたとお見合いしているよね。実は彼氏って今までいないのよ。周ちゃんはちょっと私の好みかな。って、嫌な顔しないでよ、冗談だから」

佐藤美希は、面食らっているアリアの背中をドンと叩いた。

二杯目のジョッキを空にして、早くも酔いがまわっているようで、美希の目は潤んでいた。

「私、本当はこんな感じじゃないのよ。もっと静かで、いるかどうかわからない存在なの。周ちゃん、信じていないでしょ？」

圧倒されて口を挟めないアリアに、佐藤美希はひたすら話し続けた。

「学生の時も、大人しくてよく忘れられる存在だったわ。私は合コンの人数合わせに呼ばれる女だったの。本当よ、東君に聞いたらわかるわ。彼はきつと私のことを覚えていない」

三杯目のジョッキが運ばれてくると、彼女は景気よくぐいっと飲んだ。アルコールに強そうには見えないが、ハイテンションで、お見合いがすっぱかされての自棄酒のようだ。

「それで、大学を卒業してから、これじゃだめだっと思って自分を換えようとしたの。だから警察学校の同期生は、明るい私しか知らないのよ。警察学校では何でも率先して行動したから、常に注目さ

れて。自分を変えて正解だったと思う。でも、ずっと自分をつくっているようで、最近疲れてきて」

天真爛漫な性格でもないのか。悩みなんてなさそうだったけれど、彼女なりに色々大変なのかなとアリアは思い、佐藤美希の身の上話に、頷きながらじつと静かに聞き耳を立てた。

「それで、気がつくと二十七歳でしょ。親がお見合いはどう？ なんて言い出して。初めは結婚相手くらい自分で見つけるからとつき返していたけれど、周りにそういう対象になる人っていないのよね。別に理想が高いつてわけじゃないのよ？ 何かこうピンと来ないの」で、お見合いする決心がついたんですね」

「結婚はまだしたいと思わない。でも、彼氏くらいいてもいいかなつて。そう思った時、大学時代の東君を思い出したの」

「好きだったんですか？」

「そう言われると、わからないけれど、心の何処かに引つかかっていたのね。いつだったか、人数合わせで合コンに出る羽目になって、面白くない顔をしていたら、彼が隣に座っていて、君も無理に連れられてこられた口だろう、僕もだよって笑ったの。その笑顔がちょっと良くなって思ったわ。ただそれだけのことよ」

アルコールのせいかな、佐藤美希は頬を赤く染めて、三杯目のジョッキも空けてしまった。

「東君って大人しかったけれど、彼、頭が良くて、見た目も良い感じでしょ？ 目立つのよ。物静かで少し近寄りがたい感じがあつて、女の子はみんな遠巻きにしていたの。私、東君が三回も告白されているのを見たことがあつたの。だから、きつともう結婚していると思つてた」

彼女は軽い気持ちで、東十無なら見合いしてもいいと親に言うつと、あつという間に話しは進み、本当になつてしまったと話してくれた。だが、本当にそうだろうか。学生時代、ずっと十無のことを目で追つていたのではないか。

でなければ、そうそう告白の場面に遭遇しないだろう。

「彼のことがずつと好きだったんですね」

「いやだ、違うわよ」

佐藤美希はぶんぶんと手を大きく横に振って否定し、「本当にちよつと会いたかっただけ。もしかしたら昔の私を知っているかもしれないし、変わっちゃって驚くかな、なんて」と、少し声のトーンが落ち、呟くように言った。

「きつと、彼は驚くだろうね。でも、無理しているあなたより、素直に自分を出している頃のあなたの方が素敵だと思います。素直に自分を出せなくて疲れたのでしょうか？ 周りの目なんかいいじゃないですか。自分がいいと思う生き方で。あなたは充分魅力的です」

「周ちゃんて、年下とは思えないわ」

彼女の始めの元気は何処かへ行き、両肘をテーブルについてアリアを見つめて苦笑した。

アリアはどうして見合い相手に励ましの言葉なんてかけてしまったのだろうと後悔したが、十無のことを彼女はずつと思っていたのだと思うと、彼女と一緒にいてくれたら十無は幸せなのかもしれないと思ってしまうた。

どうせ口出しする立場にはないのだ。

「周ちゃんて、不思議な人ね。始めて会ったのに、色々話してしまつたわ。気が合うのかしら？」

それはきつと、あなたと同じだから。素の自分を出せない辛さ。常に偽っている自分に疲れる時もある。

私は自分を出すことはできないけれど、あなたは頑張つて。

アリアは黙って微笑んだ。

13・Dの犯行

「派手にやられたものだ」

見合いをしていたはずの東十無は、不動産会社社長宅の、ぼつかりと口をあけたままになっている隠し金庫の前で、ため息をついていた。

地元の所轄署が鑑識中だったが、署長から連絡があったのだと十無が伝えると、警官が不思議そうな顔をしながらも現場を見せてくれたのだった。

夕刻に帰宅した家人の妻が、この寝室だけ荒らされていることに気づいたのだという。

窓が割られておらず、侵入口は玄関と思われたが、施錠された状態だったため、寝室に入るまで異変に気がつかなかつたらしい。

「プロの犯行だね」

十無が鑑識の邪魔にならないよう、金庫のドア部分を観察していると、背後から聞き覚えのある声がした。

「お久しぶりですな。東刑事」

「伏見刑事じゃないですか。ご苦労様です」

それは以前、ホテルで行われた祝賀会での騒動の時、一緒に行動していた年配の刑事だった。

「こちらには今回のことですか」

「いえ、偶然私用で来ていたのですが、こちらの署長が知らせてくれて」

「ほお、お知り合いですか」

「ええ、少し」

見合いのことは伏せておきたいと思い、十無は言葉を濁した。

署長が言っていた通り、玄関の鍵のことといい、手口から見てDかもしれないと十無は思った。

「やはりこれは、奴の仕業ですかな」

「多分、間違いないでしょう」

Dの入った現場は、妙に綺麗だ。

プロが入ると目的物の他はほとんど手をつけられていないことが多いが、それにしても部屋の乱れはなく、ごく丁寧に鍵までかけていく。しかし、今回は少し引つかかる。隠し金庫のドアが開け放しのままだ。

隠し金庫は、木目の壁に埋め込まれており、閉めてしまうと全く見えなくなるようにつくりだった。

何か意味があるのだろうか。十無は頭を捻った。

「義賊の真似事でも始めたんですかねえ」

伏見刑事は顎をさすりながら、呟いた。

「義賊？」

「この前のホテルでのことといい、今回もね、何冊かの通帳と一緒にいるんな名前のハンコがここに入っていたんですわ。開いている金庫を見て、奥さんが慌てて警察を呼んだんですがね。呼んでからそれに気付いて、隠そうとしていたところに警察が到着してしまっただということですよ」

「所得隠しですか」

「今、旦那さんを呼んで事情を聞いているところです」

「そうですね」

「ま、他にも現金とダイヤをやられたようですがね。金額をはつきり言わんですよ、これが聞きたびに違う」

伏見刑事は細くて日に焼けたゴボウの様な顔をくしゃくしゃにして苦笑した。

「しかし、行動範囲が東京と旭川に限定しているというのは、おかしな泥棒ですねえ。何かあるんですかね。東さん、もう掴んでいるんじゃないですか？」

「さあ、それはなんとかも」

多分、アリアやヒロが絡んでいるからだろう。二人が移動すると、Dもまたそこに現れる。だが、十無はその情報を伝えなかった。

伏見刑事は間の伸びた、のんびりとした独特の話し方で、鋭いところをついてくる。十無は表情をじっと観察されているように感じ、つい目を逸らした。

「そうですか、あなたなら何か知っている気がしてね。ま、何かわかったら教えてくださいよ。定年までには解決したい事件の一つなんです」

「わかりました」

十無は笑顔でそう答えながら、心臓が飛び出るくらいに動悸がしていた。

何故伝えなかったのだ。アリアをかばっていることになるのではないか。いや、自分自身で解決したいからだ。

十無は心の中で、自分に言い訳をしていた。

14・ファイル

雪が降っていた。それも大粒の牡丹雪だ。こんな日は気温が高い。昼下がり、音江探偵事務所の窓際で、アリアはコピー作業をしながら欠伸したいのを堪えて外を眺めていた。

どうして十無の見合い相手と夜中まで一緒にいなければならなかったのか。

昨夜は佐藤美希につき合わされて、帰宅は午前一時を過ぎたのだ。つた。

そして、アリアが気だるい体を押して出勤したところ、『調査に行つて来るので、書類をまとめておくように』と、昇が走り書きしたメモが机上に置かれていたのだった。

「あいつ、逃げたな」とそれを見た音江所長は苦笑していた。

所長は昇に寛容だ。それに、もう慣れっこのようだ。東京から追っかけてきた浮気調査は、もうすでに終了しており、昇は旭川に用がないはずだった。

所長から頼まれた仕事も今は大きいものはない。一体、何の調査に行つたのだろうか。

「昇さん、もう昼過ぎなのにまだ帰ってきませんね。今頃、何処かでサボっているんじゃないですか？」

「はは、そうかも知れんな。だが、東君も何か考えがあるんだろう。所長はパソコンとにらめっこをしながら、暢気にそう返事をした。午前中の早いうちに他の調査員は皆出払い、事務所には所長とアリアしか残っておらず、静かだった。

本社が旭川で東京は支社ということだが、東京の方が需要はあるのか調査員は多いらしい。

ここの調査員は計七名で、事務員も兼ねている。所長は実際の調査は行かないことになっているが、人手不足の時には出掛けていく。

それに、副所長の長女、音江おとえまき榎と所長は入れ替わりで、本社と支社

を行ったり来たりして忙しいようだ。

「やっぱりまだ娘にすっかり任せるには心配だね。東君が本腰で仕事にかかってくれると安心できるのだが」

所長は昇を信頼しているような口振りで、アリアは昇を片腕とまで見込んでいることが不思議だった。

だが、それはすぐに納得のいく落ちがついたのだった。

「楨が嫌に東君のことを推しているね。あれでも、東京では真面目に働いているのかね」

と、所長はパソコン操作の手を止めて首をかしげたのだ。

アリアは声を上げて笑いたくなつたのを、我慢しなければならなかった。

そんな世間話をしながら、アリアは報告書のコピーと整理を終えたのだった。

「所長、書類は出来上がりでしたが、東さんが帰るまで、東さんが今まで担当した報告書を参考に見ていて良いでしょうか」

「構わないが、持ち出しはしないように」

「わかりました」

所長はCD ROMが詰め込まれた施設してある引き出しの一つを開け、昇がかかわった調査情報の保管場所を教えてくれた。

アリアの予想通り、昇が担当した旭川での調査はさほど多くはなかった。そのうちの一番新しい年数が記載されているものを取り出した。

「これはマスターですか？」

「いや、コピーだ。万が一のことを考えて別に保管している」

「そうですか、破損したら大変だと思って。じゃあ安心ですね」

「でも、慎重に扱ってくれ。マスターは出すのが面倒だね」

「遠いところにあるんですか？」

「そう遠くはないが、東京の分と一緒に旭川の貸し倉庫に保管しているから、出すのが大変なんだ」

「では、大事に扱います」

案外、簡単に聞き出せた。こんなに早く情報が手に入るとはと、
アリアは内心ほくそえんだ。

アリアは最近の調査記録が入ったCDを選び、パソコンにセットし
て中を開き、フォルダを確認した。

ヒロから指示されたこと、それはある情報を消すこと。

アリアは美原という名前を探しが、ファイルはなかった。

画面を見ながら、アリアは少し考え込んだ。

昇は資料作成にかかわっていないのだろうか。だとすると……。

「所長、東さんのファイルは少ないんですね。これだけですか？」

「旭川での仕事は少ないからね」

「副所長のファイルも見ていいですか」

「どうぞ」

アリアはさつき所長が開いてくれた鍵付きの引き出しから、副所
長の名前で収められている一番日付の新しいCDを一つ取り出した。

なかった。何故だ、もう調査は終わっているはずなのに。まだ音
江槿が持ち出しているのか。

「副所長って、色々調査していますね。最近も自ら出向くことがあ
るのですか？」

「弱小事務所だから必要があれば動いている。今も何件か抱えてい
るはずだ」

「大変ですね。確か、東さんと幼馴染で歳も同じくらいでしたね。
若いのに凄いな」

「いやそれが、子供の遊びの域を出ないから困っている。金払いの
良い依頼人がいて継続調査を依頼されたのはいいが、一人で動いて
いて、事務所に報告しないでいる。調査を私物化してはいけないの
だがね。まとめ上げたら報告すると言っていたが、困ったものだ」

アリアはぴんと来た。それはきつと美原なからの依頼に違いな
い。

「でも、二十代で副所長をこなしているなんて。一度お会いしてみ
たいですね。副所長は近々こちらへは来る予定ですか？」

「そろそろ来る時期だな。クリスマスは雪があるところがいいと我がまを言っていたからね」

所長は目を細めた。子煩悩な親だ。所長は娘に甘いのだろうか。多分、仕事も好き放題にやらせているのではないだろうか。娘のことを話す時、困ったといいながら、笑みが絶えない。

「じゃあ、会えるのを楽しみにしています」

音江楨に直接会うしかない。

ファイルのありかを聞き出さなければ。そして、自分に関する情報を全て消さなければならぬ。

アリアは所長に笑顔で話しかけながら、頭の中で今後の策を練り始めていた。

15・対面

東十無はさすがに見合い相手の佐藤美希のことを気にしていた。昨夜はお見合いをすっぽかして現場に行ってしまった。肝心な時に仕事を優先してしまったのだ。

その選択が間違っていたとは思わないが、今回は見合いのために一週間の休暇をもらって旭川に来ているのに、先方に失礼だったと多少、反省していた。

十無は昇がうまく謝ってくれたのだろうかと心配しながら、ホテルの部屋から、朝一番に佐藤美希へ電話を入れた。

「あら、東君。昨日のことは気にしなくていいのよ。充分楽しかったから」

聞けば、昇ではない男が来て、意気投合してそのまま一緒に飲みに行ったのだという。

いくら十無でも、自分の見合い相手が知らない男と楽しく過ごしていたと聞けば、あまりいい気はしなかった。

「東君、焼いてくれるの？」

十無が一瞬無言になると、携帯電話から嬉しそうな声が聞こえてきた。

「行けなかったんだから、俺は何も言えませんが。改めて、今晩会ってくれますか？」

「喜んで」

十無は電話を切つてため息をついた。

「やれやれ。昇の奴、面倒くさがって事務所の人間に伝言を頼んだな。アリアと会えたのかも訊きたいし、事務所に顔でも出すとしよう」

十無は早速音江探偵事務所へ向かった。

十無が事務所のドアに手を掛けて開けたとたん、中から笑い声が

漏れ聞こえてきた。

「いやだ、じゃあ周君は女装させられたの？ 酷いわねえ。そんなの断ったらよかったのに」

「そもいかないですよ。それが採用条件だったから」

「お父さん、周ちゃんがあんまり可哀想よ」

「榎、仕事中は所長と呼びなさい」

十無は賑やかな声が出ている事務所の奥へ黙って入っていった。

音江所長とその娘で副所長の榎、それに見知らぬ若い男が珈񁠭を飲みながら、衝立で仕切られた応接室で談笑していた。「あら、珍しいお客さん。旭川へ来ていたのね。私も今着いたところよ。こちらへどうぞ」

榎が十無に真つ先に気づいて笑顔を見せ、隣へ座るよう十無に勧めた。

「お久しぶりです」

「十無君、同じ顔なのであまり久しぶりの気がしないなあ」
変わらないねえと、十無の顔をしげしげと見ながら、所長が頷いている。

「そんなに似ていますか？」

「ああ、そっくりだ」

十無は気恥ずかしくて、頭をかいた。

「本当によく似ていますね」

所長の隣に座っている若い男も、へええと言って珍しいものでも見るような視線を十無に向けた。

「見習い職員の坂本周くんよ。いま、昇のアシスタントをしているんですって」

「昇のアシスタント？」

「でも、今日は逃げられました」

と、坂本周は眉を寄せ、笑いを堪えながら言った。

「周君は昇にもつたない。私のアシスタントをしてもらいたいわ」
是非お願いしますと、坂本周は笑顔で答えた。十無には二人がす

っかり打ち解けているように見えたのだった。

槿は昇のことが好きだったはずだ。若い男の前だからって、顔を上気させるのはどうか。

十無は槿の態度に嫌悪感を抱いた。それに、坂本周という女性受けしそうな若い男も気に食わなかった。

女はどうしてああいう頼りなさそうな優男が好きなのか。もしかして、昨日の夜、昇の代わりに行った奴というのは、この男なのか。「お見合いの彼女、大丈夫でしたか？」

十無が詮索していると、坂本周のほうから話を振ってきた。

「もしかして君が行ってくれたのか。悪かったね、昇に頼んだことなのに」

「いいえ。楽しかったです」

坂本周は屈託ない笑顔を見せたが、十無にはそれが見合いをする前から相手に愛想を尽かされた男だと、莫迦にされているように感じたのだった。

何が楽しかった、だ。普通これから見合いをするという女と一緒に飲みに行くか。女はみんな自分の方へなびいて来るとでも思っているのではないか。こういう奴は鼻持ちならない。

十無は顔には出さなかったが、男のプライドを傷つけられて陰惨な気持ちになり、坂本周に対して敵意を抱いたのだった。

こうして坂本周は東十無にとって最悪の印象を持って対面したのだった。

16・トラウマ

東十無は待ち合わせの時間よりやや早く、料理屋についていた。アリアを忘れる。そう決めたのだ。

事務所で待っていたが、十無はとうとう昇に会えずじまいだった。アリアが今どうしているか十無にはわからなかったが、この雪の街にすることは確かだった。

でもそれはもう関係のないことだ。これから佐藤美希に会うのだから。

十無は気持ちを切り替えようとしていた。

彼女が指定してきた店は、駅から離れた所にあった。酒精会社の直営店で、建物内にはお酒の製造過程が硝子越しに見学できるようになっていた。

その一角に洒落た感じの和食店があった。オルゴールの音色が流れている落ち着いた雰囲気の店は、女性客が多かった。

オルゴールか。アリアはどうしてあんな物をくれたのだろう。あいつもよくわからないことをする。お陰でこっちはいいように振り回される。大体、よりによって何の意味があるのか全く検討がつかない物を、いい年をした男に……。

自分勝手にアリアに腹を立てている自分に気がつき、十無は思わず苦笑した。

男から男に贈るのに、気の利いた物もないか。……そんなことより四日後はクリスマス・イブだ。やっぱりクリスマスには彼女をレストランにでも誘ってネックレスでも贈らなければならないだろうか。

意識を無理に佐藤美希に修正して、十無は半ば義務のように彼女との今後の予定を考えた。

「遅れて、ごめんなさい」

「そんなに待っていないよ」

少し息を弾ませて席に着いた佐藤美希は、淡い水色のタイトなパンツスーツ姿で、声と写真だけで想像していたよりも落ち着いた印象に見えた。

「だってあの写真は成人式の時のものですもの、かなり前よね。これじやあ詐欺かしら」

威勢のよい明るい声。彼女の声で十無は自分も元気が出てきそうな気がした。

「ああ、やっぱり東君は変わっていないわ。私、変わったでしょ。大学時代の私のこと覚えている？」

「いや、悪いけれど、全く思い出せない」

「そうよね、きっとそうだと思っていた。目立たない存在だったもの。……東君はずっと東京なの？」

美希は少し残念そうに目を伏せたが、すぐに違う話題を笑顔で話し始めた。

そのあとも、美希は運ばれてきた料理をついばみながら十無にあれこれと話しかけてきたのだが、次第に会話は途切れがちになり、十無は居心地が悪く感じたのだった。

「いいわね、東京は雪が降らなくて。旭川にいたら、半年は雪の中よ。夏だなんて思えるのは一ヶ月くらい」
とうとう天候の世間話になってしまった。

十無も何か話題を作らなければと焦ったが、焦ると余計に気の利いた会話が思い浮かばず、そうだね等と相槌を打つのが精一杯だった。それまで笑顔をやさず楽しそうに当たり障りのない話をしていた美希は、はたと箸を止めて、「ねえ、私ってどう見える？」と真顔で聞いてきた。

「どつって」

そう言われても何と云ってよいのか。

十無は、「元気で明るい人かな」と考えながら答えた。

「やっぱり」

普通ならば褒め言葉なのだから、笑顔が返ってくると思いきや、

美希は少しがっかりしたような口振りだった。

何か癪に障ることを言っただろうかと、十無は焦った。だが、美希は再び笑顔になって話しを続けた。

「ねえ、東君は今まで誰かと付き合っただことはしないの？」

「ないよ」

「そう。でも、好きな人はいたでしょ？」

「そりゃまあ。でもうまくいったためしはないな」

「意外だわ。学生の頃、もてていたのに」

「そんなことないよ」

十無は辛うじて、精一杯の硬い笑顔を作っていた。

料理は見た目にも美しく盛り付けられて美味しいはずなのに、十無は緊張で喉が通らず、箸がすすまなかった。

日本酒は早いペースで飲んでいたが、味もわからずに流し込んでいた。

十無は就職してこのかた、女性とのデートなど一度も経験がなかった。

女性の扱いも元々不得手で間が持たない。だから、そういう機会を避けていたのだ。

学生時代、確かに告白を受けたことはある。

だが、彼女達は大抵、十無と会話をほとんどしたことがなく、面識がないままに、突然付き合っただけというのだ。

十無は彼女達の熱心に押されて交際したのだが、十無が結論を出す前に、私のこと本当に好きなの？ 何を考えているのかわからないなどと自分勝手なことを言って、彼女達は去っていったのだ。

十無はその度に傷ついた。

周りでは、よく女を変える奴、冷たい。などと噂されたりもしていた。

こうして十無には女性が苦手だという立派なトラウマが出来上がったのだ。

新人警官の頃には、婦人警官などから飲みに行こうとお誘いもかか

っていたが、そういう理由で片端から断ってしまい、そのうち誘いは来なくなり、いつしか、クールで近寄りがたいという殻を作り上げてしまった。

よく言えば仕事熱心で真面目だが、上司に受けがいい十無を妬む同僚には、堅物で女に興味がない、男が好きなんじゃないかななどと陰口を叩かれたりしていた。

そんなこともあり、今回お見合いをするという話はあつという間に署内に広まって噂話のネタにされていた。

これで振られたら自分の立場がないかもしれないなどと気弱な考えもあり、十無は美希の前でかなりの緊張下にあった。

「無口なところも変わらないのね」

「いや、美希さんの前で緊張しているんです」

「緊張？」

意外な言葉を聞いたというように、美希は目を見開いた。

「俺、女性と話しをするのがかなり苦手で」

十無はそう言って、景気付けにグラスに半分は入っていた日本酒を一気に飲み干した。

言おう。無口でクールな東十無は、実は気弱で女の扱いも苦手な男だと。

外見で誤解されるのは嫌だ。

「いいのよ、東君はそのまま。人に合わせる必要などないわ」

美希にそう言われて、十無は一気に肩の力が抜けた気がした。

「昨日、ある人にそう言われたの。あなたはあなたそのままですって言うようなことを。その方が魅力的だって。随分気障なことを言うなって思っただけけど、でも、ふっと気持ちも軽くなって。私のことをそんな風に見てくれる人がいるんだって、少し自信を取り戻せたわ。自分で自分を否定して卑屈になつてはいけないのよ」

昨夜のことを思い出しながら話す美希の瞳が、美しく潤んでいる。十無はぴんと来た。

ある人というのは坂本周のことだろう。彼が既に彼女の心を掴ん

でしまったのか。

「あのね、東君が本当に来るって聞いて、私、とてもときどきしていたわ。学生時代に好きって伝えていけば、今の私は違っていたのかもという思いが心の奥にずっと残っていたから。そして、その後、東君にいつか見てもらいたいと思って自分を変えたの。……でも」「だったら、今からでも遅くはない。俺でよければ、付き合っしてほしい」

美希が顔を曇らせ、「でも」と、話しを続けようとしたとき、十無は断られるような予感がしたのだ。

このまま終わらせたくない十無は、彼女の話しを遮って珍しく強気な態度で思わず告白してしまったのだ。

心のどこかで坂本周に対抗意識があつたのか、職場への体裁を考えたのか。それとも、アリアを忘れるためには前へ進むしかないと自分を追い詰めたのか、それは十無自身にもはっきりわからなかった。

多分、そのどれもが当たっていたのだろう。

「私で、いいの？」

「あなたがいいのです」

真剣な表情で見つめる十無に、美希は直ぐ返事をしなかった。

店の大きな窓の外、青白くライトアップされた庭に降る雪を見るように顔を逸らし、美希はどうしたものかと考えているようだ。

「そうね、まずお願いします」

美希が十無の顔に視線を戻して、微笑みながら微妙な言い回しの返事をした。

十無はとりあえずノーではなかったことにほっとし、「助かった」と、陳腐な返事をして、美希が首を傾げていたのだが、当の本人はそれに気づいていないほど緊張していた。

十無は酔うほど飲んでいないはずなのだが、その後、何を話したのか記憶が飛んでいた。

うまくいったはずの見合いの席だったが、その料理店を出た二人

は次の店に行くこともなく、それぞれにタクシーで帰宅した。

「これでいい。俺は美希さんを大切にする」

タクシーの窓から見た雪はさらさらと風に舞い上がっては落ちていき、地に着かないうちに再び舞い上がっている。

所在なげにふわふわと、いつ地面へたどり着くのか、それともいつまでも宙を彷徨っているのか。

十無の気持ちもまた、不安定に揺れ動いていた。

17・好きな人

同時刻、アリアは十無と同じように落ちてくる雪を見ていた。

「アリア、浮かない顔だな」

「今回の『仕事』は、面倒だからどうしたらいいかなと、ちょっと考え中」

アリアはヒロに悟られないようにそう言ったのだが、実は十無のことを考えていたのだ。

今頃、十無は美希さんとうまくいつているのか。

きつと楽しく過ごしているのだろうと思うと、アリアは胸がうずいた。

「なぜ、まだ坂本周のままている？ 今日くらい『仕事』のことは忘れろ」

「ごめん、ヒロの誕生日なのに」

ヒロは窓際に寄りかかっていたアリアに寄り添うように立って、アリアの肩にそっと手を置いた。

ここは忠別川沿いにあるアパートの二階の一室。

木造の古いアパートは、二重サッシなのに隙間風が冷たかった。

今夜は冷え込みそうだ。明日の朝、窓霜が見られるかもしれない。降る雪の先に、川の向こうに見える中心街の明かりが、ぼんやりと白んで見えた。

旭川の中心街から遠い場所ではなかったが、氷点下十三度ほどになる冷え込みの時は、ダイヤモンドダストが煌めき、窓から川霧が見えるのだ。

そして、最近の家には見られなくなった窓霜が、幾何学模様で窓を覆う。

それは二度と同じ模様が現れることがなく、朝日と共に消えていく。

一瞬の美。

日が昇ればただの水滴になる、その時だけのもの。誰にも気づか
れずにそのまま消えていく存在。

自分が死んだら、自分のことを覚えていてくれる人がいるだろう
か。

アリアは窓を見ながら感傷的になった。

「ワイン、もう一杯どうだ？」

「うん、もちろ」

食卓テーブルには、ローストビーフにサラダ、チーズの盛り合わせと飲みかけの赤ワインがあった。その傍らに、アリアが贈った、少し派手なベルサーチのネクタイが置いてある。

本当であれば、ホテルでディナーを予約したいところだったが、こんな狭い街では東兄弟にいつ会うとも限らない。

渋々、アジトでのささやかな晩餐となった。

そしてもう一つ、アリアがこの部屋で過ごすことにしたのはわけがあった。

「あのねヒロ、実は今夜……」

言いかけた時、坂本周用の携帯電話が鳴った。

それは見覚えのない電話番号だった。

アリアが身構えて電話に出ると、聞き覚えのある元気な声が耳元に響いた。

「周ちゃん？ 私、美希。今何処にいるの？」

「いや、ちよっと。どうしてこの番号を知っているの？」

「東君の弟から聞いたの。ついでに住所も」

昇め、口の軽い奴！

アリアは内心、悪態をついた。

「ごめんなさい、突然かけて怒った？ でも、周ちゃんに会いたかったの。これから会えないかな」

彼女は今夜、十無とお見合いの真っ最中のはずだ。どうなっているのだろうか。

「ねえ、だめ？」

黙っているアリアに、返事を促すように美希が甘えた声を出した。

「わかりました。じゃあ、十五分後に」

「これから出掛けるのか」

「仕方ないよ。今は坂本周だから」

「その女、別に探偵の仕事に係っているわけではないだろう？」

「でも、十無のお見合いの相手で、しかも婦人警官なんだ」

「だから？」

「だから、心配で……。とりあえず行つて来る」

十無との見合いはどうなったのか、アリアは早く知りたかったのだ。しかし、さすがにヒロにはそう言えなかった。

アリアはコートを着込んで、ヒロの質問から逃げるように玄関へ行つたが、言い忘れていたことを思い出してヒロのほうを振り返つた。

「あ、今夜Dもここへ誘つてあるんだ。少し遅くなるって言っていたけれど、きつと来るから」

と言つて、ウインクした。

「おい、アリア、どういふことだ」

「じゃ」

玄関先まで来たヒロを、アリアはするりとかわして出掛けた。

「あいつ、仕組んだのか？」

ウイングラスを片手に、ヒロは玄関に一人取り残されて寂しそうに呟いた。

美希から電話があつたのは、部屋を出る口実に良いタイミングだったが、どうして自分に電話をかけてきたのか。まだ二十一時過ぎという早い時間なのに。

アリアの気は急いていたが、肝心のタクシーは雪が舞う中、スケートリンク状態になっている路面をのろのろと進んだ。

十五分後にと約束したが、結局、着いたのは三十分を過ぎていた。「遅いじゃない」

「ごめん」

佐藤美希は待ち合わせの買い物公園沿いにあるドーナツ屋で、珈
& # 2 6 8 3 3 ; を飲んでいた。

アリアも紅茶をオーダーして受け取り、向かい合わせに座った。

「お見合い、うまくいった？」

「こんな時間に私がここにいてそう思う？」

「……………だめだったの？」

美希は首を横に振ったのだが、それに反して沈んだ顔で、「彼から、付き合つてと言われたわ」と、答えた。

十無は……………本気だ。

アリアは二人がうまくいくことを応援しているつもりだったが、十無が彼女を選んだという事実を聞かされて、顔がこわばってしまった。そして、口を硬く結んだアリアは、目線を彼女からはずし俯いてしまった。

動揺を隠しきれなかった。

「周ちゃん、どうして怖い顔をするの？」

「ごめん、なんでもない」

沸き起こった感情を打ち消すように、アリアは慌てて表情を笑顔に作り直し、「良かったね」と言った。

今更、何をそんなに慌てるのか。十無は彼女を選ぶ。それは、わかりきっていたことのはず。「アリア」は十無の選択肢には初めから入っていないのだから。十無の選択肢、自分もそこに並びたいのか。それを望んだところでどうなるのだ。もう考えない、そう決めたいはず。

今まで深く仕舞い込んでいた感情が溢れ出す。アリアはそれを押さえきれなかった。

頭の中で自問自答を繰り返し、アリアはその気持ちを必死に否定した。

「でも、私、悩んでいるの」

美希の声でアリアは我に返った。

美希が目の前にいることさえ、アリアは忘れそうになっていたのだ。彼女は今、なんと言ったのか。お見合いがうまくいったにしては彼女の様子がおかしい。

「どうして？」

アリアは思わず眉をひそめて美希に強い口調で返した。

あんなに思い続けていたようなことを言っていたのに。どうして悩まなければならぬのだろうか。

折角、十無から良い返事をもらえたのに。自分だったら……自分だったら？

アリアは浮かんできた言葉に戸惑った。

「……東君のことは、きつと良い所だけ記憶に残って、理想化していたのね。会ってみたら何か違った。でも、私からお見合いをお願いしていたし、そのことを言えなかった。それに……」

「それに？」

「……自分の気持ちに正直になるって難しい。周ちゃんは、きつとそんな悩みなんてないのでしょうか？」

「いいえ、僕はいつも悩んでばかり。自分の気持ちさえも本当のものなのか、わかりかねている。今の生活を投げうって恋に飛び込むことができない、自分が変わるのが怖い臆病者でしかない」

アリアはそう言って、硬い表情のまま俯き、空になったティーカープを弄んで自嘲した。

アリアは自分でも不思議なくらいすらすと気持ちを言い表せた。アリアは声に出すことで、改めて自分の気持ちを知ったのだった。

美希はアリアの憂いた表情を見つめ、瞳にかかる、男にしては長い睫毛に目を奪われていた。

アリアが美希の視線に気づいて顔を上げた。目が合った美希は、微笑んだ。

二人が付き合うことを知ったアリアには、気持ちの余裕はなく、美希のその微笑の意味に気がつくことはできなかった。

「東さん！ 携帯の電話番号を勝手に教えないでください！」

「何を怒っているんだ。何か不都合でもあったか？」

翌日、アリアは事務所に出勤し、席についている調査員たちの間をずかずかと通り抜けて、奥でパソコン作業をしている昇の前に立つて、真っ先に抗議した。

が、昇は全く意に介さず、アリアの方を見向きもせずパソコンに向かっていた。

「プライベートなことを干渉されるのは嫌です」

「ああ、例の年上の派手系彼女とあの美希って娘がかち合ったのか？ 悪いことは言わない、年上はやめてあの娘にしておけ」

昇は相変わらずパソコン画面から目を離さない状態で、勝手なことを言っている。

「東さん、あの娘はあなたのお兄さんの見合い相手ですよ？ よくそんな酷いことを言えますね」

「あの美希って娘、本当にオーケーしたのなら、何故その足で周に会いに行った？ それに、兄貴は絶対後悔するに決まっている。今のうちにやめておいた方が兄貴のためだ」

そう言われれば、そうだ。美希さんは何故わざわざ坂本周に会いに来たのか。ただ見合いの報告をしたかっただけだろうか。いや、違う。まさか坂本周に気持ち移ったのか。

……だめだ、昇の言動に惑わされては。

「そんなこと、わからない、と思います」

アリアは美希の態度を思い起こすと、確かに思い当たることがあり、強く否定できなかった。

「兄貴に遠慮することはない。好きになった方が勝ちだ」

「僕は、別に美希さんを好きじゃやない」

「そうか、やっぱり例の年上の彼女に頭が上がらないのか」

「東さん！」

昇はアリアの方をちらりと見てニヤツとしたので、アリアはつい大声を出してしまった。

「周、さっきから東さん、東さんって背中がむず痒いんだよ。この前言っただろう？ 昇でいいって。もう忘れたのか？」

「…… しません。でも先輩だし、昇さん、でいいですか？」

「仕方ないな。本当はさん付けもじっくりしないんだが」

いつの間にか話しがすりかわって、アリアが謝る羽目になっていた。

話していても空回りするばかりで、昇は涼しい顔だ。

昨日何処をほつき歩いていたのかも、結局、昇ははぐらかして言おうとしなかった。

だが、遅い時間に事務所に寄ったとき、佐藤美希に出くわしたらしいことは教えてくれた。

いてほしい時にいなくて、余計な時だけ事務所にいる。困った奴だと、アリアは昇の頭を小突きたい気分だった。

「込み入った話は終わった？ もてる男は辛いわね」

音江槿がアリアの背後から顔を出した。その時になって、アリアは事務所で作業をしている五人の調査員達がくすくす笑っているのに初めて気がついて赤面した。

全部まる聞こえだ。穴があつたら入りたい。

「副所長、すいません仕事中に私語ばかり」

「そんな堅苦しいことは言わないわよ。ねえ、周君って年上の彼女がいるんだ」

「いません！」

槿が興味津々の顔で訊いてきたので、アリアは強い口調で即答した。

音江槿までそんなことを。アリアは内心うんざりしていたが、それが顔に出そうなのを堪えた。

音江槿まで坂本周に興味を持っているのだろうか。さてよ、これ

は使えるかもしれない。

アリアに『仕事』を遂行するための妙案がふと閃いた。

アリアは硬い表情を崩して、「でも、年上の女性が好みです」と言
って槿に向かってにっこりしてみた。

「いやねえ、周君、私に気を使わなくてもいいのよ」

槿はそう言いながらも、まんざらでもなさそうに頬を少し染めて、
周の背中をドンと叩いた。

「こんなおばさんつかまえて、ゴマすつても給料は増えないぞ」
「昇！」

茶々を入れた昇の頭上に、槿の鉄拳が降りた。

「いつてー。なにするんだよ、本当のことを言っただけなのに」

「その減らず口、直さないと給料減らすわよ」

「横暴だなー。所長助けてくださいよ」

昇は後ろを振り返って、決算書類と睨めっこをしている所長に助け
を求めた。

「夫婦漫才はそのくらいにして、皆さんそろそろ仕事に取りかかり
てください」

と、所長は真面目な顔で注意した。

「ということ、槿、さつさと仕事しろ」

言いながら、昇は手の平で槿をしっしつと追い払うような仕草を
した。

「副所長と呼びなさいよ！ その言葉そのままそっくり昇に返すわ
さ、行きましょう、周君」

「おい、待てよ。周は俺のアシスタントだぞ」

「あら、煩わしいんじゃないの？ 今日から私のアシスタント
です」

「いなきやいないで不便なんだよなあ」

と、昇がぶつぶつと不満を呟いているのがアリアに聞こえ、自分
のことを多少は頼りにしていたのかと嬉しくなった。

だが、「書類を自分で作らないとならないじゃないか」と昇が呟い

たので、面倒な書類を任せて、自分だけまた何処かへサボりに行くとしていたのかと、アリアはがっかりした。

「じゃ、僕は副所長についていきますから、昇さんは書類頑張ってくださいね」

「ああ。周もせいぜい槇に襲われないように気をつける」

「口の減らない奴！ 余計なことばかり言っただけで、さっさと仕事しなさい」

アリアが返事をする代わりに、槇が昇をたしなめた。

いいコンビだ。いつもこんな感じなのか。

憎まれ口を叩いているが、二人は楽しそうだった。昇はアリアにはここまで碎けた態度はとることがなかった。

身構えていない無防備な表情をしていた昇。きっとそれが普段の昇なのだろう。

幼馴染っていいなと、アリアは少し槇が羨ましくなった。

でも本当に、ただの幼馴染だろうか。音江槇は昇のことをどう思っているんだろう。昇はどう思っているのか。もし、ただの幼馴染以上の感情があるのであれば、さっき閃いた作戦は無理だ。だとしたらどうやって音江槇から手っ取り早くCDのありかを聞き出して盗み出すか。

事務所を出てから、アリアは足早に歩く槇の後ろについて歩いていった。

そして、歩きながら色々策を練ったが、良い案はそうそう浮かぶものではなかった。

うまくいかないかもしれないが、とりあえずトライしてみよう。この機会を逃す手はない。

「副所長、もう少しゆっくり歩いてください。僕、まだ雪道に慣れなくて」

「あら、ごめんなさい」

槇がはっとして、後ろを振り向いた瞬間、アリアはよろけて槇の腕につかまった。

バランスを崩した榎は、アリアの予想通り、咄嗟にアリアの腕にしがみついで、アリアはごく自然な格好で榎を抱き締めることができた。

「すみません、副所長。何処か痛めましたか？」

「だ、大丈夫よ。周君、気をつけてね」

榎はアリアと顔を会わせずに、そう言って俯いた。

なんとかなるかも。

アリアは音江榎に好意を寄せる坂本周を演じることにした。

19・作戦開始

「副所長って仕事が速いですね。昇さんとは大違いです」

「そう？ ま、昇よりは動けると思っけれど、まだまだだって父には言われるわ」

二人で行ったある女性の素行調査はスムーズに進み、十九時頃にはその日の仕事はひと段落していた。

アリアは積極的に音江榎を居酒屋に誘い、お疲れ様と言ってビールで乾杯をしたところだった。

榎は上機嫌で話し、アリアがいいタイミングでビールを勧めるので、あつという間に榎のジョッキは空いていった。

「周君は飲み込みが早いし、身軽で咄嗟の機転が利いて、この仕事に向いているかも」

「そんなに褒められると、これから失敗できませんね」

「あなたなら大丈夫よ」

「なるべく早く一人前になれるように、副所長に付いて色々学びます」

「もう、堅苦しい話しはやめましょう。折角美味しいものを食べに来たんだから」

「そうですね。じゃあ、乾杯！」

二人は何度目かの乾杯をした。

「周君、私もう飲めない……」

「大丈夫ですか？ しっかりしてください」

居酒屋でかなり飲んだ音江榎は、アリアに肩を支えられてようやく歩いてきた。

アリアの思惑通りに榎は調子よく次々とビールを飲み干して泥酔した。

これで音江榎の部屋へ上がりこめれば、しめたものだ。

「家まで送りますから、住所を教えてください」

「あらん、大丈夫よ」

榎は凍りついた歩道にそのまま寝そべってしまいそうなほどよるけながら、どう見ても全然大丈夫な状態ではないのに、そんなことを言っている。

アリアは榎をタクシーに押し込んでから自分も乗り込んで、何とか住所を聞き出し、榎のアパートへと向かった。

「榎さん、何号室ですか？」

「ええーもう着いたのお？ えとねえ、一〇二だったかなあ」

アリアは自分の力では歩けなくなっている榎を抱きかかえた状態で、タクシーを降りた。

そのまま榎をずると引きずるように歩き、アパートの共用の入り口ドアを押し開けて一〇二号室の前にたどり着いた。

アリアと差ほど体格の差はない榎を抱えるのはかなりきつく、玄関前にたどり着いた時には自然と大息が出た。

アパートは真新しく、モダンな造りで独身者向けのようない階建てだった。

一階でよかったと、アリアは心底思った。

「鍵は何処ですか？ すいませんですがバツクの中を見ますからね」

その場にぺたんと座り込んだ榎に、アリアは一応断ってから、榎の黒いシヨルダーバツクを開けて探した。バツクから鈴の音がして、神社で買ったような金色の鈴がついた鍵が見つかった。

「榎さん、こんなところで寝たらだめです。ほら、部屋へ入りませよう」

榎はアリアが立たそうとしてもたこのようにくじやりと座り込んでしまい、らちが明かなかった。アリアは仕方なく、榎をおぶって部屋へ入った。

「困った人。ここまで飲むかなあ、普通」

自分が飲ませてつぶれるように仕向けたにもかかわらず、アリアは内心、文句の一つも言いたくなるほど、榎を運ぶのは重くて労力

がいった。

檣をソファにどさりと下ろし、アリアは腰を伸ばして一息ついてから部屋を見回した。

シンプルな部屋だった。

父親である所長とは一緒に住んでいないようだ。

ソファの目の前にあるサイドボードには幾つか写真たてが飾っており、普段のキャリアウーマンのイメージにはあいそもない陶器製のミッキーマウスの置物や、微笑みを浮かべている可愛らしい天使の置物などが並んでいた。

ダイニングキッチンと十帖ばかりの居間の他には、寝室らしい部屋が一つあるだけだった。

アリアは念のため、檣がすぐに目を覚まさないか確認するのに、「檣さん、風邪を引きますよ」と、肩を揺り動かしてみた。

檣は「うん」と言っただけで、目を開くことはなかった。

仕事の手間が省けた。今夜CDのありがたかわければ『音江檣に好意をよせる坂本周』なんて面倒な役柄を演じなくても済むのだ。

部屋の中をざっと目で物色し、窓際にある木製デスクに目星をつけたアリアは、大きな音が出ないように細心の注意を払いながら、引き出しを下から順に開けてみた。

種々のファイル、録音テープが並んでいるが、肝心のCDは見つからなかった。

ノートパソコンが部屋にみあたらない。

ここには置いていないのだろうか。後は車の中か。それとも事務所か。

「周君、お水……」

熟睡していると思っていた檣が突然呼んだので、アリアは飛び上がりそうなほど驚いて檣を見たが、彼女は目を瞑ったままで、アリアの行動は見られなかったようだ。

「お水ね、今持って行く」

ことを急いでしまったか。危ない、気をつけなければ。
コップに水を汲みながら、アリアは気を落ち着かせた。
「榎さん？」

アリアがコップを運んできて声をかけても、榎はすうすう寝息を立てて、起きる気配はなかった。

「やれやれ。今度は本当に眠っているのか」

アリアは榎の側にかがみこみ、顔をじっと覗き込んだ。

「周、なにやってんだ？」

背後から突然声をかけられて、今度は本当に飛び上がった。

振り返ると、東昇が不審そうにこちらを見ていた。とんだ邪魔者が来てしまった。

「昇さん、どうしてここに？」

「それは俺の台詞だ」

「榎さんと一緒に居酒屋へ行つて、彼女が酔いつぶれてしまったので送ったところです」

「ふうん、副所長じゃなく『榎さん』ね。で、送り狼か」

「違います！ 何もしていません」

アリアがむきになって強く否定しても、昇はにやにやして、聞き入れない。

「今、キスしてただろ。いや、いいんだ。年上の彼女には黙っていてもやるから。これで貸しができたな」

「貸して……どうしてそうなるんです！」

玄関からすぐの居間へ昇が入った時、アリアはかがんで榎の顔を覗き込んでいたところだったのだ。

確かにアリアのその後姿を見れば、そういう風に見えたのかもしれない。

でも全くの誤解だった。

「でも周、寝込みを襲うのはだめだね」

「だから……」

「何よお、耳元でごちゃごちゃと」

槿がもそもそと体を起こしながら、目をこすった。まだぼおつと
しているようだ。

「昇？ どしたの？」

「周がお前にキ……」

アリアは咄嗟に昇の口を押さえ、「飲みに行こうって誘いに来た
んです。そうですよね、昇さん」と、言い直しながら、面倒はごめ
んだと昇に目配せした。

「ああ、そうそう。兄貴が見合いの後から元気がないし、ぱつと盛
り上げてやろうと思って。メンバーが寂しいから槿を誘いに来たん
だ」

本当に誘いに来たのか。って十無もいるのか。

半開きになって居る居間のドアの影に、十無のコートが見えた。

十無も今のを誤解しただろうか。アリアはそう思って、坂本周に
扮していることを忘れて自然に顔が赤らんでしまい、それを隠すよ
うに俯いた。

「こんな夜中に、一人暮らしの女の子の部屋に誘いに来る？ 普通」

「女の子って年でもないだろ。それに、周はいいの？」

「失礼ねえ。周君はいいのよ、紳士なものねーっ」

槿は憎まれ口を叩かれても、昇が来て嬉しそうだった。少し酔い
が醒めたのかまとも話しているが、槿の頬はまだ紅潮していた。

待つのに痺れを切らした十無が、居間へ入ってきた。

「ほらみる。時間が遅いからやめておけって言ったのに」

「兄貴はズルいよ、自分はドアの影で隠れているんだから。いつつ
もそうだ。兄貴は高みの見物で、都合の悪いことは全部俺のせい
にする。でも、驚かしてやろうって言ったなら、兄貴だって、よし！
って乗り気だったじゃないか」

「いやそれは、酔った勢いで……」

十無も昇も、もうだいたい飲んできたようだが、話し方はいつもと
変わりなかった。

だが、真面目な十無がこんな悪戯に参加するなんてことは考えられ

ないし、多少気が大きくなり大胆になっているようだった。

「いいわよ、ここでよかつたら」

目が据わりかけている榎はにやりと笑い、「お見合いの時の話、じっくり聞かせてもらおうわ」と、言った。

アリアは十無の話を聞きたい気持ち半分、このメンバで飲んだらアリアだとばれやしないかと不安があるのが半分、複雑な気持ちでいた。

日付はもう、翌日になっていた。

20・アリアの気持ち

明日の朝、というか今日の朝は、きつと起きられそうにもないなとアリアは思った。

仕事に差し支えるからと言って帰ろうとしても、昇が、自分も同じだから大丈夫だと、何が大丈夫かわからないのだが、強引にそれで押し通し、アリアは午前二時を回っても、帰ることができないでいた。

四人は居間のこたつを囲んで坐り、その周りには缶ビールが無数に空いて転がっていた。今は日本酒の一升瓶に取り掛かっているところだった。

それももう、残りが半分程度に減って、その大半は槇と昇の胃に飲み込まれていた。

昇と槇は陽気に酔っ払い、十無の見合い話をネタに、ずっと漫才コンビのように話し続けていた。

ネタにされている十無は、一人面白くなさそうに仏頂面をしていた。時折、向かい合わせに坐っているアリアの方を、十無はちらりと盗み見ていた。

周が実はアリアだということに感づいたのではと、アリアは内心冷や冷やししながら居心地の悪い状態で酒を飲んでいたので、酔えるはずもなかった。

それに、アリアはヒロのことも気になっていた。

二十日の夜に会ったのが最後で、その後は連絡もとれず、Dとヒロがああ後二人で大丈夫だったのかと心配だった。

アリアがそんなことを考えていると、隣に座っている昇が、グラスに並々と注がれた日本酒をアリアの目の前に突き出した。

「おい、周、飲め」

「いえ、僕はもうだめです」

「付き合い悪いな、全く酔ってないじゃないか。そんな女みたいな

顔をして、女を引つ掛けるのがうまいんだから。一番危ない奴だな」

「人聞きの悪いことを言わないでください」

「だってそうじゃないか。現に美希ちゃんだって周に気があるようだ。是非、俺にもその極意を教えてほしいな」

「もうその話はよしてください」

槿の部屋で飲み始めてから、何度となくその話題になっていた。酔ってくると同じ話が繰り返される。見合いの後、美希がアリアに会いに来たことも、十無に知れてしまった。

その話の度に、アリアに向けられる十無の視線が痛く感じた。

敵意をもたれているのだろう。きつと、十無のプライドを傷つけている。彼女の方から是非にと見合い話が来ていたのに、余計なところで邪魔者が出てきたのだから。邪魔をする気なんてないのに。むしろ、応援しようとしているのに。早くこの場から立ち去りたい。

アリアは逃げ出したかった。

「周君で、もてるでしょ？ こう、なんていうか、ほっとけないタイプね」

槿は十無の傷をつつくように話を広げた。

「もてません！」

「そう？ そんなにむきになって否定しなくてもいいじゃない。周君のタイプってどんなひと？ 美希ちゃんみたいな娘は？」

佐藤美希のことも困ったが、折角の機会を無駄にしないように、やはりここはCDを手に入れるために音江槿をうまく利用しよう。

アリアはそう考え、槿の表情を捉えるように真っ直ぐ見つめて、ゆつくりと答えた。

「僕は、槿さんみたいなひとが、好きです」

アリアの言動が少なからず槿にインパクトを与えたようで、槿は昇の反応が気になるのか昇の方を一瞥して、「あら」と言い、酔って赤くなつた顔が一層赤くなつた。昇は顔色一つ変えない。

アリアのちよつとした種まきは成功した。

「おいおい、年上の派手系彼女から、ただの年増の槿に乗り換える

「気か？」

「昇さん！ それは違つつてこの前から言っているのに。僕には今付き合っている人はいません」

「昇！ 酷いわ！」

槿の鉄拳をかわしながら、昇は「ほんとかなあ」と、疑い深そうな目でアリアを見た。

「もうやめましょう、こんな話。僕はそろそろ帰ります」

そう言つてアリアは立ち上がり、隣に座っている槿に、「今度はまた二人で会いましょう」と、そつと槿の肩に手を置きながら耳打ちした。

槿はアリアの顔を見て微かに頷いた。

「おい、先輩より先に帰る気か？」

「僕の指導をしてくれてるのは槿さんです。それに、一人暮らしの女性の部屋にこんなに遅くまでいるのはどうかと思います。そろそろ帰つたほうがいいでしょう」

「いちいち棘のある言い方をする奴だ。槿はいいんだ、こいつは女と思つちやいなから」

「昇、言いすぎだ」

昇が口を尖らせて吐いた槿への暴言に、十無が慌ててたしなめた。「いいのよ、私も昇に女扱いしてもらおうなんて思つてませんから！」

槿はグラスに残つていた日本酒をくいつと飲み、空になつたグラスを勢いよくテブルにおいた。

「眠たくなつてきたし、俺達もそろそろ帰ろうか」

「はいはいわかりました」

売り言葉に買い言葉状態になり、険悪な空気が漂いはじめたので、十無がとりなした。昇は仕方なく立ち上がった。

一体この飲み会は誰のためだったのかなんて、昇はきつと忘れているのだろう。

最後は元気付けられるはずの十無が、昇をなだめる羽目になつてい

た。

「それじゃ、また数時間後に事務所で」

玄関先でアリアが笑顔で楯にそう言つと、「おやすみなさい」と楯の笑顔が返つてきた。十無と昇もそれに合わせて、片手を挙げて「じゃ」と言った。

タクシーが拾える場所まで、三人は並んで歩いた。

アパートの横には忠別川がゆったりと流れていた。キンと張詰めるように冷えて澄んだ空気に、星がはつきりと見えた。

午前三時。多分氷点下十度にはなっているのだろう。

橋の上は風が冷たくて一層寒さが厳しく、耳に痛みを覚えるほどだった。

旭川は川が多い。大小、七百余りの橋があつた。

横に見えるツインハーブ橋が川霧に霞んで見えて、川面には枝に白く咲いた樹氷が綺麗だった。

青白い闇が幻想の世界を創っていた。

三人はそれぞれの理由で、美しい景色を眺める余裕はなかった。

考えごとをしているのか、十無は両手をコートに突っ込み、黙々と歩いていた。

「冷えるなあ」

昇は堪らず、口に出した。

冷え込んでいるのだろう、吐く息が一層白い。

居心地の悪い沈黙の中、アリアはタクシーを見つけて早く一人になりたかつた。

「名前、坂本周だったな？」

アリアに顔を向けずに、十無は唐突に話しかけてきた。

感づかれたのか。またその不安がアリアの頭をよぎつた。

「はい……そうでしたけれど」

「美希さんのこと、どう思っている？」

「えっ？ それは、その……」

予想外のことを聞かれてアリアは即答できずに言葉を濁し、どう

答えれば角が立たないのか考えた。

「申し訳ないですが、美希さんは僕の好みではありません」

「へえ、はつきりしているな」

昇が意外そうに言った。

「でも、美希さんはもしかすると坂本君に惹かれているのかもしれない」

どうして十無はそんなことを言うのだろう。彼女のことをどう思っているのか。

「十無さんは美希さんのことが好きなんですね？ それなら、しっかり繋ぎ止めていてください」

「でも、俺は彼女に失礼なことをしているのかもしれない」

「兄貴、見合いで会った時に何かしかしたのか」

「いや、そうじゃない。俺は美希さんを好きになろうと努力している。自分の本当の気持ちを否定して、心の奥底へしまいこみ、自分を騙している。それが一番いい方法だと思っていただけののだが、こんな気持ちのままお見合いをした俺は、美希さんにかなり失礼なことをしているのではないだろうか」

「それって、『あいつ』のこと……」

昇が話しかけたのを遮るように、十無はアリアにこう続けた。

「坂本君、もし美希さんが君を好きなのなら……」

「弱気にならないでください！ それに、僕は……」

多分、あなたが好きなのだ。

言える立場ではないけれど、十無が美希さんに交際を申し込んだと知った時、アリアは胸が苦しかった。

手に入るはずなどないのに。ヒ口と手を切ることもできないのに。今の自分が大手を振って十無に告白することなど、できるはずがないのに。

それでもきつと、自分の気持ちを変えることはできない。だから、そんなことを言わないでほしい。今更、お見合いが間違いだっただなんて。お願いだから、微かな望みなど残さないで。

話している途中で黙って俯いてしまったアリアに、何かを感じたのか、十無が静かに語りかけた。

「俺は坂本君のことを簡単に女に手を出す軽い奴だと誤解していた。君には君の色々な悩みがあるんだろう。……誰かを好きになったことがあるんだね」

「……あります。でも、無理です」

「周でも女とうまくいかないことがあるのか」

昇が茶々を入れたが、十無は気にせず優しい口調で続けた。

「どんなひとだ」

「あなたみたいに、無口で思っていることを顔に出さないひとです」「俺みたい？ 女で無口な奴か。いまだき珍しいな。貴重かもしれないぞ。美人なのか？ としは？」

少し沈んだ表情になっているアリアに同情し、自分の状況に重ねて見ているのか、十無は普段であればそんな冗談めいたことを口にしないのだが、アリアを元気づけようと、おどけた口調になっているようだった。

アリアはそれに応えるように、ゆっくりと躊躇いがちに重い口を開いた。

「あなたと同じ年で、背丈も同じくらい。切れ長の瞳です」

「よっぽど年上が好きなんだな。でも、やっぱり年下がいいぞ。尻にしかれそうだ。それに俺くらいの背丈となると随分でかい女だな。モデルでもやっているのか？ それはかなり望みが薄いな」

「……仕事第一の人で、融通が利きません」

「最悪だ」

「そりゃ本当に望みが薄い」

昇も頷いている。

「恋人にはもつと違うタイプがいいと思うが」

「好きになっちゃったものはどうしようもありません」

「まあそうだ」

「……僕のことはいいんです。十無さんは、美希さんと交際を続け

る気はありますよね」

「む、断られたわけではないし、美希さんがよければ」

「だったら、そんな中途半端なことをいわないでください。それこそ、美希さんに失礼じゃないですか」

「それより、断ればいいだろ？ このまま続けるって、本当にそれでいいのか？」

「昇さんは余計なこと言わないで」

「でも、こんな女扱いの下手な兄貴じゃ、うまくいくものもだめになりそうだ。そうだ、周、お前指導してやれ。堅物兄貴の恋の手ほどき。それがいい。兄貴のことはまかせたぞ」

十無とアリアは顔を見合わせた。

ああ、どうしてこんなことになってしまったのか。もう関わりたくないのに。

そう思いながら、アリアはポケットに突っ込んでいる、冷えた両手をぎゅっと握り締めた。

三人は橋を渡りきってから、大きな通りでタクシーを拾ってそれぞれ帰路についた。

雪も降らない冷えた夜だった。

21・美原なの影

意外にも、一番遅刻してきそうな東昇が定時に事務所へ飄々と現れ、代わりに副所長の音江榎が就業開始時間を五分ほど過ぎた頃、息を切らせながら飛び込んできた。

「所長、すいません」

「どうした、副所長が遅刻するとは」

珍しく真面目にパソコン作業をしている昇を榎はちらりと見て、

「昨日、ちよつと……」と、言葉を濁した。

「そうか、夜遊びは程々にしなさい」

榎の耳元でそう小声で囁いた所長は、年頃の娘を心配する父親の顔をしている。

榎は肩をすくめ、「はい」と小さく返事をした。

「ごめんなさい。お父さんに心配させてしまつて」

アリアがそつと榎に近づき、申し訳なさそうに謝った。

「あら、周君のせいじゃないわ。東兄弟が押しかけてきたのが悪いの。でも大丈夫、父は怒っているわけじゃないから」

そう言つて、榎はアリアにウインクした。

いいな、榎さん。お父さんの愛情たつぷりで。

アリアはそんな親子関係が少し羨ましく思った。

「でね、周君。今回はちよつと私一人で行きたいのよね。大きな仕事じゃないし。で、今日だけ昇に同行してくれる？」

榎がアリアにこそこそと耳打ちしていると、

「嫌だね。面倒な時だけ俺によこすな」

と、昇がパソコン作業の手を止めて、こちらを振り返って大声で反論した。

「いいじゃない、今日だけ」

「俺だつて予定がある。お守りは御免だ」

「副所長、坂本君を連れて行きなさい」

見兼ねた所長が口を挟んだ。

「え、だつて所長」

「わかつたかね」

「はい……」

榎はそれ以上言い返さずに素直に従った。

所長が坂本周を同行させたのは、榎さんがよからぬことに足を突っ込んでいのではないかと心配だったからだろうか、アリアは思った。

「今日も冷えるわねえ……」

榎が白いため息を吐いて呟きながら、予めアイドリングして暖気してあつた車に乗り込んだ。

車は屋外駐車場に一晚置いてあつたため、車内は充分に温まらず、フロント硝子やサイドミラーにはまだ霜の華が見事に咲き誇っていた。

「僕がいては不都合ですか？ やっぱり足手まといでしょうか」

アリアは助手席につくと、すまなさそうに訊いた。

「あなただからじゃないの、一人で済ませたいことなの」

これは、やはり美原なな絡みの依頼だろう。

ななは今も探偵を使って度々自分たちのことを探っているとヒロが言っていた。

この前の所長の話でも、榎が単独で調査している依頼があると話していた。

とすると、これから向かう場所は美原ななの所か。だとしたら、まずい。いくらなんでも化けの皮が剥がれてしまう。会うわけにはいかない。

「じゃ、僕は着いたら車に乗って待っていますから」

「なに言ってるの。張り込みだからまず車から様子を伺うの。いい？ これは所長には内緒よ。この調査、詳しいことは報告してないの。ちよつと犯罪絡みで、まずいのよ。だから周君もそのつもり

で、他言無用ね」

ようやくフロント硝子の霜が解けて、前が見えるようになった。槇は車を発進させながら、真剣な顔をしてアリアに忠告した。

「わかりました。誰にも言いません」

ななに会うわけではないのか。だったら何処へ向かうのだろう。

「これは、どんな調査ですか」

「定期的に東京での行動調査を行うのが主で、後は居場所の確認ね」
なるほど、自分の居場所はななに逐一報告されていたのか。槇さん一人の調査では、全てが知られているとは思えないが。

「その何処が犯罪に絡んでいるのですか？」

「調査対象が、泥棒なの」

「泥棒？ 泥棒とわかっていて警察に届けないのでは、犯人隠匿になりませんか？」

「限りなく黒に近い白ね。証拠がないの。それに、その泥棒を捕まえたとしても、そう大きい犯罪はしてないようだし、警察だって収穫にはならないわ。それより、Dと繋がりがあって言うことがね」

「D？」

「大物泥棒の俗称よ」

「長期間の調査ですか？ それを所長に知られないようにするといふのは無理があるのでは？」

「でも、依頼者のたつての希望なの。私個人だけで、調査を完結させてほしいって。ただ、いつまでって期限を言われていないから一段落したら、父にも話すつもり。それまでは情報ファイルは私が管理しているの」

「僕の他には誰も知らないんですか？」

「昇は私がこそそこそ何かやっているって思っているみたい。昇もかわりがあるのよ、この泥棒と。それで以前、この泥棒の調査を手伝ってもらったことがあって。調査後、報告書を一部分見せて、詳しいことは分からなかったって言ったら、もっと知っているんじゃないかってすごくしつこくて。だから、探られても大丈夫のように、

ファイルは常に持ち歩いているの」

榎はこれだったら絶対大丈夫でしょうと自慢げに、ネックレスの先についているペンダントを見せてくれた。

その中には、一枚の青いチップが収まっていた。不用意にも、榎はアリアにファイルのありかを示してしまったのだ。

見つけた。メモリースティックだったのか。

アリアは、一瞬目を見開き、輝かせた。

「だけどねえ、昇ってどうしてああも彼女にこだわるのかしら。ちよつと焼けるのよね」

彼女？ 彼女と今確かに言った。アリアが女だということを榎は知っているのだ。ということは、昇も知っているのか。

「周君、どうしたの？」

「……彼女って、その泥棒は女性なんですか」

動揺を隠してアリアはもう一度確認するように訊いた。

「そうなのよ、外見は少年だけれど実は女性なの。どういう理由があるのか知らないけれど、私も依頼人から始めて聞いた時には驚いたわ。だって、どう見ても少年なのに」

ななが教えたのか。一体何のために。

アリアが考えてみたところで、美原なの企みは到底想像がつくはずもなかった。

「昇さんは報告書を見て、男だと思っていた泥棒が女だってわかって驚いた？」

「あ、それは教えなかった。それに、今も調査を継続していることも教えていないの。アリア……その泥棒のことだけれど、アリアのことになると昇ってうるさいから。で、私はこの調査があるから、定期的に旭川へ来ているの。多分、父も何かやっているのはわかっているわ。でも、私を信頼してくれている。だから危ないことはない。他の調査の合間でいいから、居場所と行動を追ってほしいという事で、難しいことじゃないし危険はないの。依頼人の意図するところはわからないけれど、娘を取り戻したいっていつていたわ。」

ヒロ……アリアの義兄ね。ヒロに連れ去られたんだって。でもとにかく、お金払いがいいのよ。うちの事務所はあまり余裕がなくて。だから魅力的なの、この依頼」

榎はアリアが女性だということはさらっと流して、訊きもしないことを取り繕うようにべらべらと話した。アリアが女であることにこれ以上触れたくないような態度だった。

どうやら、昇には女であるということは知られていないらしい。それだけ確認したアリアはほっとして、榎の昇に対する気持ちまで想像することができなかった。

話しているうちに、車は中心街近くにある目的のマンション前に着いた。

榎はマンションの人の出入りがよく見える路地に、車を止めた。

そこは、アリアが使っているマンションの一つだった。勿論、今は誰もいない。

榎は車にアリアを残してマンションに入り込み、数分後に冴えない表情で戻ってきた。

「やっぱり無駄だった。もう！ 何処へ消えたのかしら。確かに旭川にいるはずなのに」

水道メーターは動いていないし、部屋を使った形跡がないようだと言はばやいた。

「依頼主には、毎月報告しているんですか？」

「まあね、でも今月はこれじゃあ、たいした情報はないの」
「ななは何を企んでいるのだろうか。」

虎視眈々と、自分を連れ戻すための算段をしているのか。犯罪の証拠集めでもして弱みを握ろうとでもいうのか。そして、いつでも連れ戻せるように場所を確認しているというのか。

アリアは今も使用していない自分のマンションを自分で張り込みながら考えた。

「ここで待っていても、収穫はなさそうね」

正午過ぎ、槇が何度目かのため息をついた。

槇が張り込みを諦めてエンジンをかけ、その場を去ろうとした時、アリアの携帯電話の着信音が車内に響いた。

液晶画面には、佐藤美希と表示されている。槇に電話を受けていいかと目で確認すると、どうぞと頷いた。

「周ちゃん？ ごめんなさい。仕事中よね。あの、今夜、東君のことで相談にのってほしくて、どうしても会いたいの」

美希はおずおずと、だが譲らない口調だった。

十無のことを相談したいというのであればむげにもできず、アリアは困った。

槇と行動して隙を見てファイルを手に入れたのに。

それに今朝早くヒロに電話をしたら、二十日にDは来たが喧嘩して帰ったという。詳しいことは聞けなかったが、アリアは自分が蒔いた種に責任を感じていた。

このままほっておくこともできない。何とかDとヒロを仲直りさせるため、仕事後にDへのプレゼントを買いに行つて仲直りをするきっかけにヒロから渡してもらおうと考えていたのだ。

「周ちゃん、お願い」

美希は引き下がりそうもない。

「……わかりました」と、アリアのほう折れた。

Dへのプレゼントは、美希さんに会う前に買いに行くしかない。アリアは仕方なく美希と会う約束をした。

22・病(やまい)

音江榎とアリアがマンションから去った後、入れ違いで東昇も同じ場所へ訪ねてきていた。

昇もまた、仕事の合間にアリアの足取りを追っていたのだ。アリアがいたことがあるこのマンションの部屋に、今月、明かりがついていたことがあるらしいという情報を、昇は得ていた。

だが、ここ数日はついていないとのことだった。

昇は何度かこの場所へ足を運び、雪はねをしている、近所に住む人の良さそうな初老の男と親しくなり、注意して見て貰っていたのだ。

他にも思い当たる所はいくつか当たってみたが、何も収穫はなかった。だが、まだきつとアリアは旭川にいる。

昇はそう確信していた。

十無はもう本当にこれでいいと思っているのだろうか。

それに、アリアのことを本当に忘れられるのか。ただの容疑者として接することができると思っているのか。

どうしても、アリアを見つけて十無に会わせたい。そして……その先のことは昇は考えていなかった。

とにかくこのままではだめだ。情性で結婚相手など決めるものではない。

十無がアリアを諦めればライバルは減るが、今の十無は見えていなかった。

十無に電話してアリアと一緒に探そうと誘っても、今は休暇中だから、仕事はしないと断られたのだった。

その上、二十四日に結婚を前提に付き合いたいと美希に伝えるのだという。

それまでになんとしてでもアリアを見つけないければならない。

こんなときに限って何故現れないのだ。何処へ雲隠れしてしまっ

ただ、アリアは。

氷点下五度という真冬日の昼下がり、途方に暮れた昇は、マンシヨンの前で立ち尽くしていた。

そんな昇の心配をよそに、その日の夕刻、十無は美希と旭川の中街、買い物公園を駅のほうに向かってぶらぶらと歩いていた。

美希が休みだったため、十無は美希を朝から誘って映画を見た後、ホテルのレストランで飲茶ランチを食べたのだった。その後どういたらいいものか思いつかず、とりあえず歩いていた。

今回も二人の会話は弾まず、途切れがちだった。

どうも気まずい。十無はそう感じていた。

だからといって、それをどうすることもできない。そんな自分かもどかしくて情けなかった。

女性と過ごすってこんなに気を使って疲れるものなのか。最近、女性といえば、女装したアリアと接するくらいだったな。……それは女のうちに入らないか。

十無はそんなことを考えてつい苦笑しそうになりながら、並んでいる店先になんとなく目を泳がせていた。

ジュエリ という看板が目についた。

そうだ、美希さんにクリスマスプレゼントを考えなければ。

「美希さん、クリスマス・イブの夜、また会ってもらえますか」

一瞬間があったが、美希は「ええ」と、答えた。

「美希さんの指のサイズを教えてくださいませんか」

「私、指輪つてしないからよく分からないの」

「そうですか、じゃあその宝石店で見てもらっていいでしょうか」

「あ、……はい」

美希の返事は、毎回、一呼吸置いて返ってきた。

タイミングがずれる。これは、余り気が進まないということなのかもしれない。

鈍い十無でもそれは感じていた。

宝石店のドアを押し開けて先に美希を通し、十無も店内に入った。

「アリア？」

十無の視界の先に、見慣れた黒いサングラスのアリアがいた。どうしてここにいる。何故今ここにいる。今は会いたくなかった。会おうと決心が揺らぎそうだ。

十無は何年も会っていないなかったような気がするほど、アリアを懐かしく感じていた。

「なあに？ 知っている人？」

十無がその場に立ち止まっていると、美希がコートの袖を引つ張った。

視線はアリアに釘付けのまま「ああ、少し」と、答えた。

アリアはシヨ ケースから、高価そうなダイヤのピアスを店員に見せてもらっているところだった。

袖子には大人っぽいピアスだ。やっぱりアリアには彼女がいるのだろう。この前一緒に歩いてきた美女か。

「彼も、彼女にクリスマスプレゼントかしら。にしても、随分と高そうなダイヤのピアス。あんなに若いのに、どんな仕事しているのかしらね……東君？」

美希は立ち止まって店内に進もうとしない十無の顔を覗き込んだ。「知り合いなら、声をかけたら？」

「いや、そんなに親しくはないし……」

十無が躊躇している間に、アリアのほうが十無に気がついた。

アリアは驚いた様子で「十無？」と声をかけて近づいてきた。手には購入したばかりの、赤いリボンの付いた小さな箱を持っていた。

「お前も、彼女へのプレゼントか」

「いや違う、これはちょっと色々あって……」

「隠さなくてもいい、この前、飲み屋街で美女と歩いていたのを見かけた」

「え？ それは誤解だ。……十無こそ、素敵なお前を見つけたね」
そう言っ、アリアは美希に微笑みながら挨拶をした。

自分が女と歩いていようが、アリアがどうこう言うわけがないか。

十無はアリアの淡々とした反応が少し寂しかった。

それは予想通りの反応だったのだが、実際に目の当たりにすると僅かな望みも打ち砕かれて、十無はシヨックを受けた。

「じゃ、私は用があるから。またね、刑事さん」

「おい、待て」

十無はこのまま会えなくなるような気がして、思わずアリアを引き止めた。

「何？」

「……何処へ行く？」

「内緒」

アリアは振り返ると、悪戯っぽく一言だけ残して店を出ていき、人ごみに消えた。

アリアに会うと胸元がざわつく。心の中に冷たい風が吹き込んで渦巻いて体中を駆け巡り、ふっと一瞬で消え去ったようだ。

そして、胸に熱い疼きだけが残るのだった。

多分、アリアという病にかかっているのだろう。一生治りそうもない、厄介な病。

十無はアリアのことで頭が一杯になっていた。

アリアが去った後も、出て行ったドアの方を向いて、十無は暫し呆然としていた。そして、美希に声をかけられるまで美希の存在を忘れていたのだ。

「東君、私、もう行かないと。ごめんなさい、今夜は用事があるの」

美希は眉を少し寄せ、申し訳なさそうに言った。

「そうですか、わかりました。じゃあ、二日後のイブに」

優しい笑顔で答えた十無に、美希は遠慮がちに「ねえ、東君、ひよっとして、今の男の子のこと……」と、訊きかけたが、いや、まさかね。と、首を傾げて十無に聞こえないほどの声で呟いた。

十無がどうしたのかと訊ねても、美希はなんでもないと、返事をして笑顔に戻り、「今日は楽しかった」と言っって手を振り、足早に店を出ていった。

十無の心に何か引っかかった。

23・悪魔の囁き

アリアは動揺していた。まさか、宝石店で二人に会うなんて。ひよっとしたら、もう婚約指輪の相談でもしていたのだろうか。二人が一緒にいるところを見て、顔を背けたくなくなった。早く店を出たかった。

すっかりと目を見開いていないと、涙が流れてしまいそうだった。アリアの姿で行動していて良かった。サングラスで表情を隠せたから。だが、佐藤美希は何を考えているのだろうか。

日中、十無と会っておいて、夜は坂本周に会うとは。

昼間の電話はデート中にかけてきたということか。彼女の行動がわからない。

アリアはワイシャツにエンジ色のネクタイを締めてVネックのセーターにショート丈のトレンチという出で立ちで、なるべく年下を感じさせないよう、ラフな格好を避け、服装にも気を使った。

佐藤美希に会うために、再び坂本周に早代わりしたアリアは、居酒屋で美希を待つ間、もやもやした気持ちで日本酒を飲んでいた。

酒の力を借りないと、まともに美希の顔を見られないのではないか、そんな不安があったのだ。

待ち合わせ時間に十五分ほど遅れて、美希が現れた。

「遅くなつてごめんなさい」

そう言いながら、彼女はカウンター席に並んで座った。

服装は夕方に会った時と同じタイトスカートのスーツなのに、今の美希はどこか雰囲気が違う気がした。

アリアは彼女をまじまじと見つめた。

「周ちゃん、どうかした？」

「いや、なんとなく感じが違うな、と」

「そう？」

美希は微笑んで少し頬を染めた。

ああ、そうか。化粧が違うのだ。

アリアははっと気がついた。

口紅の色が鮮やかなピンクになっている。それに、マスカラもしっかりつけているようだ。瞳が一層くつきりとして印象に残る。きつと夜用にメイクを変えたのだろう。

アリアはただ単純にそう思った。

美希はアリアと同じ日本酒を注文して、二、三品摘みを頼むと、乾杯した。

「今日は十無さんとは会わなかったんですか？」

アリアはわざと聞いてみた。

「実は、さっきまで一緒にいたの。昼間、周ちゃんに電話をかけたときも、トイレに行くふりをしてこっそりかけたの」

美希は苦笑しながら、素直に白状した。

「じゃあ、今夜本当であれば十無さんと過ごす予定だったのでは？」

「朝から会っていたのよ？ 夜も会ったら疲れちゃうわ」

そう言って美希は、枝豆を口に放り込んだ。

美希さんは、やっぱり十無のことが好きではないと言いたいのか。

アリアは美希の気持ちがあつかめずに、渋い顔をした。

「おかしなことを言っているって思っているでしょ。だから、今夜、私は周ちゃんとここにいろの」

アリアはそう言われると、尚更わけがわからなくなり、美希の気持ち量を量りかねて黙った。

「東君と私は……うまくかみ合わない。もうそれははっきりしたわ。でも、今日もそれを言い出せなくて。勝手よね、東京から呼びつけておいて」

美希はため息とともに、苦い薬でも飲み込むように、日本酒をぐいと喉に注いだ。

「私の憧れの人、東君の悲しい顔は見たくないけれど、相手が傷つかないように断るなんて、無理よね。だけど、今日の東君を見てみると、ひょっとして東君は断られるのを待っているんじゃないかっ

て思った」

美希の言葉がいちいちアリアの頭に響いた。

だが、アリアには美希と十無に出くわした時の衝撃が、残像として残っていた。

いくら美希がうまくいっていないのだと言っても、二人が付き合っているという事実がある限り、美希の言葉を噛み砕き、すんなりと消化することができなかった。

そんなことを言っても、美希は十無が嫌いなのではないのではありません。

アリアは喉もとまで言葉がでかかった。

「美希さんは、どうしたいの？」

知らず知らず、アリアは冷ややかな口調になっていた。

「……イブに、東君と会うの。その時に答えを出すわ」

相談したいということだったが、彼女はもう自分で答えを持っている。ただそれを確認したかったのか。

「ねえ、周ちゃん。夜景の見えるところで飲みたい気分なの」
どういう気分だ。

アリアは美希が何を考えているのかさっぱりわからなかった。

それに、ヒロに会ってDとの仲直りのお膳立てもしないとならないのに。

早くファイルを手に入れるために、音江槇とも、もっと近づいておきたいのに。

こんなところで時間を潰してはられないのだ。

アリアの目には、佐藤美希がとんでもなく我が儘に映っていた。

それは、嫉妬も入り混じっていたのかもしれない。

アリアは会計を済ませて店の外へ出てから、帰るつもりで美希に言った。

「ごめん、今夜は仕事で疲れていて、早く帰りたいんだ。それに、もう美希さんは答えが出ているのでしょうか？」

「いいえ、それは、……あなた次第なの」

美希は立ち止まり、熱っぽい瞳でアリアを見つめた。

今頃になって、アリアはようやく気がついた。

佐藤美希は坂本周が好きなんだ。

でも、私にどうしろというのか。坂本周は実在しない。美希さんの気持ちに応えることはできない。でも拒否をしたら、美希さんは十無の申し込みを受けるといつのか。

では、彼女に曖昧な態度をとれば、二日後のイブに、彼女は十無に何と返事をするのだろうか。

そして、『仕事』が片付いた後、坂本周が急に姿を消したら。もしかして、それでうまくいくのだろうか。十無も今までと変わらず、今までのように仕事に専念して自分を追いかけるだろうか。

「……わかりました。じゃあ、少しだけ飲みに行きましょう」

アリアは美希の腰にそつと手を回して並んで歩き、近くにあるホテルの最上階のバ　に向かった。

24・オレンジのキス

二人はホテルの最上階、バー・エジソンのカウンター席に並んで座った。

カウンターに立つバーテンダーの背後は、一面のガラス張りの窓で、夜景が広がっていた。

店内は薄暗くて夜景が綺麗に見え、美希のご希望通りの雰囲気のお店だった。

暮盤の目のように拓けた街は、直線上に明かりが並び、それぞれが交差している。高層ビル郡が少ない控えめな夜景だが、冷えわたる空気に今夜は雪も降らず、明かりがはつきりと輝いて見える。

それは、佐藤美希を誘惑するには充分なロケーションだった。

席は半分ほど埋まっていて、そのほとんどがホテルの宿泊客のようだった。時折、関西弁が聞こえてくる。賑やか過ぎず、静か過ぎない程良いざわめき。

「周ちゃん、ここには来たことがあるの？」

「何回かね」

「そう、私は初めて。綺麗な眺め」

美希はカウンターに両肘をついて夜景をうつとりと眺めた。

「美希さん、カクテルはよく飲む？」

「ううん、ほとんど飲んだことがないの。行くのは居酒屋かカラオケのあるような飲み屋ばかり。甘口のカクテルで、お任せするわ」

よし、それであれば問題はない。

アリアはお酒が好きだ。勿論カクテルも。

そう詳しくはないが、ヒ口ともよく飲んでいて、ある程度アルコールが強いのはどれか心得ていた。

「じゃ、チョコレート味なんてどう？」

「面白そう。じゃあそれにするわ」

「彼女にルシアンを。僕は、スプリッツァー」

アリアは若い女性のバーテンダーに、オーダーを伝えた。

「聞いたことないカクテルね。私が知っているのって、マティーニとスクリュードライバーくらいかしら？」

「きてのお楽しみだね」

アリアは美希に微笑んだ。

そう、このまま彼女の気を惹いて……そして、十無のプロポーズを断らせる。

ここまで来たら造作もなく実行できるだろう。既に彼女は坂本周に惹かれているのだから。

美希の目の前に褐色の液体が注がれたカクテルグラスが置かれ、その隣には、大きめのカクテルグラスに氷が入り、炭酸水の気泡が浮かぶ、無色のカクテルが並んだ。

「乾杯」

二人はグラスを近づけた。

「ん、チョコレート味がする。甘くて飲み易い」

「そう？」

アリアは口の端で笑みを作った。

美希が飲んでいるルシアンは、クレーム・ド・カカオに隠れてウオッカとドライ・ジンがシェークされているロシアのカクテルだった。

アルコール度数が高いが、口当たりが良く、レディー・キラーと言われるものだ。

一方、スプリッツァーは、白ワインにソーダ水をステアしてあるヘルシードリンクだった。

自分が先に潰れるわけにはいかない。

彼女を前後不覚にし、ホテルの部屋へ連れ込み、既成事実があったかのように装う。

アルコールだけでは不安だから、合わせて睡眠薬も使おうか。そんなことを考えての、アリアの笑みだった。

美希は何も知らず、アリアに気を許してカクテルを愉しんでいる。

アリアに罪悪感がないわけではない。

だが、本気で十無のことを好きだといえない彼女が、このまま十無に寄り添うのは我慢できなかった。

きっと彼女なら、また直ぐに新しい彼が見つかるだろう。アリアは勝手にそう思った。

そう思わないと、罪悪感で押しつぶされそうだった。

彼女は悪くないのに。

「周ちゃんて、旭川に初めて来たんじゃないのね」

「前に、少しだけ来たことがあるけれど」

「そうなの？ 道もよく知っているし、覚えが早いのね」

危ない危ない、美希さんをどうするかばかり考えて、演技を忘れていた。

アリアはにつこりしながら、内心、冷やりとした。

「白状するけれど、私、男の人とこうやって二人で会ったことってないの。だから、とつても緊張している」

美希は両手を胸の前で重ね、アリアに弱々しく微笑む。

「こんな素敵な女性を放っておいた男は、損をしたね」

「本当にそう思う？ お世辞でもそう言ってもらえると嬉しい」

「本当にそう思っているよ」

気障な齒の浮く台詞も、今のアリアはこともなげに平気で口にする。

酔っているわけではないが、多少やけ気味に、大胆に、饒舌になっていた。

ここまできたら、後は何も考えず、美希を落とすことだけに専念する。

それが一番良い方法なのだから。

アリアは頭の中でそう繰り返し、もう一度自分を納得させた。

「今まで、何人の女性にその台詞を使ったの？」

「僕は、好きになったらずっと思いつけてしまう。振られても、簡単に諦めることが出来ない奴なんだ」

「今も、そういうひとがいるのね。その人が羨ましいな」

それには答えず、アリアはただ、曖昧に微笑んだ。

「でも今は、あなたがいる……」

「好きとはいってくれないのね」

「あなただつて、それを口にするのを躊躇っている」

「周ちゃんは、何かわからない匂いがある。あなたにその言葉を言ってしまうと、魔法が解けて、何もかもが終わってしまうようで怖い」

彼女の言ったことは遠からず当たっていた。

「美希さんは、十無さんとかみ合わないって言っていたけれど、でも好きなんですよ。僕は、十無さんの次にある安全パイなんです。ようっ？」

カクテルグラスをうつろに見つめ、両手で挟んで弄びながら、アリアはいかにも切なさうに、小さくため息をついた。

「違う。東君と会つと、今でもときどきするの。だけど……周ちゃんといるときとは、違う。周ちゃんとは……」

美希は潤んだ瞳で、熱い視線をアリアに送っている。

アルコールも急激に体中を駆け巡り、動悸しているようだ。

「そんな言葉を聞いたら、僕は……でも、僕からは何もいえない。君は十無さんと婚約するのだから」

「嫌、周ちゃん、そんなことを言わないで。私、あなたと、一緒にいたい」

美希はカウンターに肘をついているアリアの腕に手をのせ、するるように言った。

「本当に？」

そつと、美希の手に自分の手を重ね、アリアは美希の瞳を見つめた。情熱的なやり取りとは裏腹に、アリアはこの成り行きを、冷静に傍観していた。

後は彼女を眠らせるだけ。

美希が化粧室へと席を立ち、今がチャンスと、アリアは次のカクテ

ルをオーダーした。

「オレンジ・ブロッサムを二つ。片方はジンを三、オレンジを一で」
佐藤美希は坂本周の手中に落ちていた。

アリアの思うままに、全てうまくことが運んでいた。

だが、うまくいっているはずなのに、アリアの気分はすぐれなかった。まだ、揺れていたのだ。これで本当にいいのだろうか、と。

ほどなく、バーテンダーがシェークしたオレンジ色の鮮やかな液体が、アリアの目の前に差し出されたカクテルグラスに、並々と注がれた。もう一つは彼女の席へ。

ジン版スクリュードライバー。それも、一方はジンの分量を増やしたカクテル。オレンジはジンを包み込み、多少ジンの量が多くなっても風味はさほど変わらない。彼女が戻る前に、睡眠薬も入れる。それで、全てが終わる。

つややかな唇の美希が戻ってきた。アリアは彼女と微笑を交わす。

「オレンジ・ブロッサム。お祝いなんかで使われるカクテルだよ」

「ふうん、幸せのカクテルね」

「では、美希さんの幸せに」

「ありがとう」

二人はカクテルに口をつけた。

「これもとっても飲みやすくて美味しいわね」

「それはよかった」

アリアはもう、笑みを絶やささない。満面の笑み。美希を包み込むように優しく、そして苦悩に満ちた、緊張感が走る、笑み。

彼女の幸せを踏みにじる権利など、私にはない。

アリアはグラスに半分ほど残っている、オレンジの液体を飲み干した。

カッソ。

アリアは空になったグラスをカウンターに置いて俯くと、何かを吹っ切るように一瞬目を硬く閉じて、そしてゆっくりと美希の方へ、苦渋に満ちた顔を向けた。

結局、睡眠薬を盛ることはできなかったのだ。ジンが多いほうのカクテルはアリアが飲んでいた。

「美希さん、僕になんか引つかかってはだめだ。僕はどうしようもない人間なんです」

「何を言い出すの？」

「僕は、あなたにはふさわしくない」

「そんなこと、勝手に決めないで」

美希の瞳は潤み、今にも泣きそうだった。

「僕には愛する人がいます。だけど、絶対にうまくはいかない。そして今も、忘れることができないでいる。忘れようと思って、美希さんを利用したんです。こんな気持ちでは………すいません。美希さんの気持ちを弄んでしまった」

「私では、その人のことを忘れさせることはできないの？」

普段、快活な彼女が、両手を口に当て、涙を堪えているのを見るのは辛かった。

アリアは目を逸らして俯き、「僕の話は、忘れてください」と呟いた。

「私、振られたのね」

「………すいません」

これでいいんだ。彼女は悪くないのだから。

二日後のイブには、彼女は十無と会って、きつとまた笑顔に戻る。十無は私には決して手の届かない人なのだ。

アリアもまた、泣きたい気分だった。

「悲しいけれど、私が入り込む隙はないのね。………周ちゃんの好きな人って、どんな人なの？」

「仕事第一で、融通が利かなくて、人の気持ちに鈍感で、何を考えしているんだかわからなくて………」

「それって、憎まれ口ばかり。それに、なんとなく東君に当てはまる」

「本当だ」

二人は泣きそうな顔のまま、顔を見合わせて笑った。

二人は思い足取りでバ　を出て、エレベーターへ乗り込んだ。

「もう会わないほうがいいでしょう」

「今夜が最後なのね」

美希の瞳に再び涙がたまっていた。

「周ちゃん、ねえ、お願い」

美希は涙で濡れた大きな瞳を閉じ、アリアにキスをせがむように顔を寄せた。

「美希さん……」

本当に、ごめんなさい。

アリアは優しく美希の頬に口付けをした。

「周ちゃん、好きよ」

不意に、美希はアリアの首に両腕を回して唇を重ねた。

柔らかな彼女の唇。イブにはこの唇が、十無の唇に触れるのだからか。

唇を重ねている間、アリアは自分でも理由のわからない涙が、胸にこみ上げてきた。

彼女のキスは、ほろ苦いオレンジの味がした。

25・優しい十無

アリアはとにかくけだるさが抜けず、ベッドから起きられなかった。

朝、一度は起き上がって坂本周に扮したものの、出勤する支度ができただ頃には、足取りは一層重くなってベッドに逆戻りしてしまったのだった。

佐藤美希と別れたのは午前零時前のことだから、そう遅く帰宅したわけではなかった。

だが、どうしても探偵事務所へ出勤する気になれず、アリアは風邪を引いたとあって、そのままずる休みをした。

問題は山積したままだった。

音江槇からファイルを手に入れなければならなかったし、ヒロとDのことも気がかりだった。

だが、今のアリアは体がいうことをきかず、どうすることもできなかった。

虚無感が体を支配していた。

明日の夜には、多分、十無は美希に結婚を前提にした付き合いか、婚約を申し込むだろう。

それはもう、頭では納得しているつもりなのだが、そのことが頭から離れなくて、アリアは食事も摂らずにベッドでごろごろと過ごした。気がつくくと、外は薄暗かった。

一体何時なのだろう。

部屋の明かりをつけるのも大儀で、仰向けにベッドの上に寝転がり、アリアは窓から見える灰色の空をぼんやりと眺めた。

大粒の雪が空から落ちてきた。

雪は次第に激しく降り始め、灰色の空は、真っ白く塗り潰された。夜に向かって暗くなっていくはずの空は、雪で明るくなっていった。

落ちてくる雪を目で追うのが大変なくらい、激しく降りだした。

いつそ、せいせいする。

雪が全てを消してくれたらいい。

見たくないもの、消してしまいたいもの、全てを綺麗に真っ白く、ついでに自分も、かき消してくれたらどんなにいいか知れない。今の自分が嫌だ。美原ななという、解きほぐすことが不可能なしがらみ。そこから抜け出すこともできず、真っ向から対峙する勇気もなく逃げている自分。

考えてもどうにかなるものではないけれど、考えてしまう。

アリアは再び眠りについてしまいたくなり、目を瞑った。

と、その時、人の気配が微かに感じられた。

眠りの世界へ落ちようとしていたアリアに、緊張が走った。

「誰だ！」

アリアは跳ね起きて、薄暗い部屋の入り口の方に振り向き、低い声を発した。

閉まっていたはずの部屋のドアは開け放されているが、誰もいない。

アリアは少し冷静になって考えた。

これだけ気配を消して不意をつく人物は、多分彼女しかいないという結論にたどり着いた。

「どうしたの？ 明かりもつけずにごろごろと」

アリアの背後に気配が移り、聞き覚えのあるハスキーな声が穏やかに響いた。

Dだ。

「驚かささないでください」

アリアは肩に入った力が抜けたため息をつきながら振り向き、やっとDと対面した。

部屋は薄暗く、窓からの雪明りで、Dの微笑をたたえた顔は青白く照らされていた。

「だって、部屋が暗くていないと思ったんですもの」

じゃ、いないと思って忍び込んだのか。悪趣味なD。

アリアは苦笑した。

「一言いいたいことがあつて来たの。……無用なお節介はいらな
わ」

Dはベッドに座っているアリアの横に腰掛けて、肩をすくめた。

「お節介？」

「そう、ヒロのこと」

この前の、ヒロの誕生日の夜のことか。

「二十日は、たまたま用事ができて……故意に仕組んだわけじゃな
いよ」

「本当に、そう？」

Dに微笑まれながら凄まれると、アリアは言葉に詰まった。

「ああいう不意打ちはヒロが嫌がるのよ。もうしないでね」

「Dは、それでいいの？」

アリアは何も考えず、そんな言葉が口について出たのだが、言っ
てから後悔した。

今の状態でいいわけがない。きっとDもそう思っている。なのに
Dにそんなことを訊くなんて、愚問だ。

予想外のことを訊かれたとでもいうように、Dは目を見開いてか
ら、口角を少し上げて目を細めて微笑んだのだ。

悲痛な微笑。

アリアは苦しそうなDの顔を直視できず、俯いてしまった。そし
て、素直にごめんなさいと、謝った。

「いいのよ。私のことより、アリアちゃん、あなたはどうなってい
るの。何かあつたんでしょ？」

Dの低い声は、気持ちが悪くなり、子供のように素直になれそう
な気がした。母親ってこんな感じなのだろうか。

アリアは母親の腕に包み込まれているような安堵を感じていた。

昨夜の佐藤美希のこと、見合いを壊そうとしたことを、アリアは
為ら躊躇いながらも、ありのまま話した。

「全てに自信がなくなってしまうた」

「……」

「自分の気持ちも行動も、これでよかったのかと」

「後悔しているの？」

「わからない」

「でも、その時はそれが一番良いと思ったのでしょう？」

「多分」

「終わったことはもう後戻りできない、もし後で間違っていたと思うのなら、その時にまた行動するの。あの時は間違っていたって。それでも遅くない。何もしないではだめ。後悔を重ねることになるでしょう？」

Dは横に座ってアリアの肩を抱き、頭を肩に寄りかからせて優しく囁いた。

Dの艶やかな長い髪がアリアの顔にかかり、甘い香りに包まれた。個人の特徴を消すため、Dは特定の香水をつけていないはずだが、シャンプーの香りなのか、甘えなくなるような匂いが仄かに漂っているのだ。

アリアは安らぎを求めてその匂いに顔を埋めた。Dもまた、自分と同じ、羽を休められる居場所を探していたのだろうか、アリアは思った。

暗い部屋に、窓だけがスクリーンのように明るく、風と共に舞い上がっては降り続く、吹雪に変わった白い雪を映写していた。

二人は言葉を交わさずに、音のないスクリーンを眺めていた。

そうしていたのは五分ばかりだったのか、それとも二十分ほどが過ぎていたのだろうか、玄関のインターホンが鳴って、二人は顔を見合わせた。

訪問販売か何かだろうと、出ないでいると、続いてドアを叩く音がした。

「おい、いないのか？」

同時に、玄関ドアの開く音がした。

十無だ。十無がどうしてここへ？

一気にアリアの心臓が高鳴った。頭の中を台風が駆け巡る。アリアは混乱した。十無が坂本周を尋ねてくる理由などない。佐藤美希から何か聞いたのか。それとも、アリアだとばれたのか。

「大丈夫よ、あの刑事はあなただと感じてはいない。きっと頭の中は、明日のイブで一杯よ。さあ、今は坂本周なんですよ？」

Dはアリアの動揺を感じ取り、そう断言して不安を打ち消してくれた。

その言葉は威力を発揮し、Dに背中を軽く押されてベッドから立ち上がった時にはもう、アリアは落ち着きを取り戻していた。

なんにしても、今は正体がばれるわけにはいかない。自信を持って坂本周を演じよう。

「周ちゃん、頑張ってね」

Dはおどけてそう言い、自分も立ち上がって、アリアの顎に手を添えたかと思うと、風のような早業で、アリアの頬へ唇をかすめた。

「部屋に上がるぞ、いないのか？ 事務所で風邪だと聞いたが……」
十無が二人のいる寝室へ顔を覗かせた時、Dは一瞬のうちに窓から消えた。

「Dか！」

そう叫んで、十無は窓辺に駆け寄り、開いたままの窓から外を覗き込むが、Dの姿はなく、この吹雪で、着地した跡もよく見えなかった。

ここはアパートの二階だ。雪が積もっているとはいえ、普通、飛び降りれば骨折くらいはするかもしれない。それに、靴はどうしたのだろう。足元を見ると、Dが立っていた辺りの絨毯が、解けた雪で濡れていることに、アリアは気がついた。Dは靴を履いていたのだ。土足で部屋に上がりこんでいたのだが、アリアは暗がりですぐで気づかなかった。

Dらしいというか、泥棒業が板についているというのか。

笑っている場合ではないのだが、アリアはつい苦笑してしまった。

「今、この窓から女が……」

十無が自信なさそうに、アリアに同意を求めた。

「十無さん、何を寝ぼけているんです？　ここは二階ですよ」

「だが、確かに長い髪がするりと落ちていくのを見たような……あれはD？」

「雪が入るので窓を閉めますよ、ちょっと部屋の空気を入れ替えていたんです」

やはり刑事、Dの姿は、ほとんど見えなかったと思うが、感なのか。

十無は今まで、まともにDの顔を見たことがないはずだが、もし鉢合せしていたら、確実にDだとわかっただろう。

アリアはひやりとした。

「何か用事があったのではないんですか？」

アリアはさりげなくカーテンを閉めた。

「ああ、勝手に上がりこんで、すまん。これ、蜜柑なんだけれど、風邪に良いと思って」

まだ狐につままれているような、ふに落ちない顔をして、暗い部屋の中を見回し、十無はビニール袋をアリアに手渡した。

ずしりと重い袋の中には、大きな蜜柑が二十数個は入っていた。

不器用なお見舞い。十無らしいというか……一人でこんなには食べられないが。

だが、アリアは自然に顔がほころび、胸の辺りが暖かくなった気がした。

アリアはお礼を言ってから、部屋の横につながっている居間へと促し、ローテーブルを挟んで向かい合わせに腰を下ろした。

十無は足を崩して胡坐をかき、落ち着くと熱はないのか等と、しきりに心配し、それと同じくらい、風邪を引いているのに、押しかけて悪かったと、何度も謝った。

その度にアリアは、熱も下がってもう大丈夫だからと繰り返す羽目になった。

そして、十無に話しを促してやっと用件にたどり着いた。

「用というほどのことではないんだが」

なにやら話しづらそうに、十無は膝の上で両手を何回か組みなおしている。

「明日のことですか？」

「坂本君、知っているのか？」

十無が心持ち身を乗り出した。

「ちらつと、美希さんから聞きました。会う約束をしたのだと」

「実はそうなんだ。俺は、二日後には東京へ戻らなければならぬから、このまま結婚を前提に、付き合いを続けるかどうか、はつきりさせなくてはならないと思っっている」

しなければならぬ、か。きつちりしている十無らしい。

アリアは無言で相槌を打ちながら、話しに聞き入った。

「で、レストランも予約を済ませて準備も整えたのだが」

十無は視線を落としてさつきから何度も組みなおしている両手を見つめた。

「彼女に何と言っていいものか、悩んでいるうちにわからなくなってしまった」

「はあ？ 本当にどうしようもない奥手の十無。よりによって、それを坂本周に相談に来たのか。」

アリアは一気に力が抜けた。

そして、声を上げて笑いたくなくなった。こんな十無を相手に、付き合いがなくてはいけないなんて。佐藤美希はこれから苦労するだろうなと同情してしまうくらい、アリアは変にさばさばした気分になった。

「ありのままを、思っていることを言葉にしたら良いのでは？」

「それができたら苦労はしない。この前、昇に坂本君から指南してもらえと言われたのを思い出して……酒の上での戯言だったろうが、恥を忍んでこうして相談に伺った」

剣術でも習いに来たかのように、畏まった言い回しをする十無が、アリアには可愛く思えた。

十無なりにかなり困っているのだろう。

普段、決して弱音を吐きそうにない十無が、信じられないくらい気弱になっている。昇の所へはさすがに兄というプライドがあり、行けなかったのだろう。

今の十無に自分ができること。大したことはできないけれど、十無がそれで幸せになるのであれば、坂本周として喜んで相談に乗ろう。

「今から、そう力が入ってはうまくいくものもだめになります。十無さんは、まずリラックスすることが第一だと思いますが」

アリアはにこつと笑ってキッチンへ行き、氷を入れたロックグラスを二つ持ってきた。脇にはバーボン、クレメンティンを抱えて。

「君、風邪を引いているのに大丈夫なのか？」

「気付けに丁度いいですよ」

「なんだかその女性のラベルが、随分と高級そうだな」

「あまりバーボンは飲みませんか？ これは三千円台ですからそう高くはありません、気軽に飲んでください」

アリアはグラスに、琥珀色の液体を注いだ。

「では、明日うまくいくように」

アリアは戸惑う十無にグラスを持たせ、自分のグラスをカチンと合わせて勝手に乾杯した。

「きついな、この酒」

一口飲んだ十無が顔をしかめた。

「アルコール度数五十・五度ですから。でも、口当たりがよくて甘いから、飲みやすいでしょう？ このくらいの酒じゃなきゃ、気付けになりません」

十無は首をかしげながらもそうかと、納得し、アリアもそうですと、飲みながら力強く断言した。

十無と二人きりでお酒を飲むことになるなんて。嬉しいけれど、もつと違う形で飲みたかった。

アリアは片方の膝を立てて座り、その上にグラスを持った方の腕

を乗せて、バーボンを少し口に含んだ。

アリアの視線は十無に向いている。

十無の、口の端ではにかむような笑顔がいとおいしい。

いつも冷静な表情を崩さない十無。困ったことがあると、つい黙りこんで難しい顔になる十無。

「坂本君……その、俺、なにか変かな？」

十無はアリアの視線を痛いくらい感じたのだらう。

アリアの方をちらりと見てから、居心地が悪そうに髪をしきりになげた。

「あ、すいません。ちょっとぼうつとしてしまっ……」

アリアは慌てて取り繕った。いけない、今の自分は坂本周だ。十無が変に思う。

いつの間にか、坂本周の仮面は剥がれてアリアとしての視線を十無に向けてしまった。

恋する女の熱い視線。

「また熱が上がってきたんじゃないのか？」

覗きこむようにして、十無は心配そうな顔をこちらへ向けた。

「大丈夫です」

アリアは思わず、きつい口調で否定した。

そんなに優しくしないで。

十無の優しさは毒だ。優しくされると勘違いしてしまいそうになる。

「……それならいいが。しかし、この酒はきついな」

十無はテーブルの上にあるバーボンの瓶を手に取って、物珍しそうにラベルを眺めた。

「それは、川に落ちて死んでしまった娘の肖像です。名前がクレメンタイン。聞いたことありませんか？ アメリカ民謡で愛しのクレメンタイン」

「いや、知らない。でも、あまり縁起がいいものではないな」

「父親が死んだ娘を思う歌。死んでもずっと思い続けてもらえるな

んで、ロマンチックだと思いませんか」

「そんなものかな」

「僕は素敵だと思います」

「でも、死んだらおしまいだろう?」

「そうでしょうか」

「いつまでも死んだ人間のことを、くよくよと考えていたら、人は生きていけない。少しずつ忘れて、最後に良い思い出が一つ、心に残っていればいい。俺は人間の頭って、機械と違ってうまく忘れてくれるから、よくできているなと思うよ」

バーボンのせいか、無口な十無が、饒舌になっている。

「そういう考えだったら、僕も好きです」
好き。

違う意味で口にしたのに、十無に向かってその言葉を使ってしまったアリアは、耳の先まで赤くなっている気がした。

アリアはまともに十無の顔が見られなくなった。

テーブルに置いたグラスを両手できつく握り、アリアは俯いた。

「どうした? やっぱり具合が悪いのか?」

十無の声が優しい。優しくされればされるほど、アリアは辛かった。

顔を上げたら、きつと泣いてしまう。

アリアは首を横に振るのが精一杯だった。

ぐうつ。

しんとしたところに、アリアのお腹の虫が鳴いた。

「なんだ、お腹が空いていたのか」

「そういえば、朝から何も食べていなかった」

こんな時でもお腹がすく。そう思うと、アリアは可笑しくなった。「ちゃんと食べないと、また風邪がぶり返すぞ。よし、俺が何か作ってやる。こつ見えても自炊で慣れているから」

早速、十無は居間に繋がっているキッチンに立って、冷蔵庫の中を覗いた。

間もなく、とんとんとんと、包丁の心地よい音が聞こえてきた。

「簡単なものにしたから、もう少しでできるからな。しかし、ろくなもの置いていないな。外食ばかりじゃ、またすぐ風邪を引くぞ」
確か、冷蔵庫には即席のご飯が二パックと、キャベツに卵、パンとマーガリン、後は何かあっただろうか。

「さあ、どうぞ」

二、三十分もしないうちに、アリアの目の前に細切りキャベツ入りの熱々卵雑炊が置かれた。

「熱いから気をつける」

アリアはいただきますをして、ふうふうと雑炊を冷ましながらすプーンを口に運んだ。口中で卵がとろけて体が芯から温まった。

「美味しい、十無さんで何でもできるんですね」

「昇と二人暮らしだから、必然的にできるようになっただけさ」
照れながら謙遜している。

十無のことだから、やるとなると極めてしまうのだろうかと、アリアは台所で格闘している十無の姿を想像してクスツと笑った。

「坂本君の彼女はここで手料理を振舞うことはないのか？」

「ここに来ることはほとんどありませんから」

年上の派手系美女、Dのことは面倒で、あえて否定しなかった。

「さっきの、まさか彼女のはずないか。俺が来たからといって、窓から出て行く必要はないし」

「さっきも言いましたが、ここは二階ですよ？ 見間違いです」

顔色一つ変えずに、アリアはしらをきった。

「そうか。こつ、長い髪の毛……追っている泥棒で、Dという奴がいるんだが、似ていたような感じがして。でも、まさかな」

「それより、十無さん、美希さんがいるから、これからは料理をする機会が減りますね」

十無はまだDにこだわっているようだ。このままだとぼろが出そうなので、アリアは強引に話題を逸らした。

「それは……どうかな」

十無の顔が急に曇って意外な返事が返ってきた。それはどういう意味だろう。

アリアが口を開きかけた時、携帯電話が鳴った。

「僕の携帯だ。ちょっと、すみません」

そう言ってアリアは立ち上がり、電話に出ながら寝室へ移動してドアを閉めた。

「俺だ、どうなっている？ 全く連絡をよこさないで。心配するだろう？ 明日の夜は空けておけよ」

ヒロだ。いつも悪いタイミングで電話が来る。

「明日は遅くなると思う。十無に気づかれそうので、そろそろ潮時かも。だから、明日、実行することにした」

「じゃあ、これからそちらへ行く」

「今は、会わないほうがいい。十無がここに来ている」

「どうしてあいつが？」

「色々あって……とにかく、明日ことが済んだら行くから」

アリアはそれだけヒロに告げると、電話を切った。

明日の夜、音江榎からファイルをいただく。そうしたら、二十五日には坂本周は姿を消さなければならぬ。

Dがこんなにつろつろしてしまえば、そろそろ限界だろう。

アリアは軽く深呼吸して坂本周の顔になると、居間へ戻った。

「どうも、すみません」

「いいや、もうそろそろ帰る。押しかけてきて悪かった、ゆっくり休んでくれ」

玄関先まで送ると、十無はコートを着ながら何か言いたそうにアリアの方へ顔を何度か向けた。が、何も言わずに嫌な余韻を残して行ってしまった。

パターンとドアが閉まると、十無が今ここにいたことを誇示するように、入り込んできた冷たい風がアリアを包んだ。

もう会えなくなる。

そう思うと、アリアは考えるより先に外へ飛び出していた。

「十無さん、言いたいことがあるんでしょっ？」

アリアは十無を引き止めた。

いつの間にか吹雪は止んでクリームのような新雪が、吹きさらしの階段や手すりに積もっていた。

階段を下りかけていた十無は、その場でアリアの方を振り返った。

「いや、その……坂本君、変な頼みを聞いてくれるか」

「どういう？」

「悪いが、明日の夜、バーで待っていてくれないか」

「え？」

「いや、やっぱりいい。忘れてくれ。悪い、変なことを言って」

「……グランドホテルのバーで、いいですか？ バー・エジソンで、いつまでも待っています」

「そうか、ありがとう」

微かな笑みを浮かべてそうお礼を言ってから、十無は帰った。

数分外にいるだけで、顔がこわばるような寒さだった。

きりりと冷えた空気が、青白い雪の積もる闇夜を支配していた。

予報通り、朝から底冷えのクリスマス・イブだった。

吹雪の後の冷え込み。こんな日は、空気が澄んで雪が宝石のように輝いて綺麗だ。

だが、東昇はそんな景色には目もくれず、朝から仕事そっちのけで、車で忙しく飛び回っていた。

今夜までに、早くアリアを見つけなければ。兄貴は午後七時には佐藤美希に会う。そしてプロポーズをしよう。兄貴はアリアのことが好きなのに。

絶対だめだ。そんなこと許さない。兄貴は後悔するに決まっている。昨日から、昇は何度も十無の携帯電話を呼び出していたが、何を言われるのかわかっているのだろう、十無の携帯電話は電源を切っていて繋がらなかった。

昇はかなり気が急いでいた。このままでは、兄は過ちを犯してしまう。アリアを見つけて兄に会わせ、阻止しなければ。昇はその一心だった。

だが、この間、アリアの姿どころか形跡すら見つけれなかった。思いつくところは全て捜しつくし、あとは闇雲に、ひたすらアリアを探していた。

「くそ！」

アリアがいたことのあるマンション前で車を止めて、昇はとうとうかんしゃくを起こし、握り拳でハンドルを強く叩いた。

いつの間にか暗い空。車内のデジタル時計は午後六時と表示していた。

「一人じゃ限界だ。こんなときに風邪なんか引きやがって、役に立たない坂本周！ これじゃあ、だめだ。時間ばかりが無駄に過ぎる、落ち着け」

昇は目を瞑り、深呼吸をして自分に言い聞かせた。

と、携帯電話が鳴った。十無の着信だった。

「どこにいる？ 佐藤美希に会うのは止める！ 後悔するだけだ。早まるな」

十無が一言も言葉を発せないほど、昇は勢いよくまくし立てた。

「おい、昇、落ち着け。それに、これは俺の問題だ」

妙に落ち着き払った十無の声が、昇を苛つかせた。

「せめて、アリアに一度会ってから考える」

「その必要はない。アリアなら二日前に見かけた。女性に贈る高価なピアスを買っていた」

「どうしてそれを早く教えてくれなかったんだ！ でも、女性に？」

「旭川へ着いた夜、アリアが派手な女と、飲み屋街を寄り添って歩いて見たのを見た。多分、その女性に贈るためだろう」

派手な女？ 待てよ？

「兄貴、もしかして、その女はアリアより背が高く長い髪で年上風の派手系美女？」

「遠目で夜だったから、美女かどうかはわからないが、派手な女だったのは確かだ」

坂本周の部屋で見た派手な年上美女。まさか……。

昇はあるつながりを見つけ動悸がした。

「もうそろそろ、彼女と会う約束の時間だ。俺の気持ちは変わらない。それを伝えたかっただけだ。じゃ」

「兄貴！」

電話は一方的に切られた。

「あの美女は、アリアとも坂本周とも面識がある？ どうなっている！」

昇は両手で髪をかきむしった。思考は混乱していた。

坂本周はアリアが旭川へ来た頃と同じくして現れた。

坂本周の身元を証明できる人物はいない。まず、事務所だ。履歴を調べよう。いや、そんな時間はない。周のアパートへ行って、問い詰めた方が早い。

坂本周は、もしかして……いや、まさか。あんなに一緒にいたのに、どうして気がつかなかったのだ。

頭によぎる考えがまだ信じきれないまま、昇は坂本周のアパートへと、車を飛ばした。

東十無は、五分前にはホテルの最上階にあるフランス料理店へ到着したのだが、佐藤美希は既に席についていた。

「時間通りね」

「美希さんは、早かったね」

美希の笑顔に伝えるように、十無は笑顔を作った。

正直言うと十無にはまだ迷いがあった。こんな気持ちで美希さんにプロポーズをするのは失礼ではないのか。こんな煮え切らない気持ちで。

そんな気持ちを律するために、美希に会う直前、昇に電話を掛け、気持ちは変わらないなどと断言し、もう後戻りできないんだと自分を納得させる必要があったのだ。

十無がワインを選び、といっても全くわからず、ソムリエにワインを見繕ってもらったのだが……後は予め予約しておいたコース料理が順次運ばれて、ワインで乾杯した。

「イブに、よくこんな所を予約できたわね」

客は見るからに、カップルばかりだった。

「ちよつと、無理を言っ……」

以前、Dの事件で顔見知りになっていた支配人に、無理を言ったのだった。

公私混同することなど皆無なのだが、十無は他に何処も思いつかず、苦肉の策だった。

佐藤美希はドレスアップしていた。薄桃色のブラウスは、胸元が大きく開いてシフォンの重ね衿が柔らかい印象を与え、スリットが入った同系色のタイトスカートも、優しい女らしさが強調されていた。

胸には一粒、ダイヤが揺れている。

前回の爽やかな感じと違って美希は可憐な雰囲気が出た。

「なあに？」

「この前と違うなと……」

「やっぱり、変かしら？　こんなひらひらした服、普段着ないから」

「そんなことはない。ただ、ちょっと目のやり場に困る」

「東君って、もう、何処を見てるの」

「いや、いやらしい意味じゃなく、その、綺麗だから……」

十無は俯いて赤面する美希に、しどろもどろに弁解した。

「東君も、素敵よ」

美希は、はにかみながら微笑んだ。

二人は美味しい料理を口にしながら、美希が工作中的の珍事や失敗談を面白おかしく話し、十無が聞き役となった。

お互い多少緊張してぎこちなさはあるが、以前会った時よりも和やかに過ごし、うまくいっているではと十無は思った。

可愛い美希さん。彼女と結婚したら、きっと笑いの絶えない、明るい家庭になるのだろう。

だが、本当に彼女を愛せるのか。愛していく自信があるのか。美希さんを悲しませることがないのか。やはり……気持ちに嘘をつけない。これではいけない気がする。

いくら自分の気持ちを偽っても偽りきれず、頭をもたげてくるアリアへの思いが十無を苦しめた。

逃げていては解決しないのだ。

十無は背広のポケットにある、赤いリボンのついた小箱を握り締めた。それには、アリアに渡すはずだったネックレスが入っていた。言おう。言わなければ。

「美希さん、」

話そうとした時、食後の珈琲#26833が運ばれてきて、十無は出かかった言葉を飲み込んだ。

「このホテル、私、好きじゃないの」

今度こそはと、十無は意気込んでいたのだが、美希が先に口を開いた。彼女は夜景を眺めながら、少し眉をひそめている。

「えっ、ごめん。俺、ここしか分からなくて」

意外なことを言われて十無は慌てて謝った。

「ごめんなさい、言い方が悪かったわね。東君のせいではないわ」

美希は両肘を突き、珈琲#26833を一口、美味しそうにゆつくりと口に含んだ。

「正確には、ここ隣のバーが、なの」

それは、坂本周と待ち合わせているバーのことだ。たまたま、同じホテル内の店になってしまった。

「実はね、最近バーで周ちゃんと会って。でね、私、振られちゃったの」

美希は言いづらそうに、だが、はっきりと、十無の目を真っ直ぐに見つめて言った。

「ごめんなさい。私、東君とお見合いをしながら、周ちゃんを好きになってしまった。でも、失恋したの。後悔はしていないわ。で、東君に甘えてこのまま付き合おうかなんて思ったりもしたけれど、色々考えて、やっぱりこんな気持ちでは、東君とお付き合いを続けていく自信が、ないの」

何だ、そうだったのか。彼女もまた悩んでいたのか。

十無は重い荷物をようやく降ろすことができ、体が軽くなった気がしてほっとした。

「東君は私にとって青春の一部かな。アルバムに閉まって、久しぶりに懐かしがるような、そんな存在だったと気がついたの。私が好きだった東君は、学生時代の東君なのかもしれない。東君は私にとって、永遠に憧れの人。それは今も変わらない。こっちからお願いして、わざわざ旭川まで来てもらったのに。身勝手だけれど、本当にごめんなさい」

美希は封印していた思いのたけを、一気に開放したようだった。話し終えてから、美希は深々と頭を下げた。

彼女の表情はすっかりしたもどった。

「美希さん、俺のほうこそ煮え切らなかつた。悪いのは俺の方だ」
十無も頭を下げた。

「ふふ、お互いに謝りあうなんて、なんだか変ね」

美希はからからと楽しそうに笑い、つられて十無も顔を見合わせ
て口の端で笑った。

「でも、東君は私のキューツピットなのよ。東君がいなかったら、
私、周ちゃんに会えなかつたもの。振られたけれど、とっても感謝
している。だから、このお見合いは意味があつたの」

美希らしいポジティブな発想に、十無は微笑んだ。

「で、東君も心に思う人がいるのね？ どんな人？」

「……皮肉屋で、何を考えているのかつかみ所がなくて、何でもす
ぐはぐらかして生意気で、おまけに少し寂しがり屋で、どうしよ
うもない奴」

「それって、憎まれ口ばかりね」

「本当だ」

十無は口をついて出た言葉が、そんな言葉しかないのを指摘され
て苦笑した。

「あら？ 私、つい最近も同じようなことを言ったよつな気がする」
美希は首をひねった。

「ま、なにせよ、東君のほうはうまくいくようにって、私、祈っ
ているわ」

美希はそう言ってウインクすると、席を立って十無の方へ手を振
った。美希は足取りも軽く、先にレストランを出たのだった。

美希さんを傷つけずに済んだ。

十無は美希の後姿を見送りながら、ほっとしていた。

27・冷たいキス

まさか、同じホテルのレストランだったなんて。

十九時前に、東十無から、今、出かけるところだと電話があつてアリアは二人が行く店を知ったのだった。

レストランと隣り合っているバーではどうかと思い、アリアは待ち合わせ場所を変えようと十無に提案したのだが、別にかまわないと言われてしまった。

アリアは腕時計に目をやった。バーに来てから、何度覗きこんだことか。

何をしてても、落ち着かないのだ。

今まさに、直ぐ側で十無と美希がデートをしている。

十九時に約束していると言っていた。もうそろそろ二十一時になる。食事が終わって二人は飲みにも行くだろう。そんなことはわかっていたが、部屋に一人でいるのも辛く、アリアはこんなに早く来てしまった。

アリアはバーについてから、ずっとため息ばかりもらし、水割りを機械的に口に運んでいた。

飲みすぎていると自覚していたが、つい、減り方が早くなった。

でも、十無は何のために坂本周に会おうとしているのだろう。

カウンターの一番隅にある席でアリアが鬱々していると、「坂本君」と、背後から声をかけられた。

「十無さん？ 早すぎませんか？」

「いや、俺としては予想通りの時間だけれど」

穏やかな笑みを浮かべながら、なにやらすっきりした顔をして、十無は隣の椅子に座った。

うまくいったのだろうか。それとも……。

十無の表情が何を意味するのか、アリアは計り兼ね、動揺していた。

アリアは早くことの成り行きを聞きたかったが、せつつくわけにもいかず、十無が話してくれるのをじっと待った。

「……坂本君に振られたと、彼女が言っていたよ」

「すみません。十無さんに、どうしてもそのことを言い出せなくて」「いや、俺のことはいいんだが」

そんなことはいいいから、どうなったのか教えてほしい。

真っ先に知りたいことにはなかなか触れない十無に、アリアは苛々した。

そんなアリアの気持ちを知らない十無は、暢気に水割りを注文している。

「坂本君のグラスも空きそうだな。同じものでいいかな？」

「そんなことより、十無さん」

アリアは痺れを切らして十無をじっと見つめ、どうだったの？

と、目で訴えた。

十無はその視線に気づき「振られたよ」と、眉を寄せながら、そっけなく答えた。

「振られた？」

「俺は、そういう運命なんだ。女の子に縁がないのさ。美希さんはまだ坂本君が忘れられないようだ」

彼女から断るなんて、思いもよらなかった。

アリアは十無に何と声をかけていいのか言葉に詰まったが、内心、ほっとしていた。

これで、今まで通り。変わらない。

「……やっぱり、という感じた。なんとなくそんな予感はしていた。それで美希さんに会った後、一人でいるのが嫌で坂本君にこんなことを頼んだというわけだ。……学生時代に何度も振られていて、いつものことだと思ったが。やはり、いい気持ちはしないものだ」

そうか。坂本周に会って、やけ酒につきあってほしかったのか。

自分は何を期待していたんだろう。坂本周の身で、どうにかなるわけがない。冷静に考えればすぐわかるようなことなのに。

そんなことも分からなくなっていた自分のことが、滑稽に思えて、
アリアは苦笑した。

「今夜は残念会ですね」

アリアが乾杯と言ってグラスを合わせ、十無も苦笑した。

でも、十無が何度も振られたことがあるとは、知らなかった。

「十無さんはもてそうですけど。職場ではもてるでしょう?」

「だったら、こんなところまでお見合いには来ない。署内では、いつの間にか俺は女嫌いということになっている」

「どうして?」

「さあね。だから今回俺が見合いをするといったら、署内中に知れ渡ってしまった。帰ったら暫くは噂話の種にされる。やっぱり、あいつは女じゃだめだったんだ、とか」

意外だ。職場でそんな陰口を叩かれているなんて。十無はもしかして職場では目立つ存在なのか。それとも、口数が少ないから、誤解されてしまうのか。

「そんなことより、坂本君。やっぱり、美希さんはだめなのか?」

唐突に美希のことに話しを戻されて、アリアは曖昧な笑みを浮かべた。

「いい娘だけどなあ。こればかりはどうしようもないか」

「十無さんは、どうして今までそんなに振られたんですか?」

「その話しはやめよう、俺を慰める酒じゃないのか?」

十無が眉をひそめて嫌そうな顔をした。

アリアは十無が好きになった女性に興味がわいて、ついそんなことを訊いたのだった。

「くよくよしていても始まりません。今後に備えて振り返りましょう。そうしたら、きっと次はうまくいくはずですよ」

「そうかな……」

十無が来る前から短時間で次々と飲んでいたアリアは、自覚していなかったが酔っていた。そして、少し強引になっていた。

あまり乗り気ではない十無は、渋々話し始めた。

「大学では、よく合コンに誘われた。そんなに友達でもないのに、勝手に俺も参加することにされて。頭数を揃えるためにね。で、行ってみると、女の子達が結構話しかけてきて、初めのうちはいいが、いつも途中で一人になってしまふんだ。そして、あぶれた男同士で空しく、ただひたすら酒を飲む羽目になって帰ることになる。そんなことはしよつちゆうだった」

それって、いいように利用されていたのではないか。見た目良い十無を使って女の子を集め、途中で言われのない中傷でもしたのだろう。酷い友達だ。

でもそんなことを言ったら、十無は女性不信どころか人間不信になりそう、アリアは言うのをためらった。

「付き合ったことはあるんでしょう?」

「あるような、ないような」

十無は「うーん」と唸って、首を傾げている。そして、思い出すように話しを続けた。

「物静かで、落ち着いていて、ちょっとした仕草が可愛いな、と思っていた娘から告白されて、付き合ったこともあった。でも、『十無君のイメージが壊れる!』と何度か言われて、結局、別れた」

「何か、したんですか?」

「別に。俺の部屋に来たとき、炒飯作って出したり、外食でラーメン食べようって誘った時にそう言われたんだけど、何が悪かったのか俺にはさっぱりわからない。付き合うたびにそうだった」

アリアはなんとなくわかった。十無は外見がお坊ちゃん風だ。澄ましていて、自炊なんかしそうに見えないし、外食は洒落たレストランにでも行きそう。ハイソな生活をしているように見えてしまふのだ。でも、そんなことを言う女の子って……。よくよく十無は女運がないのか。

アリアは少しばかり同情した。

「……やっぱり俺が悪いのか?」

「十無さんは、悪くない。女の子達が見る目がないだけです」

「そうかな。その学生時代があるから、俺はすっかり女性に臆病になっただけだ」

「大丈夫、自信を持ってください。周りの友達も、きっと十無さんのことを妬んでいたんです」

「妬まれるようなものは何もないんだけど」

十無は肩を竦めた。

「十無さんは気弱にならないで、もっと強引になったほうがいい。はいそうですかって諦めてはいけません。そんなことをしていたら、好きな人を誰かに持っていていかれてしまいます」

「強気に、ね。覚えておくよ」

十無はずっと苦笑している。アリアは顔が赤くなっており、見るからに酔っていた。

「坂本君の方は？ その後、告白したのか？ 無理だとか言っていたらどう？」

「……僕のことはいいですから」

「俺ばかり話してもつまらない」

「よしましよう、救われない話ですから」

「そこまで決め付けなくても……」

「やめましよう」

アリアは自嘲するような笑みを浮かべて、静かに、だが有無を言わさない強い口調で十無の言葉を遮った。

「そうだ。これ、おせっかいかもしれないけれど、君が思っている彼女へあげてくれないか。俺はとうとう渡せなかった。彼女の好みに合うか分からないが」

十無は頑なな態度のアリアを気遣いながら、躊躇いがちに背広のポケットから赤いリボンのついた小箱を取り出した。

カウンターに置かれた小箱は、十無がポケットに入れてぞんざいに扱っていたため、赤いリボンがひしゃげていた。

「銀のネックレスで、先に丸い玉がついたシンプルなものだ」

「僕は……」

「俺が持つていても、若い女の知り合いはいないし、適当に誰かにあげても構わないから」

アリアの困惑した表情に、十無は慌ててそう訂正した。

アリアは少しの間、小箱を見つめた。

十無が佐藤美希にと思って購入したネックレス。そんな物を私の手元には置きたくない。

だが、あまり頑固に断るのも変だと思い、わかりましたと言って仕方なく受け取った。

アリアの口数が減って会話が途切れた。

黙ってしまったのは十無が心配する。アリアはそう思ったが、もう何を話したらよいのか、アリアはわからなくなっていた。

「そろそろ、帰りましょうか」

「そうだな……坂本君、今夜はありがとう」

二人はバーを出た。

エレベーターに乗ってから、ふと十無の横顔をアリアは盗み見た。十無も水割りを切らさず頼んで飲んでいたはずだが、顔色一つ変わらず、全く酔っていないように見えた。

今回はまとまらなかった縁談。でも、この先、また同じことが起こる。いずれ十無は誰かを好きになり一緒になる。そして、十無の優しい瞳は、一人の女性に向けられるのだ。そんな日が来る。

……い、や、だ。

アリアの胸の中で、何かが動いた。

二人はロビーについてホテルの正面出口へと向かうが、アリアの足取りはのろのろと重たかった。

「坂本君、大丈夫か？ 飲みすぎたのか？ ホテル前にタクシーがあるから、先に乗ったらいい」

少し後ろを歩いていたアリアを気遣うように、十無は振り返って優しく声をかけた。

温かい、十無の声。

十無の気遣いに、アリアは弱々しい笑顔を作って応えた。

そして、このまま十無と別れたくないという感情が、アリアを突き動かした。

「……あの、少し歩きませんか」

「俺はいいけれど、歩けるのか？」

「僕は大丈夫です。冷たい風に当たって頭を冷やしたいから」

二人はホテルを出て、旭川駅の方へ向かって歩いた。

イブとあって、タクシーが多く行き交っていた。歓楽街から多少離れてはいるが、カップルなどが寄り添って歩く姿が目についた。

緑橋通りと称されているその通りには、中央分離帯にななかまどの街路樹が続く。

この時期、街路樹はイルミネ ションで飾られ、所々にななかまどの実に見立てた赤い明かりが白い雪の中に灯っている。その光の帯は、駅まで真っ直ぐに続き、暖かい輝きを放っていた。

木々の間には、歩道のロードヒーティングの為にボイラーが所々にあり、細い煙突から白い煙を吐き出している。風もなく冷え込んできた空中に、ゆっくりと立ち上る煙。

そんな景色の中、二人は黙って並んで歩いた。アリアはトレンチコート、十無も厚手のロングコートを着込み、マフラーまでしていたが、歩き始めると耳がかじかんで痛みを覚えるほどだった。

「……酷く寒いな」

十無が口を開いた。

十無は何か話したそうにしている。アリアはなんとなくそう感じた。でも、今声をかけられたら、余計なことまで話してしまいそうで、つつけんどんに、そうですねと答えた。

「坂本君、何か悩んでいるんじゃないのか？」

「……」

今、この時を十無の側で過ごしたいだけ。望みはそれだけだ。それだけで充分だ。それ以上何が望めるというのか。

「坂本君は人に干渉されるのが苦手なのか。でも、人に聞いてもらうだけで楽になることだってある。ま、恋の悩みは俺に話してもだ

めか。……俺には、君が落ち込んでいるように見えるのだが」

「いいえ、そんなことはありません」

お願いだから、そっとしておいてほしい。

アリアは十無の視線を感じながら、俯いて歩いた。

「バーでも聞いたのにしつこいようだが、何故だか君をこのまま放つておけない気がする。年上の彼女のことだろう？ そんなに辛い恋ならば一人で抱えない方がいい」

「……違います」

平静に答えたつもりだったが、アリアの声は震えていた。

瞬きをすると、涙が落ちそうでもアリアは顔を上げられなかった。

これ以上、話しかけないで。

「どうした、寒いのか？ これで少しは暖かいぞ」

立ち止まったアリアに、十無は優しく声をかけて自分のマフラーをアリアの首に巻いた。

やめて。優しくしないで。

アリアはとうとう、涙が溢れてしまった。

アリアはゆっくりと顔を上げたが、涙でぼやけて十無の顔がよく見えなかった。

「坂本君？ 泣いて、いるのか？」

動揺している十無の声。

「……あなたが、あなたのことが……好きです」

「えっ」

十無は言葉につまり、混乱し、ただ、呆然としているようだった。

「本気です……初めて会った時から、ずっと」

涙を湛えた瞳のまま、アリアは十無に向かって微笑んだ。

「坂本君？」

アリアはマフラーをはずして、驚いている十無の首にそっとかけて返し、そのマフラーを両手で引っ張り、爪先立ちで不意に十無と唇を重ねた。

一瞬の出来事だった。

おずおずと、躊躇いがちなキス。触れるか触れないかのキス。冷たく柔らかな感触が、寒さで感覚が鈍くなった唇に、微かに触った。

衝動的にキスをしてから、アリアは十無の顔を見るのが怖くなり、くるりと背を向けて、すぐ側のタクシーに乗り込んだ。

告白してしまった。馬鹿なことを！

アリアは後悔した。十無は坂本周としてみている。アリアとしてはなく。

だが、仮にアリアの姿で告白しても同じだろう。それどころか、犯罪者という足枷もついて回る。

きつと、今よりもっと望みはない。そう考えると、体の寒さより心の中が冷え切っていくように思えた。心が凍てつく。救いようのない恋だ。

車窓から流れる街の明かりを目で追っていると、氷点下十五度と表示された電光板が、目に入った。木々も空気さえも凍る気温。

十無と並んで歩いていた時、その寒さも感じないほどにアリアの心は凍えていた。

望みなんてない。でもやっぱり好きに違いない。……だが、何も期待してはいけない。

その言葉だけが、アリアの心の中でリフレインしていた。

東十無は坂本周がタクシーで立ち去った後も、やや暫くその場に立ち尽くしていた。

今、何があったのだ。坂本君が……なんて言った？

混乱する頭の中で、十無は必死に理解しようともがいていた。

だが、十無の思考では到底理解しきれるものではなかった。

彼の涙が意味するものはなにか。

好きです。

好き、とは。唇にかすめた、あの冷たい感触は……キス、されたのか。

「俺、男にキスされたのか？」

十無は思わず声を上げた。その時になって初めて、行き交う人の視線に気がついた。

側を通り過ぎようとした若い女性が、えーっ、男同士？ 等と話している声が耳に入り、十無は今頃になって赤面し、急いでその場を離れたくて、タクシーに乗った。

「お客さん、男にもてるのかい？ 男前だもんねえ」

丁度見ていたのか、タクシーの運転手にも冷やかされ、十無はホテルに着くまでの間、居心地の悪い思いをしたのだった。

だが、数回しか会っていない坂本君のことが、どうしてあんなに気にかかったのだろうか。

混乱している頭の隅で、十無はそんな疑問が頭をよぎった。

マフラーをあんな風に……いつだったか、同じようなことをしたような。

記憶の糸をたどってみたが、十無は思い出すことができなかった。男に告白されてキスされたという衝撃が、強烈にインプットされた今の十無には、冷静に真実を見抜くことなど、できるはずもなかった。

28・凍てつく心

その足で、アリアは音江榎のアパートへ向かっていた。

『仕事』は今夜、やるしかない。

アリアは最悪の精神状態だったが、このまま消えるわけにも行かなかった。それに、坂本周として探偵事務所に潜入した目的を果たさなければ、ヒロに何かあったのではと勘ぐられてしまうだろう。

アリアは音江榎のアパートより五軒ほど手前の路上で、タクシーを降りた。

酔いはすっかり醒めていた。泣いた分、気持ちもいくらかすっきりした。

だが、先ほどの行動を冷静に思い起こすと、恥ずかしさで消えてしまいたくなった。

馬鹿な自分。十無は目を丸くしていたに違いない。

アリアは道路わきの雪を一掴みして、火照った額に押し当てた。

もう考えない、頭を切り替えよう。今は坂本周なのだ。音江榎からファイルを頂戴しに来た泥棒なのだ。

「冷てー！」

解けた雪が頬を伝って流れていき、手で拭った。ひりひりする冷たさが、次第に頭の芯を引き締めていくように感じられた。

アリアは全ての神経を『仕事』に集中させた。

音江榎は今夜、クリスマスということ、父親と事務所の皆で繁華街に繰り出していた。現在午前一時過ぎ、この時間には部屋へ帰って榎は寝入っているはずだった。

榎は職場の仲間と一緒に飲みに行っても、父親にはほぼ強制的に十二時には帰されるということ、アリアは事前に確認してあるのだ。

榎が熟睡するには、若干時間が早い、ぐずぐずしてはいられない。

アリアは玄関前に来ると、ドアをピッキングでこともなげに開けて、音もなく部屋へ滑り込んだ。

そして、暗闇の中、自分の部屋を歩くように、一つも迷いなく奥へ進み、寝室の前で立ち止まった。ここまでをアリアは三分足らずでやってのけた。

簡単に終わる。後はベッドサイドテーブルに置いてある、ネックレスを頂くだけだ。

用心深く寝室のドアを開けた。が、サイドテーブルにネックレスはなかった。それどころか、寝ているはずの槿の姿もないのだ。

玄関には槿の靴があった。ということは、違う部屋で寝ているのか。アリアは予想外のことに多少動揺したものの、気を取り直して居間へ行ってみた。

こたつにはいったまま、大の字になって気持ち良さそうに寝息を立てている槿がいた。

アリアはほっとして、心の中で驚かせるなと文句を言った。が、次には唸ってしまった。槿は服のまま寝ていたのだ。多分、帰宅して直ぐに寝てしまったのだろう。

ペンダントは槿の胸の上だった。どうしたものか。

アリアはすやすやと眠る槿の寝顔を、恨めしそうに見入った。胸元のネックレスに手を掛けようとしたが、眠りが浅いのか寝返りをして横向きになってしまった。ペンダントを引きちぎれば、起きてしまっただろう。

悩んだ末に、アリアはその場に屈んで、槿の肩をとんとんと軽く叩いた。

「槿さん、槿さん、起きてください」

「う……ん。周君？」

たいした驚きもせず、槿は目をこすりながらゆっくりと起き上がった。槿はまだ酔いが抜け切らないようで、ほわんとした顔をしている。

「すいません。鍵がかかっていなかったなので、勝手に上がってしまいました」

アリアは俯き加減で、すまなさそうにそう言い訳をしたが、槿はというと、そうだったかしらと首を傾げただけで、ドアの鍵のことは何も不信に思わなかった。

「どうしたの？ こんな時間に」

「……………どうしても、会いたくて」

アリアは努めて寂しそうな表情を作り、絞り出すような声で切なそうに呟いた。そして、槿をじっと見つめた。

「周君？」

そう言った瞬間、アリアは槿を抱き締めた。

「……………槿さんに愛される男は、幸せだろうな」

アリアはかすれ声でそう囁き、槿の長い髪を耳元から撫ぜ上げた。槿は体を固くしたが抵抗はされず、彼女の鼓動が速くなっているのが、密着した体から伝わってきた。

「周君？ いつもと雰囲気が違う。何か、あったの？」

「……………槿さん。僕、あなたのことが……………頭から離れない」

アリアは槿を抱きしめて、髪を撫せていた手を首筋へ這わせた。

「周、君……………」

「槿……………」

名前を甘く囁きながら首筋を撫ぜる。槿の気が動転している隙に、アリアは器用にペンダントを取り外して、ジャケットのポケットへ滑り込ませるのに成功した。

続いて、アリアは槿の顎を引いて押し倒しそうな勢いで、キスを迫った。

ここで槿に嫌と言われて突き飛ばされ、アリアは泣く泣く引き上げるといふ筋立てのはずだった。

少なくとも、アリアは拒否されるものと予想して、強引な行動に出たのだ。が、予想に反して槿は抵抗するどころか、目を瞑ってキスを待っていた。

どうしよう。收拾がつかなくなってしまう。

……………ええい、仕方がない！

アリアは半ばやけくそ気味になって槇にキスをした。そして、槇から体を離れた。

「ごめんなさい、遅い時間に来て。不謹慎だった。あなたのお父さんに申し訳ない。今夜はこれで帰ります」

「周君？」

ぼかんとしている槇を残して、長居は無用とばかりに、アリアは逃げるように部屋を出た。

成功はしたのだが。

好きな男に振られた直後、冷静に泥棒家業に精を出せる自分の神経が嫌だった。

そう思いながらも、アリアは次の行動を考えていた。

今までいたアパートは既に引き払ってある。坂本周の痕跡は跡形もなく消し去ってあり、もう何処にも存在はないのだった。後は姿を消すだけで終わるのだ。

そして、アリアに戻って、ヒロの待つアパートへ約束通りに行くだけだ。

それで何もかもがいつも通り元に収まるはずだった。

だが、ヒロのアパートへ顔を出す気にはとてもなれなかった。会って優しくされたら、きっとヒロに甘えてしまう。泣いてしまつかも知れない。

それでもヒロは何も聞かずに、黙って受け止めてくれるだろう。

だが、ヒロに頼ってばかりではいけないとアリアは思っていた。

こんな夜は一人で過ごしたくなかったが、タクシーをつかまえて、アリアは予約してあるホテルへと向かった。

アリアが思わず十無に告白してしまった時刻に、ヒロはアパートでアリアが来るのを、ひたすら待っていた。だが、今夜は来ないだろうということも、ヒロは内心確信していた。

パイプベッドの傍らにある硝子の灰皿には、吸いかけては揉み消した煙草の山ができていた。

ベッドに寝そべっているヒロは、マッチで次の煙草に火をつけた。足元の床には、ケースに入ったダイヤのタイピンと、それを包んでいた緑色の包装紙とカードが、無造作に放り出したままになっていた。

「もう俺を必要としないのか。そういうことか？　アリア」

煙草の灰を灰皿に落とし、額に左手をあてて目を瞑り、ヒロはベッドに仰向けになった。

ヒロが晚餐のための買い物へ出掛けて帰宅すると、部屋のテーブルに小さなプレゼントが二個、並んで置いてあった。一つは緑色の包みで、もう一方は赤色の包装紙だった。同じ大きさだが、緑の方にはカードが添えてあった。

「ヒロへ、メリークリスマス。愛を込めて。アリアより。P・S・今夜はごめんなさい。それと、お願いです。Dと仲直りしてください。私が余計なことをしたのが悪かったです。ヒロからDへ、渡してください」

その文面は、ヒロをがっかりさせるのに充分だった。

カードを見るなり、ヒロは買い込んだ物をテーブルに放り投げ、ベッドに寝転がり、ふて寝していたのだった。

「……これは、何のつもりだ」

ヒロは片肘をついて上体を起こして横を向くと、くわえ煙草でベッドに転がっている赤色の小箱を弄んだ。

「何よ、しけた顔をして。寂しいイブね」

開け放していた部屋のドアに、Dが腕組をして寄りかかり、音もなく立っていた。

「ノックくらい、してくれ」

ヒロはDを一瞥したが、驚きもせず、迷惑そうにあしらった。

勿論、ヒロは玄関に鍵をかけていた。

そんなことをしてもDには無意味だと、ヒロはよくわかっていたし、今までもこんなことは日常茶飯事だったので、ヒロは特に動じなかった。

だが、ヒロはすこぶる機嫌が悪かった。俺に干渉するなという、オーラが強烈に感じ取れるほどに。

その原因は、言うまでもなくアリアが置いていったカードだ。

Dは床に放つてあるカードを拾い上げて目を通し、ため息をついた。「本当はアリアちゃんと過ごす予定だったのね。私はちよつと寄つてみただけだから。……私じゃ役不足ね、帰るわ」

Dが片手をひらひらと振つたのを、視界の隅に認めたヒロは、煙草を灰皿にもみ消してベッドからゆらりと立ち上がった。

「このまま、俺を一人にする気か」

背中を向けて部屋を出て行くところDを、ヒロは抱きすくめた。「なによ、アリアちゃんに会えなくて、残念そうにしているヒロの顔を見た私は、可哀想じゃないの?」

Dは少し棘のある言い方をした。「そうしないと、またヒロを甘やかして受け入れてしまいそうだとでもいうように。」

ヒロにはそれが拗ねているように映り、Dがいとおしく感じた。

「ごめん、頼むからここにいてくれ」

「それは、何に対して謝つたの?」

Dの投げかけた言葉はヒロの耳に入らず、もう話しは聞きたくないとでも言うように、強引にDの唇を塞いだ。

誰かに触れていたい、肌を寄せ合っていたい。

本能の赴くまま、何もかも忘れたくて求めるキスだった。

Dの息が詰まるほど、ヒロはきつく抱き締めて激しく口付けを交わした。

欲望を満たそうとする獣のように、激しく。

Dの吐息が漏れる。

「ヒロ、ずるいわ」

「そうだ、俺は酷い奴だ」

ヒロは苦しそうにDの耳元で囁きながら、再び唇を合わせた。

Dは抗えずに、ヒロの我が儘を許し、受け入れ、身を重ねた。

何の解決にもならない逃げだどヒロにはわかっていたが、一人で見られるほどの精神的余裕はなかった。

窓には霜が花開き始め、アパート横を流れる忠別川は川霧を作り出し、氷点下十五度のしばれの厳しさに、街は凍えていた。

それはまるで、情熱的な抱擁とは裏腹の、ヒロの凍てつく心を映した心象風景のようだった。

その夜、Dはヒロと共に一夜を過ごした。

そして、夜が明けきらないうちに、Dはいたたまれなくなって部屋を飛び出した。

Dは橋の上から川面を眺めながら歩いた。

川霧が橋の上まで立ち込めて体は芯からひりひりと冷えた。

両手を上質のカシミアコトのポケットに入れ、肩をすくめて歩いた。車も全く通らず、辺りは静まり返っていた。

とうとう、都合の良い女になってしまった。

Dは改めてそう思い、大息をついた。

でも、全く必要とされないよりはまだいいのだろうか。

そう、自分を慰めた。

「ふふふ」

妙に笑いが込み上げてくる。声を立てて思いっきり笑いたいくらいに。

なんて莫迦なのだろう。こんなことわかりきっていたこなのに。

それでもヒロを捨てきれないのであれば、都合の良い女に徹するしかない。

「……どうして、ヒロなのかしらね」

Dはそう呟いてから、急に自分の感情に押しつぶされそうになった。歩くのが辛くて橋の中程で足を止めた。

俯いたと同時に、ぱたりと涙が落ちて雪に吸い込まれて消えていった。

泣いている。

自分でも意外だった。Dは泣けると思っていなかった。そんな感情はとうの昔になくなったものだと思っていた。

「ヒロの、おかげかしら？」

Dは涙を流しながら、極上の笑みを浮かべた。

翌朝、まだ日が昇りきらない七時頃、音江榎はこたつでの心地良い眠りを、ドアを叩く音とチャイムに妨害された。

「榎、起きろ！ 寝ている場合じゃない！」

「なによ。昇なの？ こんな時間に来ないでよ」

文句を言いながらも、のろのろとこたつから這い出した榎は、取り敢えず昨夜から着たきりの服装を、ドレッサーの前でちらりとチェックしてからドアを開けに玄関へ出た。

「昇、昨日は飲み会に来なかったじゃない、待っていたのよ。で、こんな朝早くに、何事なの？」

ずっと待っていたのに。イブに何処で誰と会っていたのか。まさかアリアといたのだろうか。

榎は寒さに首を縮めて不機嫌丸出しで、玄関に突っ立っている昇を、そんな含みを持って睨みつけた。

「まず、部屋に入れてくれ。寒くて話しどころじゃない」

榎は迷惑そうな顔を試みたが、そんなことにはお構いなしに、昇は勝手に部屋へ上がりこんだ。

「ふう、寒かった」

昇はこたつで温まると、人心地ついたのか、再び慌てた口調で話し始めた。

「あいつ、周は多分アリアだ。どうりでいくらアリアを探しても見つからないわけだ。直ぐ側で変装していたとは。何か狙われるような物の心当たりはないか？」

「……嘘、でしょ？」

すっと崩れるように座った榎は、その言葉しか口にできなかった。

そんなことがあるはずない。あつてはいけない。周君のことを好きになりかけていたのに。アリア、ということは坂本周が女だということになる。あんなに魅力的なのは詐欺だ。どうして気がつかなかったのか。一瞬でも魅かれたなんて。昇が時々、ふらつといなくなっていたのはずっとアリアを探し回っていたからだっただ。やっぱりいつもアリアのことが頭から離れないのか。……だけど、アリアが私に近づいたのは何故か。何か意味が……。

頭の中で様々な考えが巡ってから、榎はたと一つのことに思い当たった。榎は恐る恐る、胸元にあるはずのペンダントを探ったのだった。

「ない！」

「おい、どうした？」

赤くなったり青くなったりしている榎の顔を、心配そうに昇が覗き込んだ。

「ファイルが……なくなっているの」

「ファイル？ 何の」

「どうしてもっと早く教えてくれないのよ！ 遅いわよ。何もかも盗まれちゃったのよ、全部！」

事情を知らない昇に向かって、榎はつい責めるような口調になった。

当然の反応として、昇はわけがわからずにきよとんとしていた。

ここまで言ってしまったのは、榎は事情を話さないわけにはいかなかった。本当はアリアに惹かれて昇に、これ以上かかわってほしくなかったのだが。

榎は美原ななからの依頼を受けていたことを、澁々話した。

「……アリアは、ファイルがほしくて事務所へ潜り込んでいたということか。『坂本周』は、昨夜から連絡が取れない。アパートはもぬけの殻だ」

「……」

単独行動を非難する昇の視線が痛かった。榎は俯いて沈黙した。

「俺に隠すからそうなるんだ。何かこそそやってるのは気づいていたが、まだ美原ななが依頼していた調査が継続されていたとは」
「……」

昇の前で、榎は益々萎縮した。いつの間にか正座して、膝の上で両手をきつく握り締めていた。浅はかな女の嫉妬。仕事に私情を挟んでしまったことへの後悔が自分を攻め立てた。

馬鹿だ。自分のことが嫌になる。こんな結末が悔しい。

榎は目頭が熱くなり、膝の上にポツリと涙が落ちた。

「おい、別に泣かなくなつて……俺、そんなにきつく言ったか？」
仕事でトラブルが起きても、副所長として榎はいつも冷静にてきぱきと対処していた。そんな姿を見慣れている昇は、慌てふためいた。

違う、そうではない。打算的な自分が嫌なのだ。昇が振り向いてくれないから、寂しくて、周に気持ちが悪く傾いた自分が、恥ずかしくて悔しいのだ。

榎は心の中でそう叫んでいたが、言葉になるはずもなく、次から次へと涙が溢れた。

昇の前で、榎は一人の恋する女以外の何者でもなかった。

昨夜、坂本周と別れてからずっと、東十無の頭の中はある考えで占められていた。

そして今日、東京へ帰る前にそれをはつきりさせたかった。

坂本周とは何者なのか。何故、自分はおも易々と気を許して弱みを見せ、イブの夜に会ってくれなどと頼んでしまったのか。ほんの数回会っただけの奴なのに。

まさか坂本君は……いや、まさか。

薄っすらとした疑問が、少しずつ浮かび上がった。

そして、極めつけは週の告白。

しかし、十無は答えが出せず、理解に苦しんだ。おかげで夜は頭がもやもやしてほとんど眠れなかった。

とにかく夜が明けたら、もう一度坂本君に会ってみよう、十無はそう思っていた。

そして、早朝。坂本周の住所を確認するため、昇に電話をしたのだった。

「今頃、なに寝ぼけたことを。兄貴、ずっと携帯電話の電源を切っていただろう。何度も掛けたのに。……あいつは、もういない」

十無は益々わからなくなった。

まさか、自分に振られてしまったと思い、坂本周は昨日のうちに引っ越したのだろうか。それにしても、手際がよすぎる。昨日別れたのは夜中だ。今はまだ午前八時。そう考えるには無理がある。予め引越しを手配していたと考えるほうが自然だ。

やはり……まさか。アリアなのか。

自分の都合が良い、希望的観測。十無はそんな考えが頭をもたげた。

「昇、何か知っているのか？」

「……周と、何かあったのか」

昇に逆に訊き返された。

お互い、探り合うような暫しの沈黙。

「……坂本君に、告白された」

非常に言いづらかったが、かなりの間をあけてから、十無は観念してぼそりと呟いた。

「はあ？」

案の定、素っ頓狂な疑問符が返ってきた。

「俺の勘でしかないが、坂本君といた年上の彼女は、Dかもしれない。そして、アリアといた女も、同一人物、多分Dだろう。そして、坂本君はもしかして……」

「男に告白されたのか。兄貴って女にもてないけれど、男には持てるタイプかもな。その調子で、アリアにも告白してみたらどうだろう。うまくいくかもしれないぞ」

「何を莫迦なことを」

昇の冷やかしのようなその一言で、坂本周はひよつとしてアリアではないかという、十無の微かな考えは、綺麗さっぱり吹っ飛んでしまった。

そうであればいいと強く願うあまり、無茶なこじつけをしてしまったのか。それにアリアだとしたら、昇が何も気づかないはずがない。きつと勘違いだろう。第一、何の目的があって坂本周という男に扮してわざわざ危険を冒してまで、知り合いのいる探偵事務所に潜入し、おまけに自分に告白するのか。

「……周は、もともとそう長くいる予定の奴じゃなかったから。転々とあちこち渡り歩いているようだし。事務所も急にやめていった」
「そうか……」

昇のその説明で、十無は納得してしまった。

十無は力なく電話を切った。

波乱に満ちた旭川での一週間の見合い休暇は、こうして幕を閉じたのだった。

『もしかして……』

十無が言いかけたその時、昇は咄嗟に遮ってはぐらかしたのだった。その先、何を言おうとしたのかは容易に想像がついてしまったから。『もしかして、アリアかもしれない』

十無の言葉はそう続いたはずだ。

昇はそれを聞きたくなくなった。

昇は兄からの電話を切った後も、強烈な衝撃から直ぐに抜け出せなかった。

泣き出した槿を、わけもわからないままなだめすかして、やっと涙が止まったところに、兄からの電話がかかってきたのだ。

槿がまだ赤く充血している瞳をこちらに向けて、十無がどうかしたのかと鼻声で訊いてきても、昇は気が動転して答えられなかった。

今の兄貴の電話、坂本周に告白されたと言っていた。それは、アリアが兄貴に告白したということだ。ひよっとして、二人は相思相愛だったのか。兄貴に散々振り回されて……自分ほとんど道化だ。少し悩めばいい。兄貴には坂本周がアリアかもしれないなんて絶対に教えてやるものか。

昇は少しの罪悪感がないわけではなかったが、到底、教える気にはなれなかった。

ここでもささやかな嫉妬が蕾をつけ、話を複雑に歪曲させていた。

日常は淡々と過ぎ始めていた。

雪のない東京へ戻ったアリアは、現に戻った気分だった。雪の中で起きた出来事は、別世界で起きた別の次元の出来事に思えてならなかった。

「何か、あったでしょ？」

二十五日、朝一番の飛行機で東京へ到着し、雑司が谷のマンションへ帰るなり、柚子にそう問われても、アリアは口の端を上げて苦笑するだけで、何も言わなかった。

言えなかったのだ。また、柚子を心配させる。

それ以上、柚子も訊こうとはせず、ただにっこりと優しく微笑んで

紅茶をとぼとぼと淹れてくれた。それはまるで、『話したくなつたら、いつでもいいのよ。何でも訊いてあげる』とでも言っているようだった。

その微笑だけでアリアは支えられ、元気を取り戻せた。心の拠り所、アリアの心の要。そんな存在になっっている柚子。

柚子の包み込むような微笑みで、まる一日、部屋でゆっくり休みを取ってアリアは元気を充填した。翌日、この後始末をするために、アリアは意を決してヒロに会うことにしたのだった。

ヒロに言わなければ。自分の気持ちを。そして、イブに行かなかつたことを謝らなければならぬ。イブに何があつたかも、話さなければ。このままではいけないのだ。

ヒロ好みの長い髪の女性に扮したアリアは、歳末商戦真っ盛りで賑わう、JR池袋駅近くにある喫茶店で、ヒロと落ち合った。

「ごめんなさい！」
ヒロと向かい合わせに座ったアリアは、緊張した面持ちで深々と頭を下げた。

「許さない」

ヒロは短い言葉を、かみ締めるようにゆっくりと低い声で発した。そして、椅子に寄りかかって煙草をゆったりとくゆらせながら、ヒロは目を細めてアリアを値踏みするように眺めた。

ヒロの視線が痛い。

テーブルの灰皿には、吸殻が数本捨てられている。約束した時間よりも、ヒロはかなり早くに来ていたようだ。

許さないと言われても……。

勇んでヒロに会ってみたものの、ヒロの前では思っていることの半分も口にできなかった。謝るのが精一杯だ。許さないなどと断言されてしまうと、体が硬直してどうすることもできなくなった。

アリアは顔も上げられず、肩に力の入った姿勢でいると、ヒロがここへ来いと言うように、右手で自分の隣を指差した。

仕方なく、アリアはヒロの隣へ移動して座った。

「プレゼント、ありがとう。Dにもお前が用意しておいたダイヤのピアスを渡した。それで、お前の気が済んだのか」

ヒロは正面を向いて煙草の煙をフウツと、ため息と共に吐き出した。

ヒロの声は穏やかだったが、言葉の一つ一つが重く、アリアの心のしかかった。

落ち着いた響きのヒロの声は、寂しそうにも感じた。いっそ、冷たく罵られた方がいくらか気が楽だった。

強気ではないヒロだと拍子抜けしてしまい、アリアはどうしたら良いのかわからなくなった。

「俺からのプレゼント、渡しそびれたな。ちょっと駐車場まで付き合ってくれ」

アリアはこくと頷いて、ヒロに言われるまま、駅前の地下駐車場へと連れられて行った。

途中、ヒロにしっかりと肩を抱かれて黙って並んで歩いた。コートの上からヒロの手の温もりがアリアの肩に伝わってきた。

安心感のある力強い手。

ずっとこの手に支えられてきた。ヒロがいなかったら、今、こうしてここにすることはなかっただろう。もしかしたら、憎しみのあまり、人を殺めていたかもしれない。

人ごみを歩きながら、ななと二人暮らしをしていた数年間の、過去の様々な辛かった出来事までもがアリアの頭に浮かんだ。

だめだ。ヒロに言えない。あんな寂しそうな声を聞いたら、絶対に言えない。

色々悩んだ挙句、アリアは今の状態を変えることはできないという結論になった。

街の景色はアリアの瞳に写っているはずだが、考え疲れて何処を歩いているのか脳で認識できない、そんな状態になっていた。

ヒロに支えられてようやく歩いていた。

ななとの酷い生活から救い出してもらったその瞬間から、アリアに

とってヒロは絶対の存在となった。

ヒロはアリアの生活の全てだった。全てがヒロを中心に回り、ヒロの言葉は何よりも優先された。実際、そうしてアリアは犯罪に手を染めることになったのだ。

ヒロの言動に左右され、ヒロの顔色を伺い、アリアは一喜一憂した。今日も無意識のうちにヒロの機嫌を取るような、ヒロ好みの女性の姿で来てしまった。

ヒロはアリアにとって家族……親であり、兄であり、多分、恋人のような存在でもあった。そして、泥棒の師でもある。

粹にはめてひとくりにできない存在。大袈裟に言うなら、神に等しい存在。多少反発ができるようになり、袖子という存在がアリアの支えとなりつつある今も、本能に近い部分でそれは根付いていた。変えられない根幹の部分だった。

そんなヒロを悲しませるといふ大それたことは、アリアには出来なかった。

ヒロの足が止まり、アリアが気がつくのと地下駐車場内にいて、ヒロの車が目の前にあった。

「乗るの？」

アリアはヒロの顔を恐る恐る見上げて、会ってから初めて、まともに見つめた。

硬い表情。寂しそうに瞳を曇らせて、無言で助手席のドアを開けるヒロ。後ろに緩く束ねられたヒロの長い癖毛が、心持ち乱れてやつれているように見えた。

アリアの胸が締め付けられるようにきゅっと痛んだ。

ヒロをそんな表情にさせてしまった罪悪感が、胸いっぱい広がるヒロ、ごめんなさい。自分が悪かったのだ。もう側を離れないからお願いだからそんな顔をしないで。

アリアの視線に気づいたヒロは、助手席に置いてあった真紅の薔薇の花束を取り出しながら、アリアのほうを向いた。目を細めて僅かな笑みを作って。

一抱えはある薔薇の花束を、アリアの前に差し出した。

「イブの夜、何処で何をしていたかは訊かない。だが、これだけは覚えておいてほしい。俺はお前を愛している」

ヒロの言葉が痛く、胸に突き刺さった。

「お前を、愛している」

そう繰り返すように囁いて、ヒロは花束をパサリとその場に落とした。真紅の花弁が足元に数枚、はらはらと散った。

ヒロは愛しむような瞳で見つめて、躊躇いがちにアリアを抱き締めた。まるで、硝子細工でも扱うように。拒否を恐れているかのように、アリアは感じた。

捨てられた子犬が主人を探している。そんな、心細そうな瞳。ヒロに出会うまで、自分がしていた同じ瞳。

アリアはごく自然に、ヒロの背に両腕を回した。

そして、きつく、きつく、抱き締めた。

離れられない。同じ瞳のヒロを一人にできない。ヒロも自分を必要としているのだから。

足元の、真紅の薔薇が仄かに甘い匂いを放って二人を包んだ。

アリアは自分の気持ち……東十無への思いを、心の奥深くに沈み込ませるしかなかった。

30・それぞれの思い

元の鞘に納まったただけのこと。

アリアはそう自分を納得させた。

ランチに行こうとヒロに誘われたが、旭川から帰ってきたばかりで、まだ疲れているからと理由をつけて断った。

マンションまで送るとも言われたが、少し歩きたいからと、それも断ってその場で別れた。

ヒロはきつと、もう少し二人で過ごしたかったのだろう。それはアリアにもわかっていた。

けれども、ヒロと一緒にいると気詰まりしてしまい、今はとにかく早く一人になって肩の力を抜きたいとアリアは思った。

例のファイルは、帰りがけにヒロへ渡してしまった。アリアはこっそり見てみようとも思ったが、見たからといって何がどうなるものでもないし、ヒロが絶対に見るなと強行に指示していたから、見るのが何か恐ろしくも感じていた。

アリアは鮮やかな真紅の薔薇を、両腕で抱えるようにして持ち、カールのかかった長い髪を冷たい風になびかせて、うつろな瞳で、もの憂げな夢遊病者のようにふらふらと歩いた。

その姿は、雑踏の中で際立って奇異で人目を引き、道行く人はすれ違いざまにアリアのほうを振り返った。

だが、アリアはそんな視線にも気づかないでいた。

ヒロとアリアは一对の車輪のようだ。どちらかが欠けるともう片方も回らず、機能しなくなる。

ずっと今まで、離れようにも離れられない関係だった。だから、十無への思いを封印してヒロとの関係を優先してそれを維持するようにとった行動は、アリアとしてはごく自然な選択だった。

だが、心の中に残ったこの空虚感、消化しきれない自分の感情に、アリアはやるせなさも感じていた。

これでいいのだと思う気持ちと、何か違つと感じている相反する気持ち葛藤し、心の歪みがきしきしと音を立てて軋んだ。

これでいい。これで、きつと……。

アリアは自分を納得させるように、心の中で繰り返して呟やいてみた。

ロングコトの裾がフレアスカートと共に、一瞬、強いビル風になびいた。

自分に絡まった複雑な糸が、風に吹き飛んでしまえばいいのに。無駄なあがきと思いつつ、そんなことを願ってみる。

神様なんて信じないけれど、もし、僅かでも幸運というものがあるならば、せめて、十無と今までの関係を維持できますように。

犯罪者を追う刑事の眼でもいい。追つてきて、そして忘れないでほしい。

アリアはすぎる思いで、心からそう願った。

街はすっかりクリスマスの面影はなくなり、門松が飾られ気ぜわしかった。行き交う人も、なんとなく浮き足立って見えた。

正月なんて何もいいことはない。

一般の家庭を体験したことがないアリアは、家族行事を忌み嫌っていた。いい思い出は何もない。この時期、家族連れで賑わつて世間から取り残された感が一層強くなる。物心ついた頃から、母に置き去りにされて一人で過ごした正月。

アリアは何もかも考えることがいちいち暗くなつてしまつたのだ。だが、今が最悪なら明日は今日よりいいはずだ。多分……。

柚子に心配をかけないように自分を励まして、少し気持ちを軽くしたところで、アリアはずしりと重い薔薇の花束を抱えて柚子の待つマンションへ帰宅した。

アリアと別れてから、車を首都高へ走らせ、ヒロはため息をついた。多分、あいつは愛の告白とは受け取っていないのだろう。今回も。言うだけ無駄だと思つたが、つい口をついて出た言葉。

愛している。

ヒロは今まで何度繰り返し伝えたことか。

ヒロはそのたびに絶望した。むなしく空回りする言葉。いつまで経っても届かない思い。恋人への愛と家族への愛情。ボタンはいつまでも掛け違えられ、アリアによって直されることはないのだった。まもなく渋滞に巻き込まれて、車はのろのろ運転を始めた。

ヒロは懐を探って煙草ケースを取り出したが、中は空だった。

「ちっ」

短く舌打ちし、車内にある閉まらなくなった灰皿に目を移した。

そこには山盛りの吸殻が、窮屈そうに詰め込まれていた。

「肺癌へ一直線だな。早死にして地獄にでも落ちた方が身のためかな」

ヒロは自虐的な、歪んだ笑みを浮かべた。

師走の東京は一層渋滞が激しかった。ヒロは首都高速の上空を覆う、光化学スモッグで濁った空を見上げた。それは、自分の肺を写しているようだ。とヒロは思った。

「はい……大変申し訳ありません。こちらの不備です」

話は前日に戻り、音江榎は探偵事務所副所長として、姿の見えない電話の相手に向かって、夜遅く、アパートの自室で恐縮しながら深々と頭を下げたのだった。

東昇が来てファイルを盗まれたと知った朝、昇が帰ってから、慌てて依頼人の美原ななにメールで連絡し、榎は会って謝罪したいと申し出たのだった。

だが、直ぐに丁寧な断わりの返信が届いた。どうやら、ななは夫の美原博一の目が気になっているようだった。

電話も自分の方から掛けるから、それまで待つようと、メールの内容は続いていた。

榎は連絡先として、美原ななからメールアドレスしか知らされていないなかった。

依頼人の正体がわかり、ななの身元がはっきりしている今は、自宅の電話番号も確認済みだったが、ななの夫には調査のことは一切秘密にしているようなので、まさかそこへ掛けるわけにはいかなかったのだ。

槿はただひたすら、ななからの連絡をじっと待つしかなかった。お陰で、一日中、携帯電話が鳴るたびに、びくびくしながら仕事をしていた。

そして夜十時過ぎになり、ようやく美原ななから連絡が入ったのだ。電話の向こうからは自動車内と思われる、FMラジオの音が微かに聞こえてきた。

「……ふん、そう。謝っても、済んだことは元に戻らないわ。こちらの手の内を、ヒロが知ってしまったという損失は大きいのよ。いたい、どういふ誠意を見せてくれるのかしら？」

ななは鼻であしらうように言った。

「……調査料金はいただきますせん。これからの調査も、今後一切」「あなた、わかっていないわね。お金はいいのよ、私が欲しいのは情報なの」

槿は意を決しての提起をしたつもりだったが、相反して、ななからは呆れたようなため息交じりの冷たい反応が返ってきた。

だが、槿はそれ以上の方法を思いつくことができず、硬直してしまった。

「そうねえ、例えばあなたが定期的にくれた情報、それ以外に付加価値のある情報が欲しいわ」

槿はななの言っている意味が分からず、「は？」と間の抜けた返事をした。

「だ、か、ら、私が何のために、調査依頼しているのか、忘れたの？ あの子を取り戻すためよ。ヒロから、あの子を、取り戻す。その為の、情報。それで、許してあげる。……探偵事務所って、信用が、第一よね？」

応じなければ何をされるかわからない。槿はそう感じた。低い声

音でゆつくりと、一言一言を区切りながら、人を言いくるめるように話す、ななの口ぶりは、負い目のある榎を追い詰めて畏怖を植え付けるのに充分だった。

脅しにも似た要求に、榎は生唾を飲み込んだ。

ななが言わんとしていることは、榎にも理解できた。

情報を盗まれた探偵事務所の不手際。それを流布されれば、事務所は終わりだ。

「私があなただったら……そうねえ、犯罪の証拠を見つかるか、あの子の弱点を見つけてつくか。ま、あなたにそれだけの力量を求めても無理があると思うから、とりあえず、あの子やヒロが関わったと思われる事件を、全て洗い出して報告して頂戴。それならできるわね？」

ななの屈辱的な言葉に、探偵としての資質までも値踏みされたように、内心、榎ははらわたが煮えくり返っていた。

だが、非がある榎には、はいと力なく返事をする以外なかった。

「ああ、それともう一つ。あの双子にあの子を近づけないで。悪い虫がつくと困るの。これは言わなくても大丈夫だったかしら？」

ふふつと、ななは鼻で嘲るように笑ってからこう付け加えた。

「どんな手を使ってもいいわ。私もそれには協力を惜しまないから、出来ることがあれば、何でも言っ頂戴。あなたの利益にもなるでしょう？」

「わかりました……」

榎は魂の抜けたような、機械的な返事をした。

人を好きになる気持ちは、誰かに何か言われたところで変わることはない、榎は充分過ぎるくらいわかっていた。

東昇が振り向いてくれるまで、待つ覚悟をしていたつもりだったが、今回、坂本周に惹かれてしまった自分の脆さを、あからさまに思い知らされ、自分はこんなに弱い存在だったのかと、榎は打ちのめされていた。

榎は自立した女を演じるほど、強くはないと自覚していた。

二十七歳になり、結婚式の晴れ舞台に立った友人を、何度となく見送ってきた。

家庭に落ち着いた友人達の話題は、子供のことが中心だ。入り込めない話題に、一人浮いてしまう。

そして、彼女達は独身時代にはなかった苦労があるのだと、さも大変そうに愚痴をこぼす。

しかし、榎にはそれすらも、羨ましく思えてしまうのだった。

三十代になっても、このままずっと一人なのだろうかという焦りもあった。

だが、副所長として働き、独身を謳歌しているように見える榎に、友人は羨望の眼差しを向けるのだ。

とりあえず、皆の前では榎はキャリアウーマンを頑張ってみた。

こんなの、自分じゃない。

榎はそんな自分に疲れていた。今の自分は仮のものだ。本当じゃない。

そして、焦りのある榎は、美原なの言葉にすっぱりと落ちていったのだった。

ななは何をどう協力するというのか。そんなことは榎には想像もつかないことだったが、ななの自信に満ちた断言するような言葉を聞くと、頼めば何でもしてくれる、力強い協力者を得たような気がしてしまうから不思議だった。

美原なの一言で、榎は容易に懐柔されて、榎はななの持ち駒となってしまうのだ。

お見合いの休暇後、久しぶりの出勤は、東十無にとってかなり憂鬱だった。

昨夜、帰京してから夕食もとらずに、早い時間からベッドへ沈んで朝まで寝てしまった。

先方から断られたことを、上司にも説明しなければならぬ。

ひょっとして、もう耳に入っているのかもしれない。きつと、とん

とんと肩を叩かれ、またいい縁談があるさ。などと、同情の目を向けられて慰められるのだ。

同僚からも冷やかしの目で見られるに違いない。噂雀達が面白おかしく尾ひれをつけて、暫くはさえずりを止めないだろう。

その光景が容易に想像でき、妙にリアルに十無の目に浮かんだ。

昇はまだ旭川に滞在していて、十無のそんなぼやきを聞いてくれる相手はいなかった。

気が重い十無は、一人寂しく食卓テブルについてテレビのニュースをうつろに眺め、朝食のトストを口にほおばった。

珈棑を流し込むようにして一気に飲んでから、行くしかない、自分に気合を入れるように大声で独り言を発し、十無は椅子から立ち上がった。

言いたい奴には言わせておけばいい。こんな私的なことで、仕事をおろそかにはできない。

十無は自分に言い聞かせて玄関を出た。

同時刻、東昇はまだ旭川の寒空の下にいた。

十無と行動を共にしたら、道中につい口を滑らせて、アリアが坂本周だったと口走ってしまいそうだった。

だが、それ以上に音江槇のことが気がかりだった。

美原ななに何を指示されているのか。とうとう昇には、はっきりと教えてくれなかった。

心配をかけたくないから、父には言わないで。自分でけりをつけるからと、懇願する音江槇の、小鹿のように怯えた瞳に、昇は強く言い返せなかった。

本当に黙っていて良かったのか。

昇は今も、自分の判断に自信がなかった。

槇にとつて、美原ななどの関わりは決してプラスにはならない。美原ななは一癖ありそうだという直感が昇にはあった。それは、槇の手に余る。

下手をすると、榎はいいように使われ、ぼろぼろにされて潰されるのではないかとという危惧もあった。

昇は榎をマークしてみたが、なかなかの依頼のことが発覚した昨日の今日で、これといった収穫はなかった。

榎も昇の目を気にして用心深く行動しているようで、美原ななどの連絡は、自宅からしかおこなっていないようだった。

榎の部屋に、盗聴器をつけようかとまで悩んだが、さすがに若い女性の一人暮らしの部屋を盗聴するのは、はばかられた。

厄介だ。でも、このまま放っておいていいのか。

昇は自問した。

榎の、昇に対する気持ちにも、気づいていないわけではなかった。

それに応えることができない昇は、一定の距離をおいて気づかないふりを通してきた。

幼馴染で職場の上司という、憎まれ口を気安く叩ける関係を、昇は壊したくなかった。逃げ腰の態度をとり続けて申し訳ないという思いがあった。

だから、榎には笑顔でいてほしい。幸せになってほしいと昇は強く願っていた。

「……これは、俺のエゴだな」

昇は榎の車を、注意深く尾行しながら呟いた。

アリアに向かって、余裕の笑みを見せた柚子は、内心、旭川で何があったのか聞きたくてうずうずしていた。

数日は、アリアが話してくれるのをじっと大人しく待っていた柚子だったが、アリアは一向に話しそうもなく、柚子はとうとう痺れを切らして行動に出た。

といっても、まともに訊いてもアリアは何も話さないことを充分承知していたので、柚子は一番ガードの崩れやすそうなところをつつくことにした。

それは、東十無。

一見、口が硬そうに見えるが、アリアのことになるとぼろぼろとほろほろびが出てくるのだ。

柚子はいつの間にか、十無の携帯電話の番号も手に入れていた。そして、アリアが外出した際に電話を掛けた。

「十無、久しぶり」

「失礼ですが、どなたですか？」

「柚子です。旭川ではすごく大変だったのねえ」

柚子がかまをかけると、十無は受話器の向こうで絶句した。

「……俺を、呼び捨てにするな」

十無は辛うじてそう言い返したが、かなり動揺しているようだった。

「ふーん……やっぱり、元気ないわね」

「なんだよ、昇の奴、あれほど言うなとっておいたのに」

「でも、聞いてちゃった」

「おい、誰にも言うな。見合いがだめだったのはともかく、男に告白されたなんて、署に知れたらそれこそ、噂話の餌食にされる」

話を逸らそうとしていた十無だったが、柚子が容赦なく切りこみ、たじたじとなって、早くも話を誘導されてしまった。

「誰にも言わないわ。あんまり十無が可哀想だから」

柚子は易々と情報を手に入れることができ、ご機嫌でそう言った。そういうことか。アリアは何を血迷ったのか、坂本周の姿で十無に告白したのだ。

ちよつとつつけば、ぼろぼろとこぼれる情報。柚子がうまいのか。十無が落ちやすいのか。柚子はうまくいき過ぎて、笑いが止まらない気分だった。

アリアはそれで落ち込んでいるのだ。

つい暴走して、どうしていいのかわからなくなったのか。

さて、どう料理をしようかと、柚子は楽しみながら次の手を考えた。「ねえ、職場で体面を保つための妙案があるの。お見合いはだめだったけれど、そんなのもう必要ないんだって思わせる方法が」

「俺のことは、そつとおいてくれ」

「アリアが協力してくれるわ」

それまで情けない声を出していた十無が、アリアの名を聞いた途端、声を荒げた。

「アリアには絶対言うな」

坂本周はアリアなのには、言うわけにはいかない。

だけど、男に告白されたこと、そんなに隠したいことなのか。好かれるってことは良いことなのに。

柚子は首を傾げた。

「おい、俺は忙しいんだ。もう切るぞ」

「ちよつと待って……」

柚子がそう呼びかけたが、電話は切られてしまった。

「もう……いいわ、勝手に進めちゃうから」

柚子は、早速思いついたことを行動に移した。

31・悪戯心と本心と

その日の夜、寝入りばなに東十無の携帯電話が鳴った。

「見合い相手に振られたんだって？ 残念だったね。もしかして、職場で肩身が狭い？」

同情するようなアリアの言葉に、十無は平静を装って声のトーンを変えずに「別に」と答えた。

だが内心では、舌打ちをして、柚子め早速アリアに話したなど、文句を吐いていた。

実際、アリアの言った通りだった。上司に報告すると直ぐ、噂が瞬く間に署内に広まった。

是非にといわれていった見合いのはずなのに、先方から断られたということは、やっぱり女とはうまくいかないのだという、尾ひれがついた噂。

十無の耳には直接届くことはなかったが、やはり空気で感じ取られる、同情と好奇の目。それで今日一日、署内にいづらくて、十無は何かと理由をつけて出歩いて過ごしたのだ。

「……私にまで、強がらなくてもいいのに」

「泥棒に心配してもらうことでもない」

「ま、そうだね。じゃ、また」

一言、嫌味でも返ってくるかと思いきや、いやに素直に電話が終わったので、十無は少し拍子抜けした。何か用があったんじゃないかとも思ったが、仕事の疲れが残っていて、あまり深く考えるのも面倒になり、缶ビールを飲んで眠ったのだった。

翌日、午前十一時過ぎ、署内で書類作成をしていた東十無のところへ、とんでもない来客があった。

同僚達が興味津々に注目している中、十無は刑事課の扉付近に立っている、全く見覚えのないその若い女性の前で困惑していた。

「あの、誰かと間違えていませんか。俺の双子の弟とか」

「十無、酷い。職場まで来たのは悪かったわ。でも、そんな言い方しなくても」

栗色のセミロングヘアを揺らしながら、眉を寄せて首を傾げたその美しい女性は、上目使いに十無を見つめている。

十無の背後から感じ取れる視線。十無は刑事課の同僚達が、注意深く聞き耳を立て、全神経を二人に向けているような気がした。

これはどうということだ。

さっぱりわけがわからなかったが、十無はこれ以上、噂話の中心人物になりたくないと思い、彼女を促して部屋を出ようとした。

「私、別にお弁当を届けに来ただけだから……」

その声は、刑事課全体に響いた。

「東、色男だねえ」などと言う、年配刑事の冷やかしの声が聞こえた。

十無は余計なことを言うなと苛つきながら、その女性を部屋の外へ押しやって廊下へ出た。

「俺は君とは面識がない。これは何の真似だ」

「まだわからないの？」

彼女は目を細めて、含み笑いをしてから、急に声色が低くなって聞き覚えのある声で「十無」と名を呼んだ。

「へ？」

十無は思わず、気が抜けたような声になった。

聞き慣れた小憎らしいアルトの声。この声の主は、毎日振り回されているのだ。

まったく、小悪魔の、アリアめ！

「お前なあ」

十無は急に言葉が柔らかくなり、親しい口調に変わった。怒った顔を作ろうとしたが、アリアだとわかると、嬉しくて顔が緩んでしまい、どうしてもにやけてしまった。

それを取り繕うように、十無は右拳を握ってアリアの頭をこつんと

小突いた。

「ふふ、わからなかった？ どうかこれ、十無の好みの女性？」
アリアはエンジ色のロングコートの下に着た、膝下までの桃色の
ニットワンピースの裾を少し持ち上げておどけて見せた。

柔らかい雰囲気、大学に通うお嬢さんという感じのアリアを、十無
は可愛いと思った。

「何しに来た？」

そんな感情をひた隠し、十無は勤めて難しい顔をした。

「だ、か、ら、お弁当」

桜色の頬に笑みを浮かべたアリアから、十無の目の前に、ピンク
の花柄のハンカチに包まれたお弁当が突き出された。

「お弁当？」

十無は腕組をして、その弁当をじつと睨んだ。

アリアに頼んだ覚えはないし、誰かにアリアが頼まれて持ってき
たということもあり得ない。とすると。

「いいから、これ、食べて」

押し付けられるように、十無は弁当を渡された。

「これ、お前が作った？」

「まさか！」

アリアは十無の耳の側に顔を寄せて、「柚子が作ったの」と声を
潜めて言った。

そして、周囲に目配せして誰も見ていないことを確かめてからこう
言ったのだ。

「これで、十無も彼女がいるということになるでしょ」

成る程。若い女性が手作りお弁当を持って、いそいそと職場に顔
を出す。

確かに、それで彼女がいると印象付けることができるわけだ。

だが、泥棒に、アリアにそこまで心配されていたのか。それって、
少し自惚れてもいいのだろうか。アリアはもしかして自分のことを

……。

十無はそんなことを考えながら、じつとアリアを見つめていたが、胸元に光るネックレスを見つけて目を疑った。

先に丸いボール状のトップがついた、シンプルなプラチナネックレス。それは見覚えのあるものだった。閉店間際のデパートで、十無がアリアに贈ろうと、思わず衝動買いをした物とそっくり同じなのだ。

坂本君に渡したはずだ。同じものは売っているが、偶然にしてはでき過ぎている。

「すみません、五分程で戻りますから」

十無は刑事部屋にある自分の机に弁当を置きながら、そう断りを入れ、「おう、ゆっくりしてきていいぞ」と言う冷やかしの声を後に、アリアを別の場所へと引っ張って行った。

といつても、何処も人がいないところはなく、結局、自分の車を停めている屋内駐車場へ落ち着くしかなかった。

「おい、そのネックレス」

車と車の間で立ち止まって、十無はときどきしながら早速切り出した。

「ああ、これ？ Dが誰かから貰ったらしくて、自分の好みじゃないからって、くれたただけけど。これがどうかした？」

ということは、坂本君がDに渡したということか。

「坂本周っていう奴を、知らないか？」

「誰？ それ」

「いや……」

坂本周はアリアではないのか。でも、違ったら。男に告白されたなんて絶対言えない。言いたくない。きつとアリアに一笑に付されて終わる。でも……。

十無は喉元まで出かかった言葉を、心の引き出しに再び仕舞い込んだ。

アリアは思案顔の十無に向かって静かに微笑んでいた。

薄暗がりの排気ガスの臭いがする駐車場で、屈託なく微笑むアリア

の笑顔が眩しい。自分だけに向けられた笑顔。ずっと独り占めできたらどんなに嬉しいことか。

十無の胸の奥が熱くなった。

女子大生にしか見えないアリアを目の前にして、十無は無性にアリアを抱き締めたくなった。

だめだ、アリアが可愛い。

「俺、」

手を伸ばせば届く位置に立っているアリア。十無はアリアの肩に手をかけて衝動的に抱き寄せてしまった。

「十無、あの、ちょっと」

困惑顔のアリアの顎を手で引き、十無はそのままキスをしようとした。

と、唇が触れそうなほど近づいたその時、手のひら大の、なにやら丸くて柔らかい透明な物体が、アリアのワンピースの中から、足元にすんと落ちた。

「もう、そんなにぎゅってするから、パットが……」

アリアは屈んで、その柔らかい物体を拾い上げた。どうやらそれは、胸元に入れるジェル状パットらしい。

「う、ごめん」

やっぱり男だよな。

パットが十無を現実に戻した。

「ちょっと、グラマーにしすぎたかな。重くて落ちちゃった」

アリアが悪戯っ子のように、舌を出した。

「何処から見ても、女の子に見える自信はあるけれど、こればかりはね。十無、私に惚れちゃった？」

ぼおつと突っ立っている十無に、「私、可愛い女の子に見えるでしょ？」と、アリアは自信あり気に微笑んだ。

「莫迦、人が通ったから、恋人らしくカモフラージュしただけだ」

勿論、誰も通ってはいない。口からのでまかせだった。

「なあんだ」

なあんだって、それはどういう意味だ。残念という意味なのか。

十無はアリアの言葉にどきまぎして敏感に反応した。

「じゃ、このお礼は仕事を程ほどに手を抜いてくれるだけでいいから」

「そんなことができるか。それに、こんなことを頼んだ覚えはない」

「そっか、残念。……早く、本当に彼女ができるといいね」

「おまえは、お前はいいの？」

十無にはその質問が精一杯だった。

「私は……袖子がいいいい」

袖子？ アリアは袖子が好きなのか。

「それに、ヒロとDと」

答えになっていない。

十無はため息をついた。

「Dとは親しいのか」

「え？ まあ、時々会うことはあるけれど」

「その、Dとお前ってどういう」

「憧れの人かなあ。『仕事』も手早いし、素敵だと思う」

微妙な答えをするな！

「十無」

アリアはにつこりすると、いきなり十無の背広の襟首を両手で掴み、体を寄せて唇を合わせた。

柔らかい唇の感触が、十無の頭を混乱させた。

何で……どうして……どういことだ。どうなっているんだ！

「お、おまえ、男なんだから。俺をからかうな！」

十無はとりあえず、照れ隠しに叫んでいた。

「さっき私にキスしようとして、驚かせたお返し」

アリアはにやりとしてそう言い、パットを持った手を振りながら駐車場を出て行った。

十無はぼかんと口を開けてその姿を見送った。

「まったく、やられた。俺の完全な負けだ」

アリアに振り回されっぱなしか。惚れた弱みだ、仕方ないか。このまま俺は三十歳を迎えてしまいうさだ。それはそれでいいか。

十無は諦めきったような苦笑いをして、頭をかいた。

暫くして、誰かが十無の『男なんだから』と言う叫び声を聞いたのか、署内では十無の彼女はニューハーフだという噂が、まことしやかに流れたのだった。

昼下がり。柚子が紅茶を飲みながら、ソファでまどろんでいると、アリアがいそいそと帰ってきた。

「そんなにおめかしをして、お弁当は何処で食べてきたの？」

「うん、ちよつとね」

アリアは上機嫌で答えたのだが、柚子はその訳も知っていたし、アリアがどこに行つて来たのかもわかっていた。

柚子がそれとなくアリアをたきつけた張本人だったのだから。

「十無が署内で酷い言われようなんだって。見合いも断られちゃつて、肩身が狭いみたい」

前日、アリアの前で一言、柚子がそう言うだけで充分だった。

アリアは新聞を見ながら、「ふうん」と、聞き流しているように返事をしていたが、柚子の思惑通り、今朝になってアリアはしつかりと行動に移したのだった。

それで柚子は確信したのだ。

アリアは十無が好きなんだ。

柚子は初めてボーイフレンドを連れてきた我が子を、ハラハラしながら見つめる母親のような、そんな気持ちになっていた。

少し寂しいような、それでいて嬉しいような、なんともいえぬ感情。

「何にせよ、アリアは女の子として成長しているんだわ」

半分ほど残っていた紅茶を一息に飲み干し、変装を解きに自室へ行ったアリアを横目で見ながら、柚子は女子高生とは思えない、保護者のような感想を口にして、にっこり微笑んだ。

柚子はキッチンへ行ってティーカップを洗いながら、シンクの前にある小さな窓を覗き込んだ。

ぎゅぎゅぎゅ詰めに立ち並ぶ家々の屋根の上に、代わり映えのしない灰色の空が広がっていた。

「東京は春が早いかしら。そうだといいな」

年越しもこれからだというのに、柚子は鼻歌混じりで気分はもう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207a/>

地方都市物語・5・氷点下15度のイブ

2011年9月29日21時38分発行